Eternal a Contract

彩世 幻夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｔｅｒｎａｌ　ａ　Ｃｏｎｔｒａｃｔ

【Ｎコード】
Ｎ４５４１Ｚ

【作者名】
彩世　幻夜

【あらすじ】
それは、永久の約束。
それは、魂を懸けて誓った大事な誓約。
約定を果たすため、命を懸けて廻した運命の歯車が、時を越えて噛み合い、新たな物語が今、回りだした――。

第壱話　ｔｈｅ　ｒｉｎｇ　ｏｆ　ａ　ｂｅｌｌ（前書き）

※この作品は、吸血鬼モノです。
※吸血シーンや宗教的表現、また、バトルシーンにおける多少の残虐表現が含まれます。
※恋愛を描いています。１８禁表現はありませんが、軽めの性的描写があります。
※苦手な方はご遠慮下さい。

◆評価・感想など頂けましたら、嬉しいです。

第壱話　the ring of a bell

「ハロウィンパーティ？」
パンっ、と顔の前で手を合わせた彼が差し出した招待状（カード）に目を落とす。
「頼むよ千恵（ちえ）……助けると思って！　一緒に来てくれよ」
そう言って、今度は白い封筒を差し出し、中からチケットを二枚出し、机の上に置く。
パーティーに行くのに必要なチケットだ。見ると、右端に小さく￥１２００と書かれている。
「あ、大丈夫！　そのチケット、兄貴に貰ったヤツだから」
長年、自宅の隣人兼幼馴染みの腐れ縁である彼に誘われているのは、駅前にあるライブハウスで行われるハロウィンイベントだ。
「でも、夜１０時からって……ちょっと遅くない？」
カードに書かれた時間に渋い顔をすると、すかさず、
「それも大丈夫、俺が責任持って送るし。それでも心配なら兄貴に車出させるから！」
と、畳み掛けるも、
「……って、千恵ならそういう心配はいらないだろうけどさ」
と、余計なひと言を後にくっつけるのが夏也（なつや）だ。
「そのパーティーライブ、香奈（かな）ちゃんも出るんだ」
夏也の兄で、やはり幼馴染みの悠（はるか）は、大学の友人たちと組んでバンドをやっている。
その兄にパシられる格好で出入りしていた例のライブハウスで彼がどっぷりハマり込んだのが、何とかいうバンドでヴォーカルを務めているという“香奈”という女の子で。
「いつもみたいに、悠兄（はるにい）に付いて行くんじゃタメなの？」
「それだと俺、裏方にしか出入り出来ないから、香奈ちゃんのライブが見られないんだよ。でも表から入るには……」

机に置かれた二枚のペアチケット。
「ハロウィンてさ、ヨーロッパとかアメリカとかの行事だろ？だから、あっちの習慣に習おうって事でさ……」
つまり、男女ペアでなければライブハウスに入る事すら出来ない、という訳だ。
「こんな事頼めるの、千恵しかいないんだよ、頼む！」
「私、こういう場所は右も左も分からないよ？　こういうの、風花の方が詳しいと思うんだけど」
千恵は、もう一人の幼馴染みの親友に話を振った。
「ごめん、私その日は都合つかなくて」
だが、彼女は意味ありげな目配せを夏也に送りながら肩をすくめた。
「なあ、頼むよ。飲み物代くらいは奢るからさ。香奈ちゃん以外にも幾つかのバンドがライブやるんだ。行ってみれば千恵も気に入るバンドがあるかもだぜ？」
夏也の台詞に休み時間の終了を告げるチャイムと風花の舌打ちが被る。
「まあ、私でいいなら……」
「いいのか？　助かる！」
小躍りでもしだしそうな軽やかな足取りで自分の席へと戻っていく彼を見送りながら千恵は小さくため息をつき、机に残されたカードとチケットを見下ろす。
「１０月３１日……、か……」
浮かれ切った幼馴染みはすっかり忘れているようだが。
（誕生日……なんだけどな。まぁ、夏也にそんな心遣いを期待するだけ無駄なのはよーく分かってるけどさ）
千恵の肩を軽く二度叩いて、風花も席へと戻る。
（まあ、家で一人きりで過ごすよりはマシか……）
もう一度ため息をついてから、机の上の紙片を封筒にしまい、それをクリアファイルに挟んで通学かばんのポケットに突っ込んだ。

そして、“その日”の夕刻。

玄関のチャイムが鳴った。

「おーい、準備できた？」

だが、こちらの応答を待つことなく玄関の扉が開き、玄関先から夏也の声が家中に響く。

遠慮なく靴を脱いでスリッパに履き替え、断りもなくとんとんと階段を上がって来た。

「準備はできてるけどさ、……ねぇ夏也。今さらだとは思うけど、女の子が一人で暮らしてるって分かってる家にずかずか上がり込むって……デリカシーって言葉の意味、知ってる？」

「知ってる、知ってる。でも、お前相手じゃマジ今さらだろ？」

一応パーティーなのだからと、そこそこめかし込んだつもりだった千恵に、夏也はへらりと笑って言った。

その夏也は、全身真っ黒な装いの上からジャラジャラとごついシルバーアクセを幾つも身に纏っていた。それは正直――

「ちょっと、それ……悪趣味じゃない？」

「何だよ、ハロウィンて仮装パーティーなんだろ？　これ、吸血鬼（ヴァンパイア）のつもりの衣装なんだ。アクセ類はちょっと兄貴の部屋から失敬して……」

長々と己の装いについて語りに入ろうとする夏也に、千恵は

「……いいの？　早く行かないと“香奈ちゃん”のライブに間に合わないよ？」

冷たく水を差した。

そうして夏也に連れられて初めてくぐった扉の向こう。

扉を開けた瞬間、ワッと耳がおかしくなりそうな爆音の洗礼を浴びせられて怯んだ千恵の背を押し中へと入った夏也は、入口に立つ

店員に招待状（カード）を見せ、チケットを差し出す。
「ようこそ、いらっしゃいませ」
店員は受け取った紙片の代わりに、カゴに入ったキャンディーを手渡した。
「……これは？」
首を傾げた夏也に店員は意味深な笑みを浮かべる。
「今日は、ハロウィンですからね」
夏也はよく分かっていなさそうな顔をしたままそれを受け取り、千恵に押しつけて、
「俺、飲み物買ってくるから」
それだけ言うと、そのまま千恵を置いて人混みへ紛れて行ってしまった。

暗がりの中、チカチカとライトがうるさく点滅を繰り返し、自分の声すら叫ばなければ聞こえない程の大音声が狭い部屋の中を圧倒する中に、ごちゃごちゃと息が詰まる程人が溢れ返る。
その、混沌の中へと割って入っていく気にはなれず、千恵は壁に背を預け、小さく息を吐いた。
「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！　――君、一人なの？」
そんな彼女の前に立ち、ニッと魅惑的な笑みを浮かべながら声をかけたのは――圧縮された空間に在りながら、次元の違う存在感を身に纏（まと）った白い少年……いや、青年と呼ぶべきか迷う一人の男性。
「いえ、連れが……飲み物、取りに行っていて……」
問いに答えながら、首を傾げる。
「……あなたのパートナーは？」
今日のパーティーは、男女ペアでなければ参加できないはずなのに。
「僕は特別。……すぐに分かると思うよ？」
言いながら、彼は千恵の長い髪の一房を手に取った。
「ちょっと……何を……」

それを自らの口元に運び、そっと口付ける。
その一連の動作は流れるようで。
それが、あまりに自然な仕草で。
うっかり止めるタイミングを逃し、その行為を黙って見つめているしかなかった。
彼はクスッと意地悪く笑い、
「言ったでしょ、Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！“悪戯されたくなければお菓子を寄こせ！”……ってね。君は、僕に飴玉（キャンディー）をくれなかった」
わざと少し屈んで覗き込むような上目使いで千恵を見上げた。
破壊力のある美しい面（おもて）で。
乙女心をくすぐる表情（かお）で。
かすれたような甘い声音で。
とろけそうに甘やかなシチュエーションの中で。
――何故だろう。
心の中に、警鐘が鳴り響いた気がして。
利き過ぎの暖房で、頬は火照る様に熱いのに。
ゾクッと、冷たい何かが背筋を這い上る様な嫌な感覚を覚えた気がして。
知らず、息を詰めた。
「千恵ー？　おーい千恵、どこ行った？」
「……夏也」
人混みの向こうで聞こえた、間の抜けた幼馴染みの声が妙な緊張感を一気に弛緩させる。
詰めた息を大きく吐き出し、声の主を探して辺りを見回す。
……気付けば、彼の姿がない。
入れ替わる様に、
「ああ、いたいた。ほら、飲み物。……コーラで良かったよな？」
夏也がストローのささった透明なプラスチックカップに入った飲み物を差し出してきた。

「……うん」
「次に出てくるバンドの次が、香奈ちゃんの番なんだ。こんな端っこに居ないでもっと前に行こうぜ」
夏也は千恵の腕を掴んで、ステージ近くへ引っ張っていく。
「『杏杏（あんあん）』さん、ありがとうございました！　さぁ、次に登場するのはお待ちかねのこのバンド……『レイブンズ』だぁ！！」
司会進行のアナウンスがそう告げた途端、きゃぁぁ！　と女の子達の黄色い悲鳴が重なり、テンションが一気に膨れ上がる。
ステージ上の照明が、赤一色に切り替わり、目に痛いほどの赤い光が部屋を満たす。
――そして。ステージ上に現れた男を見て、千恵は目を見開いた。
「あれ……」
悲鳴の嵐の中、千恵の呟きを拾った夏也は面白くなさそうに、
「何だよ、お前もあれがいいのか？　ここの常連の女どもも大半がアイツのファンなんだよ。……まあ面（ツラ）が良いのは認めざるを得ないけどな。ああいう奴ってのは大体がだな――」
と愚痴りだす。
それを、遮る様に。
「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！　今宵は俺達にピッタリの夜だ！　さあお前ら！　俺達に生贄を寄こせ！」
ヴォーカルの彼がマイクに叫び、爆音の響く部屋中に彼の声が突き刺さる。
ワッと涌いた客席から、次々に色とりどりのキャンディがステージ上に投げ込まれる。
歓声の悲鳴の中、時折「京サマ～！！）」とか、「京ク～ン！」等と叫ぶ声が混じる。
あのヴォーカルは「京（ケイ）」というらしい。
成る程、パーティーの参加者ではなく出演者だったなら確かにパートナーは要らない。
だが……気のせいだろうか。

歌いながら、彼がちらちらとこちらばかりを窺っている気がするのは――

「キャー、今、京サマと目が合った！」

「ちょっと、今私の事見なかった？」

「京クンに見つめられちゃたー」

……いや。そんな台詞が前から後ろから、右から左から、引っ切り無しに聞こえてくるという事はやはり気のせいなどではない。

そう、思った瞬間。

再び背筋を冷たいものが這いあがる。

ステージライトを一身に浴び、輝く美しい人――。

これだけ多くの女の子を惹きつけてやまない甘い面（マスク）と美しい歌声。

彼は大きなバスケットを手に持ち、中身を鷲掴（わしづか）むと、ワッとそれを客席に撒き散らした。

赤い色紙で作られた紙吹雪が、熱くたぎる人々の頭上に降る。

それを目にした千恵の心は、……本当に、何故なのだろう……冷たい手に鷲掴みにされたように縮み上がった。

「次が、俺達の最後の一曲！　聞け！　『ブラッディ・ローズ』！」

叫んだ彼は、上着の胸ポケットに挿していた真っ赤なバラを抜き取り、客席へと投げた。

――真っ直ぐ、一寸違わず、千恵へと。

目の前に迫るそれを、反射的に受け取ってしまった千恵は、手の中の真っ赤なバラを震えながら見下ろした。

本当に、血の様な色をした真っ赤なバラ。千恵は無意識に一歩、二歩とステージから後ずさった。

「――千恵？」

蒼白な顔でガタガタ震える幼馴染みの様子に怪訝な顔で夏也が声をかける。

「ゴメン、夏也。……私、もう帰るね」

三歩、四歩。

そろそろと彼の傍を離れ、くるりと身体を反転させる。
ぎゅう詰めの人と人との隙間に自分の身体をねじ込むようにして、一刻も早くその場を離れたくて逸る心を抑えながら早足に出口へ向かう。
何故かは……やはり、分からない。
けれど、何かを求める様に。千恵は出口の扉をくぐり、狭くて急なコンクリの階段を駆け上がり。
そして、空に浮かぶ月を見上げた。
ツキン、と、訳もなく心が痛む。

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……

街外れに建つ古い教会の鐘の音が、真夜中の12時を告げる。
「……帰ろう」
凍える夜風に身を縮めながら、よく見知った街並みの中を歩き出す。

悲鳴が、聞こえた――。
そんな気がして、彼は目を開いた。
その目を上下左右に動かし、周囲の様子を探るが――目に映るのは闇色ただ一色(ひといろ)のみ。
だが、自分がひどく狭い場所に横たわっているらしい事だけは、身体に触れる硬くて冷たい感触から知れた。
吐いた吐息がすぐ目の前にあるらしい障害物に当たって、冷たい息が顔に吹きかかる。
強張り、思うように動かない手足を何とか持ち上げて、自分のすぐ真上にある障害物を押しのけ、開いた空間に満ちる空気を大きく吸い込んで。

彼はそこから上半身を起こし、左の後ろから右の後ろまで首の関節が許す限りぐるりと見回し――

「ここは……どこだ？」

茫然と呟き、そしてゆるゆると己の手に視線を落とし、開いた掌をじっと見つめ、

「私は……。私、は……？」

もう一度、周囲を見回して。……掌を、胸に当てた。

体温の感じられない、ひどく冷たい皮膚。そこには、心の臓の鼓動も感じられない。

だが、焦がれる様な熱っぽい衝動が、そこには確かにあった。

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……

突然、頭上で耳をつんざく大音声が響き渡る。

真夜中の１２時を告げる鐘の音が、無いはずの心鼓を無性に逸らせる。

（……行かなければ、ならない）

訳もなく、彼は思った。

ガチガチに固まり、出来の悪いカラクリの様にしか動かせない強張りきった全身の筋肉に鞭打って、彼は寝床（そこ）からのっそりと這い出た。

段を降り、幾列も並ぶ腰掛けと腰掛けの間の狭い通路をふらふらと、何度も腰掛けに身体をぶつけながら、その先にある出口の扉を目指して歩く。

一歩、また一歩。重たい足を運ぶ。

すぐ目の前の扉へ辿り着く――ただそれだけの行為（こと）で、体力も気力も根こそぎ失われていく様な感覚に、一歩進む毎（ごと）に次の一歩を踏み出す事を躊躇いたくなる……のに。

何故だろう。何か、どうしようもなく抗いがたい何かに惹かれる様に、彼は一歩、また一歩と歩を進める。

気の遠くなる様な。そんな一歩を重ね、重ねてようやく辿り着いた重々しい重厚な扉を、もう底をついて空っぽに近い最後の気力体力を限界まで振り絞り、全身で押し開ける。

開けた瞬間、すぐ目の前の空に浮かんだ大きな月が網膜に強く焼き付いた。

投げかけられる淡い月光が疲弊しきった身体を優しく包み、朦朧とまどろみかけていた意識を研ぎ澄ませていく。

彼は、思わず一つ大きく息を吐き出した。

よろよろと扉から離れ、荒れた砂利道を二歩、三歩、と歩いた所でがくりと崩折れ、地面に膝をついて蹲る。

それでも彼は疲労に震える手足を踏ん張り、再び立ち上がる。

焦がれる様な衝動は、刻一刻と時を重ねれば重ねただけ熱を帯びて燃えたぎり、“急げ、”と追い立てる。

ザリッ、と砂利の上で足を引きずるようにしながら、彼は心の指し示す方へと、精一杯の一歩を重ねていく。

「……行かなくては」

そう呟く彼の声を聞くのは、夜空に浮かぶ月だけ――……

第弐話　ｍｅｅｔ　ａｇａｉｎ

ライブハウスのある駅前の通りから千恵の家までは歩いても１５分ほどの距離にある。明るい時なら何でもない道のりだが、こんな時に一人で歩くのはあまり気分の良いものではない。

外気の冷たさ以上に心を占める氷塊が、重くのしかかる。

（早く帰って、暖かいホットミルクが飲みたい……）

歩く足が、早足から次第に小走りに、やがて駆け足へと逸る。

早く、早く――。

寝静まった住宅街の路地に、突如バイクのエンジン音が響いた。

それは千恵の背後から迫り、不意に路面が明るく照らし出された。

「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！　……こんな夜道で君、また一人なの？」

「……ケ、イ、……どうして――」

「つれない彼氏の代わりに君を奪いに来たんだよ」

「な、夏也は彼氏じゃ……。ううん、そうじゃなくて……」

「……おいで、僕のイヴ」

京は、千恵の腕をとると力任せに引き寄せ、バイクの後ろに乗せた。

「さあ、今宵は僕らに似合いの夜だ」

すぐさま、アクセルを一杯に吹かし、急発進させる。

千恵は振り落とされないよう、咄嗟に京にしがみ付くしかなくて。

「僕のイヴ。君のその甘い果実を、存分に楽しませて貰おう」

囁かれた甘いセリフに脳髄が痺れる。

バイクは物凄いスピードで、港への路をひた走る。この道の先にあるのは、人気のない海辺の倉庫街だ。

こんな時間にそんな場所へ向かう理由。どう考えても、嫌な予感しかしない。

だが、猛スピードで駆けるバイクの上では、彼の身体に縋る以外、

千恵にできる事など無い。
制限速度を無視したバイクは、１０分もかからず目的地に到着した。
バイクのエンジンを切れば、そこにはただ静かな波音だけがうるさくこだまする。
冷たく強張った身体をぎこちなくバイクから降ろし、千恵はそろそろと後ずさり――倉庫の壁に背をぶつけた。
「ああ……そんなに怯えなくても大丈夫だよ。すぐに済むからさ。痛いのも初めだけだし、慣れればむしろ……」
月を背に、京の顔が迫って来る。
熱っぽい白銀の瞳が見据えるのは、千恵の首筋。
「ヤツに負わされた傷を癒して、君を見つけるまでに百年かかったんだ。……もう、我慢も限界だよ」
京の唇から漏れる冷たい吐息が、脈打つ首筋にかかる。
訳も分からないまま、硬直した千恵はギュッと目を閉じた。
両の手の手首を片手で掴まれ、頭上で固定される。
もう片方の手が、首筋にかかる髪をさらい。
その吐息も、肌に触れる皮膚の感触も、ひどく冷たくて。……とても、生きた人間のものとは思えない。
「さあ、僕のイヴ。君はどんな味がするんだろうね……？」
視界が閉ざされた分、より鋭敏に研ぎ澄まされた聴覚が、耳元でささやかれたあの甘い声音に刺激され、思考が揺らぎ、乱れる。
ただ、“嫌だ”という強い感情だけが、千恵の脳裏に強く閃いて。
ボグッ、という鈍い音と共に突然両手の拘束が剥がれ、間近にあった気配が突如遠ざかる。
「……？」
恐る恐る開いた視界に映ったのは。
先程までは確かに無かったはずの、もう一人の男の姿。
ふらふらと、立っているのがやっとであるのが傍目にも一目瞭然な様子で、男は京と千恵との間に割って入り、千恵の前に立ちはだ

かる様にこちらに背を向け京と向き合った。
その男の背を、視界に収めた瞬間。
心臓が、爆発した。それくらい強い衝撃が、千恵の胸を揺るがした。
「那由他(なゆた)……お前！　生きていたのか！？」
頬を押さえて立ち上がった京が、憎々しげに男を睨みつけながら叫んだ。
「なゆ……た……」
京が叫んだその名を耳にした時。千恵の心臓が、もう一度爆発して跳ねた。
胸の内を怒涛のように満たしていくのは、言い様のない歓喜の渦。
ナユタなんて名前を、千恵は知らない。目の前の男の姿に見覚えもない。
「那由他……お前はまた、僕の邪魔をするのか！？」
低く、京は唸る。こちらを見据える赤く燃える瞳が那由他というらしい男と千恵とを刺し貫く。
しかし、心が先程の様に恐怖に縛られる事はなく。
代わりに心を占めるのは、焦がれる様な想い。心臓は力強く脈打っては沸き立つ血潮を全身に廻らせ、冷え切っていたはずの身体に徐々に熱がこもっていく。
とろりと、甘くて暖かい優しいものが、千恵の心の隙間を埋めていく。
――分からない。もうさっきからずっと、自分の心の内に沸き起こる幾多の感情の理由が分からない。
けれど、千恵の目からはとめどなく涙があふれ、頬を流れて落ちていく。
その男(ひと)に触れたくて。
恐らく初対面であろう、誰とも分からず得体も知れない異性相手に抱くにはどう考えても不相応な想いが、何故かどうしようもなく胸の奥を焼き焦がし――千恵は、背を預けていた倉庫の壁から離れ、

一歩、踏み出した。

「やっと見つけた、僕のイヴだ！　今度こそ、邪魔はさせない！」

京が叫び、地面を蹴ったのはそれとほぼ同時だった。

瞬間、京の姿が闇に融けて消えたのを、千恵の目が捉えるのと同時に、那由他の懐に京が現れ、その横っ面を殴り飛ばし、同時にぐしゃっ、と何かが潰れるような酷く嫌な音が千恵の耳に届く。

目と耳が伝えるその情報を、千恵の脳がまともに認識するより早く、爛々と不吉に輝く赤い瞳をギラつかせた京が、千恵の背を再び倉庫の壁に張り付けた。

「さあ、僕のイヴ……僕の永久（とわ）の糧（かて）となれ……」

言いながら開いた口からこぼれる真っ白い歯列――その、上あごに生える異様に大きな対の犬歯が、千恵の首筋に迫る。

だが、今度は千恵が目を閉じるより早く、京の襟首を掴んで力任せにその身体を引き倒す那由他の、血で真っ赤に染まった顔へと入れ替わる。

スプラッタ以外の何物でもないその姿は、大の男が悲鳴を上げてもおかしくないだろう程に酷いもので。

だが、千恵は何かを考えるより前に、反射的にその顔に手を伸ばそうとした。……その彼の瞳もまた、京と同じように赤く燃えているのを、確かに目にしていたのに。

胸に浮かぶのはやはり……恐怖ではなく、言い様のない喜びで。

「……那由他！！」

しかし、彼に伸ばした手が届くより前に、彼の手を逃れて起き上がった京が振り上げた拳から千恵を庇うように立った那由他の身体に加えられた衝撃に押しつぶされて意識が飛ぶ方が早かった。

「……那由他！！」

白銀の髪を振り乱し、殴りかかって来る少年とも青年とも称せそうなその男の拳から咄嗟に背後の少女を庇う。

腹に正面から入った拳の勢いを、自由の利かないままの身体では

充分に殺し切れずに、彼の身体は背後の壁面に叩きつけられる。――当然、壁と自分の背との間に挟まれた少女も、もろともに。

せめて、押し潰してしまわぬよう、反射的に腕を引き、背と壁の間に僅かな隙間をつくる。

――が、その分、肘と肩、そして後頭部を余計に酷くぶつけ、鈍い痛みに顔をしかめる。その直後、背後の少女の身体がふわりと彼の背にもたれかかってきた。

ハッと背後を見れば、気を失い、前屈みに倒れ込もうとする少女がいて。その身体を支えるべく、無意識のうちに腕を差し出す自分が居て。

先程から幾度も連呼され、自分が那由他という名であるらしい事は察せられた。

この少女をイヴとよぶあの男が、どうやら自分と並々ならぬ因縁のある相手であるらしい事も、さすがに察している。

……だが。少女を抱き止めた瞬間、冷え切り温もるはずのない身体が一気に燃え上がったその理由が、分からない。

けれど、目が覚めた瞬間から逸り続けた衝動が、この場所で彼女の姿を網膜に映した瞬間に、大いなる安堵と、突き上げる歓喜へと昇華していくのを感じたのは確かな事実で。

「私は……。彼女は……一体……？」

きゅっと、腕に閉じ込めた少女の身体を抱きすくめるだけで、失われていた全てが、甘く暖かい優しいもので補われていく気がする。

もっと、ずっと……永遠に、こうしていられたら――。

ほんの一瞬脳裏を過った想いは、無防備に晒したままだった背に迫りくる気配に掻き消された。

那由他は、腕の中の少女を横抱きに抱えなおし、やおら振り向くと人には不可能なスピードで殴りかかって来る男に、そのすらりと長くしなやかな脚を振り上げ、脳天目掛けて踵を思い切りめり込ませた。

その滑らかな一連の動きは、それまでのぎこちないカラクリの様

だったそれとは全くの別物だった。
彼女に触れている部分から流れ込む熱が、凍りついた全身を溶かしていく。
一気に漲る“熱（エネルギー）”が、空に浮かぶ月の加護を受けて更に増大していく。
強烈な踵落としの直撃を受け、地面に叩きつけられ身体を半分固いコンクリートにめり込ませながらもまだ立ち上がろうと地面に手をついた男に向けて、那由他はその“力（エネルギー）”の塊を無造作に投げつけた。
「……！」
途方もないエネルギーの塊は地面を抉りながら滑り、そのまま海へと落ちても尚、その海面を大いに荒ぶらせながら水平線の向こうまで音速で突き抜けていく。
地べたに伏せっていた為に全身でその直撃を浴びる事こそ免れたものの、身体の半身を根こそぎ灼（や）き尽くす衝撃をまともに喰らい、京は堪らず昏倒した。
相手がピクリとも動かなくなったのを確認してから、那由他は改めて腕の中の少女を見下ろした。
肩ほどまで伸ばした黒髪も、ほんのり化粧を施したまだ少し幼さの面影の残るあどけない寝顔も、貧乳とは言わないがどちらかと言えば小ぶりな胸も、どれもがそう取り立てて言う程魅力あるものとは言い難い。
……正直、何処にでも居そうな至って普通で平凡な少女。
少なくとも、外見だけを言うならそれ以上の感想を抱くのは難しい――はず、なのに。
淡い月明かりに照らされた少女の姿は、いくら見つめ続けても飽き足りない。
腕に感じる少女の重みを、いつまでも感じていたいと思う。無いはずの心鼓が踊る、この感情を何と言うのか……。
クシュン、と腕の中の少女がくしゃみをした。

那由他は目をぱちくりさせて少女を見る。
人ではない彼が空気の寒暖を意識する事はまず無い。だから、那由他は不思議そうに首を傾げた。
だが、少女がもう一度くしゃみをし、歯をかちかち言わせながら小刻みに身体を震わすのを見て、ようやく得心がいったように頷く。
「……そうか。寒いのか」
しかしそれが分かった所でどうしろというのか。
周囲は閑散とした倉庫街と、海とが広がるばかりの場所で。
自分のこの、冷たいばかりの身体では体温で温めてやる事も出来ない。
「……仕方が無いか」
那由他は、少女の身体を片腕で抱き直し、空いたもう片方の手の親指を口に含んでプチっと犬歯を皮膚に突き立てて傷を穿ち、溢れてきた血を数滴、少女の口に含ませる。
「飲め」
そして、命じる。
「お前の記憶を――お前の家の在り処を私に示せ」
那由他は、そっと目を閉じ、脳裏に浮かんできた景色に意識を集中させる。
「そうか、お前の名は愛羽千恵（あいばちえ）と言うのだな……」
その名を、下の上で転がす。
「千恵……」
その言霊は、この世のどんな飴玉よりも甘く蕩けそうな味がした。
那由他は、もう一度丁寧に千恵を抱き直し、静かにその場を離れ、歩き出した。
その背に、月の柔らかな光の加護を存分に受けながら。
そして、その場には気を失ったままの京だけが一人、残されたまま。
月はゆるゆると宙空から西の空へと降り、東の空に太陽の訪れを

予期させる淡い青が徐々に広がりを見せる。
それを待ちわびていたカモメがうるさく鳴きながら飛び交い始める頃。
「……那由他」
むくりと、京は身体を起こした。
「那由他。イヴは、僕のものだ――」

第参話　ｔａｋｅ　ｏｎ　ｏａｔｈ

悲しくて、悔しくて。
心にぽっかり空いた埋めようのない喪失感に、どうしようもないやるせなさ。
固くて冷たいそれに取りすがり、声を詰まらせながらむせび泣く。
冷徹なばかりの真っ黒い棺桶。蓋に描かれた銀の十字架（シルバークロス）は、この棺の中に納められたチエの大切な人を更に傷めつける為の印（マーク）。
（……せめて、安らかに眠らせて差し上げたいのに）
チエは己の無力を呪った。
「あなたは、悪魔に騙されていたのですよ」
憐憫の情を声音に乗せ、静かにそう言いながら千恵の肩に手を置くのは、この教会の神父を務める祓魔師（エクソシスト）。
チエの大切な人を、この棺に閉じ込めてしまった張本人である。
「彼は悪魔などではありません。……本当の悪魔に騙されているのはあなたの方です」
だが、海を渡ってこの国へとやって来てまだ日の浅い神父は、チエの言葉を肩をすくめただけで聞き流し、
「淑女（レディ）、あなたは悪魔のまやかしで混乱しているのですよ」
棺に取りすがるチエをそこから離す為に、肩に置いた手を引く。
「那由他様……申し訳ございません。今の私に、力が足りないばかりに……封印を解けず……苦しむあなたに寄り添う事すら叶わない……」
男の腕力の前に、女の力で抵抗するのは難しい。意思に反し、チエの身体は棺から引き剥がされる。
「ですが……お約束いたします。いつの日か必ず、あなたをここからお救いする術を携えて参りましょう」
チエは棺の中の彼に、誓いの言葉を捧げる。
「どうか……その日まで……」

しかし、その後に続ける言葉に詰まる。
「那由他様……」
最後にもう一度、愛しい人の名を棺に投げかけ――棺の安置された部屋の扉が無情にも閉じられ、彼との間に壁となって立ち塞がるのを、想いの心を断たれる痛みをじっと堪えながら眺める。
きゅっと、胸の前で固く拳を握り、その心の痛みに改めて強く誓う。
「必ず、戻ります。愛しい、あなたの許へ……」
今の自分ではいつまでもここに突っ立ていた所で出来る事など泣く事以外何一つ無い。
掴まれた腕を振り払い。
チエは教会に背を向け、歩き出した。――真夏の日差しが照りつける日なたの、その向こうへと。
「いつの日か、またお会い致しましょう……那由他様……」
最後にもう一度、再開の約束を小さく呟いて。
そして彼女は、この小さな港町の村を旅立った。
いつ終わるとも知れない旅路へと。
その背に、昼の１２時を告げる教会の鐘の音が響いて――

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……

「なゆた、さま……」
呟き、腫れぼったい目蓋を持ち上げる。……泣き過ぎたせいだろうか、頭が痛む。
「……目は、醒めたか？」
額に当てられた冷たい手の感触が気持ち良い。
遠くで、教会の鐘の音がする。ゆるゆると時計に目をやれば、針は十二時を指している。
「あれ……私……」
涙に滲む視界を乱暴に拭いながら、千恵は半身を起した。

「もう、良いのか？　……気分は――」
耳朶に響く、落ち着いた声音が心地良い。
「あ……、はい……」
ここは……保健室。
「……あれ、私、何でこんな所に――」
いるんだっけ、と。その先の思考へと頭を切り替える前に、背筋が凍る様なあの視線の記憶が蘇る。
「京……」

それは今朝の――HR（ホームルーム）が始まる少し前。
「昨日はどうしたんだよ、千恵？」
いつもと同じくがやがやと騒がしい教室で、そう夏也に問われ、千恵は予め用意していた答えを返した。
「ゴメン、人混みとか大音量に酔って気分が悪くなっちゃって」
「は、酔った……って、千恵が……？」
しかし、夏也は怪訝そうに眉をひそめた。
「乗り物はもちろん、遊園地のコーヒーカップをメチャメチャに回しまくってさえケロッと平気な顔してるお前が？？」
遊園地――と言ってもデートとかの話じゃない。大昔、夏也の家族と千恵の家族とで一緒に出かけた、まだ普通に幸せだった在りし日の記憶。
全く、こういう時、幼馴染みというのは厄介だ。なまじ互いを知り尽くしている分、この手の誤魔化しを成功させるのは至難の業だ。
――だが、真実を話した所で……どうなるというのだろう？
千恵はため息をついた。
京に港の倉庫街に無理矢理連れて行かれて襲われそうになった所を、見ず知らずの男に助けられて……その途中で気を失い、その後の記憶が一切無いまま、目を覚ましたらいつの間にか自宅のベッドの上で眠っていただなんて。

京の目が、赤く光って……まるで人じゃないみたいな動きで襲いかかって来て……。

そして、助けに入った見ず知らずのはずの男に胸を焦がしただなんて。

夏也どころか誰一人……正直、自分自身だって納得させられる自信が無い。

……昨日の様に、自分自身の預かり知らぬ心の奥の感情が、自分の制御の利かない場所で揺れ動くのは、何も初めてでは無い。これまで、幾度かそういう事はあった。

例えば、泊まりがけの旅行に行ったりして、この街を幾日か離れると、何故だかどうしようもなく不安な気持ちになる。

いつでも、何か欠けている気がして。

だが昨日、彼を見た瞬間、その欠けた部分の隙間を埋めてくれた甘くて暖かい優しい何かが、今朝起きて彼の姿を視界に収めることが叶わなかった時、再びそれが溶けて流れ出した。

そうして再び冷たく空いた心の隙間を、千恵は自覚せざるを得なかった。

チャイムが鳴る。HR開始の鐘。そしていつもと同じように、チャイムが鳴り終わるとほぼ同時に教室の前の扉が開き、担任の男性教師が教室に入って来る。

だが、今日に限ってはその後ろからもう一人、先生に続いて教室に入って来た。

瞬間、女子が浮足立った。

カツカツと、担任は黒板に白チョークで大きく彼の名を書き出した。

――百世京（ももせけい）

透き通るような白銀の髪。真っ白な肌。くりっと幼さを強調する丸っこい目に埋まる瞳の色は――髪色に比べて少し灰の色味の濃い白銀。

甘い面（マスク）に、魅惑的な笑みをのせて。

「転校生の百世君だ」
ごく短い、担任の紹介の後で、
「……皆さん、すでに僕の顔と名前はご存じいただいているかもしれませんが。改めまして、今日からお世話になります百世京です。放課後はバンドやってて。『レイブンズ』って言うんですけど。そこで僕はヴォーカルやってます。ちなみにこの髪と瞳の色はたった8分の1の北欧の血が強く出ちゃったせいで、僕自身は完全に日本人。もちろんカラオケとか大好きなんで。バンドの練習ある日はダメだけど、そうじゃない日はぜひ誘って貰えると嬉しいな」
……と、ライブのステージ上や、ましてやあの時の様な攻撃的な態度はおくびにも出さず、甘い声音で語る声を聞きながら。
千恵は、全身の血の気が一気に引いて行く音を、耳の奥で聞いた。恐怖に息を飲み。
怯えを隠す余裕さえ無い千恵を見つけた京は、楽しげな微笑みを浮かべてこちらに視線を向ける。
彼の視線に射竦(いすく)められた千恵の背筋を滑り落ちて行った氷塊が、全身の血を凍りつかせていく。
――千恵の精神が、その恐怖と緊張に耐えられたのはそこまでだった。
千恵は、教室で卒倒するという、夏也に言わせれば真夏に雪が降るくらいに珍しい失態を演じ、保健室にかつぎ込まれて――。

彼は一体何者……というかそもそも人間なのだろうか？
……人でないとするなら。一体、何だというのか。
「京、というのは昨日の男の名か？」
「……え？」
投げかけられた問いに、千恵は声の主を見上げた。
「……そうか。完全にのしたつもりだったが、日が昇るまでの僅かな時間にこれだけ回復できるとは……大したものだな。成る程、

それで同じ室の中で共に勉学に励む事になったらしい、と」

千恵が答える前に、微妙に焦点のずれた彼の瞳が、宙に浮かぶ視えない何かを読み解く様に揺らぎ、千恵の記憶ほぼそのままの今朝の様子を口にした。

あまり具合の良くなさそうな青白い顔の眉間にしわを寄せながら、彼は気遣わしげな視線をこちらへ向けた。

その、思わず惹き込まれそうになる綺麗な黒い瞳に映り込むのは、驚きに目を見張る千恵の顔。

「愛羽千恵よ。あれが何か知っているか？」

咄嗟に言葉が出ずに、辛うじて首を左右に振った千恵を見た彼は困った様に、さらりと流れる癖の無い艶やかな黒い髪を無造作に掻き上げ、

「何やら、私とも因縁のありそうな様子であったからな……。外国から参った私の同族、というのは分かるが……」

じっと千恵の瞳を視線で捉えたまま、

「余りに長きに亘り封印されていたせいで記憶が混乱している」

まるで道着の様な、上下とも墨染の袴を着こなした男は、

「身体も、まだ万全には程遠い……」

その襟の合わせから覗く胸板に右手を置き、

「だが、一つだけ確かな事がある。私を封印の眠りより喚び起こし、今この瞬間も私を乞うているのは……」

静かに告げる。

「……お前だろう？　愛羽千恵」

名乗った覚えもないのに、彼は当たり前の様にその名を口にする。

「目覚めた瞬間から、こうも私の心を占める……お前は一体、何者だ？」

だが、問われた所で千恵には答えようがない。

というかむしろ、千恵こそが彼に問いたかった。

「私は、気の遠くなる程の昔に大陸から渡ってやって来た、生き血を糧とし存在するモノノケだ。この辺りに棲まうようになってか

らはこの地の民に祀られ土地神を名乗る様になったがな」
西暦も2千を数えて久しい科学の時代で、彼はそう平然とのたまった。
……生き血を求めるモノノケ、というのはつまり――
「吸血……鬼……？　京も？」
赤く光る瞳と、上顎の異様に大きな対の犬歯が、脳裏に蘇る。
「そうだ。……私と比べればはるかに若いが」
京に感じる恐怖と嫌悪。
しかし、彼と同族だと自ら認めたこの男に千恵が抱くのは――“今この瞬間も私を乞うている”と、男が言った通りの、京に抱くそれとは真逆の感情。
「封印にあらかたの力を奪われ弱体化している今の私では、正直どこまで渡り合えるか自分でも分からない」
自らの手を眺めながら、
「一応、土地神を名乗る以上は、この土地の者に害を為すものを放置できない。だが、今のままでは力が足りない」
苦い笑みを浮かべ、
「あれは、お前を狙っている様だったが。お前に、あれから身を守る術はあるか？」
千恵に問うた。
首を横に振る千恵に、那由他は――
「愛羽千恵。……私と、契約を結ばぬか？」
一つの提案を交渉の卓（テーブル）に乗せた。
「……私は、長き封印の最中、糧を得られず飢え渇いている」
さっき、彼は言った。
「糧を得さえすれば混乱した記憶も、力も、自然と戻るはずだ。……私はモノノケだ。本来神と呼ばれる存在とは違うが、それでも土地神を自負する身だ。狩りと称してそこらで見境なく人を襲う化け物に身を堕とす様な真似はしたくない」
生き血が糧なのだと。

「――愛羽千恵よ。お前の血を供物として私に捧げろ。代わりに、私の加護をお前に授けてやる」

千恵の血を糧として差し出す代わりに、那由他が千恵を守る。

――それが、彼の提案。

現状、京という差し迫った危険から身を守る術など持たない千恵がその案に否やを唱える余地など、あるはずもない――のに。

「……案ずるな。今ここで無理強いするつもりはない。いきなりでは、混乱もあるだろう。一晩、考える時間をやる」

言いながら、那由他はそっと千恵の手に何かを握らせた。

「……考えを決めるまでは、それを持っていろ。長くは保(も)たないが、一晩くらいの間なら、京避(ムシ)け程度の効果はあるはずだ」

そっと掌を開いてみれば、それは真っ赤な勾玉の根付(ストラップ)で。

「明日の朝、神社の祠で待っている」

それだけ言い置いて、彼は部屋から出ていく。窓から、身軽に飛び降りて……。

そうして、目の前から彼の姿が消えた時、千恵の心の奥に浮かんだのは一抹の寂しさで。けれど、手に残された勾玉を見下ろせば、心の奥がほっこり暖かくなる。

「千恵ぇ？　目ぇ覚めたのか？」

からり、と保健室の戸が開き、夏也の声がした。

「全く、千恵が倒れるなんて……何の天変地異の前触れなんだか。昨日といい今日といい……そんなに体調悪かったのか？」

ずかずかと、遠慮なく千恵のベッドの脇に歩み寄ると、丸椅子を引き寄せて腰掛け、ベッドの上にドカッと千恵のカバンを乗せた。

「もう、昼休みだ。……どうする？　早退するか？」

決まり悪そうに、夏也があさっての方を眺めながら、

「……悪い。昨日も気付かないで夜遅くに連れ出したりして……。帰るなら、俺、送って行くよ。おふくろに頼んで粥くらいは差し入れてやるし」

そう呟くのを、騒々しく扉を開ける音が遮り、
「千恵、大丈夫!?」
ここがどこだか分かっているのか甚だ疑問の浮かぶ、通りの良過ぎる大きな声で割って入って来たのは――
「……ゴメン風花、心配かけちゃって。大丈夫、大した事は無いから」
夏也をどついて椅子を奪った親友に苦笑を向けて千恵は答えた。
「やあ、大丈夫かい？　2日続けて僕に会えたのが気絶するほど嬉しかったとか？」
もう一つ続けて部屋へ入って来た声に、
「千恵ってば、あのレイブンズのヴォーカルといつ仲良くなったの？　私、前からファンだったのに！」
この幸せ者め～、と、何も知らない風花は千恵を肘でつついてからかうが。その横で、夏也は面白くなさそうに尋ねた。
「風花、お前もか……。でも、転校生が千恵に何の用だ？」
「やだなぁ、保健室で寝ている女の子を尋ねる理由なんて一つしかないだろう？」
千恵は、縋る想いで手の中の勾玉をギュッと握りしめ、身を固くした。
クスリと微笑んで、京は平然と千恵の居るベッドへ近づいてくる……が、途中でギクリと突然歩を止めた。
「……君。その手に何を持ってる？」
微妙に強張り、引きつった表情で京は尋ねた。
「ん？　……あ、勾玉のストラップ。千恵、そんなの持ってたっけ？　へぇ、可愛いじゃん、どこで買ったの？」
「……那由他か」
京は小さく呟き、そして踵を返した。
「京クン？」
風花が不思議そうに呼び止めると、
「……隣の彼氏クンに噛みつかれそうだから。今は身を引いておく

よ」
不敵な笑みを浮かべつつも、足早に部屋を出て行く。
「あー、行っちゃった……」
風花は残念そうに呟いたが、千恵はホッとしながらもう一度掌の中の勾玉に目を落とした。
今の彼のあの反応は、やはりコレのおかげなのだろうか……？
「風花、お昼は？」
「んー、購買行こうか学食行こうか迷ってたトコ」
「なら、一緒に学食行かない？」
ベッドから降りながら、千恵は風花を誘う。
「ちょっと、疲れが溜まってただけなの、ホント。午前中ずっと寝てたら随分楽になったし、お腹も空いたし。この後は現国と日本史だけでしょ？　……それより夏也、帰ったら今日の午前中分のノート、貸してくれない？」
「さっきメールで……おふくろが、今晩メシ食いに来いってさ。そん時にでもコピーをやるよ。それより、俺も学食行く。ラーメン食いてぇ……」
「じゃあ行こう、早くしないと席が無くなるよ！」
追い立てる様に2人の背を押し、保健室を出る。せめてあともう数時間、当たり前の日常に浸っていたくて。
千恵は、那由他の勾玉を制服の胸ポケットにそっと忍ばせた――。

第肆話　an　old　story

「那由他様！　ああ、こんなに傷だらけになって……」
身に着けた着物を、流した血でぐっしょり湿し、息も荒く地面に膝をついた彼に、チエは慌てて駆け寄った。
「……すまない。若造だと侮り、油断した私が悪かった。京、と言ったか……全く悪知恵だけは天下一品だな」
「モノノケ相手に、こう言うのも何ですけど……でも、それでも卑劣過ぎます！　よりにもよって祓魔師（エクソシスト）と組むなんて！」
「私も、モノノケだぞ？　京（あれ）と同じく、生き血を啜る鬼……化け物だ」
「違います！」
那由他の皮肉なセリフを、チエは即座にきっぱり否定した。
「人にだって、徳高き良き人も在（あ）れば、業深き悪しき者も居ます。モノノケだって、きっと同じです。那由他様は良きモノノケで、古（いにしえ）よりこの地を守り続けて下さる土地神――ありがたい鬼神様です」
チエは、大量の出血で冷たくなった那由他の身体に寄り添い、誇らしげに笑う。
「私は那由他様にお仕えする、あなたの巫女。あなたを癒す糧となれる事、私は嬉しく思います」
そっと頬に触れたチエの手から流れてくる熱を感じながら、那由他はそっと目を伏せた。
「……巫女など。この地の民が私に供えた供物、要は生贄だ。なのに何故お前はそうして私に笑みを向けられるのだ？」
頬に触れるチエの手に、那由他は自分の冷たい手を重ねる。
「私がこの地で土地神と呼ばれるようになったのは、遥か昔の事。代々に亘り捧げられてきた巫女の数は両手両足の指の数では到底足りないが……皆、心底怯えた目をしていた」
「それは……村で行われている次代の巫女様を選ぶ儀式と言うの

が、代々の村長の占いで。その占いというのが……村の年頃の娘たちの名を書いた切れ端を貼り付けた的目掛けて村長が矢を射るという……そのぅ、大変原始的……というか……正直いい加減なもので」

その矢に貫かれた切れ端に名を書かれていた娘が、次代の巫女として那由他に捧げられる。

「自分が巫女になるなんて、考えもしなかった娘が大半なんです。普通に恋をして結婚して、子を産んで育てて……。そんな普通の幸せを望む娘が、突然巫女にされるのです」

当たり前と思っていた未来の幸せを、突然奪われれば――

「不安に思って当然なのです。決して、那由他様のせいではない……」

コツンと額を合わせ、

「私のうちは……貧乏なくせに、きょうだいがたくさんいて。大姉さまは舶来物の反物を扱う大店へ、小姉さまは港の宿屋へ奉公に出ていましたし、私や妹たちも、遅かれ早かれいずれは何処か他所へご奉公にあがる事になっていました」

チエは静かに目を閉じた。

「でも、私は巫女になりたかった。あなたの巫女になるのが、私の夢だったから」

遠くで、祭り囃子（ばやし）の笛と太鼓の音がする。――今日は、村の春祭りの日。

「昔、村の禁域で迷子になった私を助けて下さった、優しくて綺麗な土地神様に、もう一度お会いしたかったから……」

「迷子……もしかして、１０年前の……あの？」

「はい。あの時は……両親やきょうだいが、揃って風邪をこじらせて寝込んでしまって。でも、うちは貧乏でしたから。薬はもちろん、精のつく食べ物も買えなくて」

土地神である那由他が祀られた社のある山は、薬草も、木の実や山菜も豊富に採れるが、ここは神域であり、村では禁域とされている。

「けれど、まだ幼かった当時の私は必死になるあまり……禁を破って山へ登り……」

目につく薬草や山菜を夢中で採るうちに脇道へそれ、帰り路が分からなくなり……

「迷子になって、途方に暮れて……。泣きたくなっていた所へ……ふと現れ、麓（ふもと）まで手を引いてくれた方がありました」

面倒くさそうな顔をしながらも、幼子の足に歩調を合わせて歩き、別れ際には貴重な薬草を黙って渡してくれた。

それはとてもきれいな黒い髪と黒い瞳をした男の人。

「あの後、うちへ帰ってあの薬草を煎じて家族に飲ませたら、皆の具合もすぐに良くなって……。あの方が土地神様だったのだと……もう一度お会いして、お礼を言いたかったけれど……」

本来は、巫女に選ばれた者のみが入る事を許された場所だ。子どもがそう何度も立ち入れるような場所ではない。

「だから、あの年の春祭りで次代の巫女様を選ぶ占（せん）で、私が選ばれたと知った時……本当に嬉しかったのです」

5年に一度だけ、そこから先の路は拓かれる。前任の巫女が任を降りて山を下り、新たな巫女が任に就く為に山を登る路。

5年間、那由他に血を捧げ続けた巫女がそそくさと逃げる様に去っていくのを見送った翌日、新たな巫女を出迎える為、那由他はそこに立っていた。

哀れな生贄に、残酷な事実を告げる為、怯えきっているだろうはずの巫女を待ち受けて。

那由他とて、無駄な恐怖を与えたくてやっている事ではない。

下手に誤魔化すよりは、実際の所を正直に伝えてやる方が彼女たちの為には良いだろうという那由他なりの考えあっての事。

だから、縁日の屋台を見に来た様な、実に楽しげな笑みを浮かべながらその路を上って来た、歴代の巫女の中でも比較的年若い娘を

見て、まず拍子抜けした気分になったのだ。

そして、那由他（じぶん）の姿を見つけた少女の顔に、“花が綻んだような”と称すに相応しい、喜色に満ちた笑みが浮かぶのを見て、驚くと同時に憐みを覚えた。

きっと、まだ幼すぎて、自分に課せられた運命の意味をよく分かっていないのだろう。そう思い、那由他は子どもにも分かりやすい簡単な言葉を選びながら告げたのだ。

自分は村で言われている神と呼ばれる存在ではなく、ただのモノノケで。血を糧とし存在する鬼なのだと。

そう告げたところ、彼女はニコニコしながら「そうなんですか」と普通に相槌を打ち、「私はチエと申します」と、平然と自己紹介など始めた。

大いに調子を狂わされながらも、那由他はどうにかもう一つ、一番肝心な事を告げた。

巫女（いけにえ）の一番大切な“仕事”の内容。那由他の糧として自らの血を捧げる事こそが、“巫女”としての最大の務めなのだと。

お前は生贄で、だから血を化け物への供物として差し出せ、と。

そう告げられた途端、顔が恐怖で染まり、逃げ出そうとするも腰を抜かし、泣き喚く娘も少なくなかった。――というのに。

彼女はただ、不思議そうに少し首を傾げただけだった。

那由他はさすがに不安になってきた。

（どうしよう、この娘……馬（バ）……いや、少々頭が弱いのかもしれない……）

とにかく告げるべき全てを伝えるべく、言葉を継いだ。

巫女の任期は最低５年。任期を務めあげた後で巫女を降りて村へ戻ればその後の生活は充分な年金が保障されている事。しかし、任期の途中で逃げ出せば、一族郎党村八分にされるだろう事。

運悪く貧乏くじを引いたのだと諦め、５年我慢しろ、と。

そう、あの時那由他は言った。

そして、今日はあれからちょうど5回目の春祭りの日。5年に一度のその日、ここから先の路は拓かれる。

「お前にはもう、巫女(いけにえ)でいなければならぬ義務は無い。私に血を捧げる必要も、もう無い。村へ……あの祭りの賑わいの中で、他の年頃の娘たちと同じように――」

那由他は、意地の悪い皮肉な笑みを浮かべながらチエに言う。

「好(い)い男(ひと)を見つけに行っても良いのだぞ？」

そっと、チエの首筋に視線を落とし、指で肌をなぞりながら。

「5年前のあの日……巫女(いけにえ)として私の糧(エサ)になれと言われて動じもしなかったお前なら、きっとどこででも強く生きていけるだろう」

言われて動じもしなかった……どころか、そう聞かされた直後に那由他の牙を受け、実際に血を啜られても尚、平然と笑い、この5年、くるくると良く働き甲斐甲斐しく那由他の世話を焼いてきた娘の、間近に迫る瞳に瞬間、怒気が閃いた。

ガツンと鈍い音と共に、視界に星が散る程の衝撃がもろに額に加わる。

……チエに頭突きを喰らったのだ。不意に離れたチエの体温を名残惜しく感じながら、那由他は顔を真っ赤にして憤慨するチエを呆けたような顔で見上げる。

両手を腰に当て、仁王立ちしたチエは、尻餅をついた格好の那由他を見下ろし、声高に宣言した。

「チエは、今も、これからも、ずっと那由他様の巫女です。村には戻りません！」

いつも笑っていて、滅多に泣く事なんか無かったチエの目から涙がこぼれた。

「だって……私が好いた方ならもう目の前にいらっしゃいますもの」

チエの顔が、更に赤く染まっていく。

「不敬だと……大それた想いである事は良く分かっております。でも、もしも許されるのなら……那由他様のお傍に在りたいのです」

「不敬……？　私は、神ではない。モノノケだぞ……？」

それも、生き血を啜るおぞましき化物。

それを怖れ忌避した村人たちが、自らに害が及ぶのを避けようと生贄を供物として捧げたのがいつしか因習として根付き、そのおぞましさを包み隠す様に、生贄は巫女と呼ばれ、化け物はいつしか土地神と呼ばれるようになっていたというだけで。

「生き血を啜らねば――巫女を欠かせば私は存在できない。私の傍に……私の巫女として在るという事は、私の糧で在り続けるという事だ。それを、お前は望むのか……？」

祓魔師につけられた傷は、モノノケであるが故の圧倒的な回復力で大半はもう治りかけているが、出血により大量に失った熱は、新たに生き血を吸い補充しなければ戻らない。

冷たく凍りついた身体は、チエの血を欲して飢え渇いている。

耳に届く、トクトク高鳴る心鼓が――こちらを見つめる、熱っぽく潤んだ瞳が――血が上り赤く上気した頬が――そして何より、真っ直ぐ那由他に向けられたチエの偽り無き想いが――那由他の欲を煽る。

そう、あの時も――。

本当なら、その必要はなかった。一昨日、前任の巫女から最後の吸血を済ませたばかりで、身体にはまだ熱と力が満ち溢れていたから。

しかし、百聞は一見に如かずと。実際に血を吸われれば、さすがに理解るだろう、と。

那由他は彼女の首に牙を突き立てた――のに、彼女は。

牙が肌に食い込んだ瞬間こそ痛みに顔を歪めはしたが、すぐにポーっと酔った様な表情に変わって。

……那由他と同種のモノノケには、血を吸う際に人を酔わす力がある。

元は本当に、酒に酔ったような酩酊感を与える程度のものだが、

年を重ねる毎にその力は強くなり、百も歳を重ねれば性的な快楽に溺れさせる事も可能になる。

那由他ほどに年月を重ねれば、その力は更に強まり、吸血された人間は途方もない多幸感に酔わされることになる。

だがそれも、血を吸われている間だけの事。酔いから醒め、自分が何をされたのかを知れば……きっと。

――そう、思っていたのに。

ハッと、我に返り那由他を見上げ、彼女が最初に浮かべたのは――笑顔だった。

不安や恐怖を隠す為に無理に貼り付けたものではない、心からの笑み。

あの時、那由他は言葉を失い、脱力して近くの木に懐くしかなかった。

「私は、初めてお会いした10年前のあの時からずっと、那由他様の事が好きでした。この5年、毎日那由他様のお傍でお仕えし、日々を過ごす毎にこの想いは募るばかりで……もう、私一人では抱えきれません」

強張る身体でぎこちなく立ち上がり、餓えに揺れる瞳で那由他が見つめる先。

チエは着物の襟元を寛げて首筋を晒し、那由他を抱き込むように彼の頭部を引き寄せ、そこへ導く。

「この想い……私の心血の全て……那由他様に捧げたい――」

本能に抗い切れなくなった那由他が堪らず牙を剥き、チエの首筋に咬みついた。

牙が肌に刺さる瞬間に感じる痛みは決して小さくはないが、その痛みをやり過ごした後にやって来る感覚に、痛みなど記憶の彼方へ軽く押し流される。

――酔いそうなほどの、強烈な多幸感。

過去に那由他の巫女としてあがった少女たちは、当たり前の未来

を奪われたせいでただでさえ不安感で一杯のところへ、自分が化け物へ捧げられた生贄なのだと告げられ、血を吸われて恐怖で満たされているはずの心が感じる、その感覚に強い違和感を覚えて面食らい、畏れた。

だが、チエは最初から人ではないと知りながら、那由他を好きになったのだ。

だから彼がまず初めに告げた“神ではなくモノノケ”宣言も、彼の自己紹介くらいにしか思わなかった。

血を捧げろと言われたのにはさすがに戸惑いはしたけれど、元々彼と再び会えた喜びで一杯だった心に雪崩れ込んだ多幸感に酔わされて、そんな瑣末な感情など忘却の彼方へ吹き飛び、ただ彼の傍に居られる幸せに、チエは心からの笑みを浮かべたのだ。

そして今も。チエの血が、奪われた生命力（ちから）を満たし、凍りついていた那由他の心身を温め、傷ついた彼を癒しているのだ。

彼を癒す糧になれる事を嬉しいと思う事はあっても、血を吸われる事を嫌だと思った事は一度もない。

飢えを満たし、血で染まった唇を手で乱暴に拭う那由他を、やっぱりにこにこ嬉しそうな顔で見上げるチエを見て、彼は諦めたようにため息を吐いた。

「モノノケである私はお前たち人と違い、糧を断たれるか、余程の損傷を負わされぬ限りは老いも死もない」

寂しそうな顔で那由他は言った。

「チエよ、私と永久（とわ）を生きる覚悟はあるか――？」

第伍話　a new story

「……かく、ご……？」

見慣れた我が家の自室に鳴り響くのは、風花に貰った昨今大人気のアイドルグループの最新曲の着メロ。目覚まし代わりのケータイのアラームだ。

「夢……？」

そういえば……昨日、保健室で寝込んでいる間にも妙な夢を見た様な気がする。

ベッドから身を起こし、ケータイで時間を確認する間に、眠気と一緒に夢の記憶も霧散して消え、代わりに昨日の記憶が蘇る。

『――お前の血を、私に捧げろ。代わりに、私の加護をお前に授けてやる』

彼から渡された勾玉は、確かに昨日一日京から千恵を守ってくれた。――いや、それ以前に京と初めて会ったあの夜も、千恵は彼に助けられている。

その貸しにかこつけて血を要求する事だって出来ただろうに、彼は律義に契約を持ちかけ、一晩の猶予とその間の護りまで与えてくれた。

モノノケだと言いながら、神であろうとする、おかしな男。

一晩じっくり考えても、やはり彼の助力に頼る以外に京に対抗する手段など思いつかない。

……十字架とか、ニンニクとか、思い至らなかった訳ではないけれど。本当にそれが有効である保証はない。

現に京は真っ昼間の学校に現れた。……太陽は、平気だったという事だ。と、なればそれに続く弱点の数々の信憑性も怪しくなってくる。

何故、那由他を見て心が揺らぐのか。何故、本性を現す前から京に恐怖を覚えたのか。……まだ分からない事だらけだが。

今、千恵に選べる未来が二つだけなのは理解る。
為す術もないまま京に好いようにされるか。
那由他の提示した契約を飲み、血を捧げる代わりに彼に守られるか。
迷うまでもなく、選ぶなら当然後者だ。
……でも。那由他にそう持ちかけられるより前――初めて彼の姿を目にしたあの瞬間から、それを望んでいた様な気がするのは……本当に気のせい？
彼のあまり具合の良くなさそうな青白い顔を見て、首のあたりが疼いた様な気がしたのも、本当の本当に気のせい……？
霧散したはずの夢の名残が耳奥で囁く。
（――那由他様……）
「……もう、行かなくちゃ。早くしないと、“寄り道”する時間が無くなっちゃう」
朧な夢を振り払うように、千恵は急いで身支度を整え、家を出る。

この街には神社は二つある。一つは少し前まで正月の度、毎年家族で初詣に出かけていた氏神様の社。そしてもう一つ、今は既に廃神社となっている社が、千恵の通う高校の裏にある山にある。
昨日那由他はどちらの社か明言しなかった――のに。
千恵は当たり前の様にいつもの通りに学校への道を辿っていた。

――高校までは、自転車を飛ばせば１０分程で着ける。
千恵は一度校門を入って学校の駐輪場に自転車を置き、裏門へ回った。表の路を通るより、こっちの方が幾分か近道ができる。
鍵がかかった門をよじ登り、向こう側へ飛び降りる。まあ、慣れたものだ。一本、舗装もされていない狭い路地を挟んだ向こうに、その荒れ放題の小山が鎮座している。
今はもう、誰も通る事のない獣道の様な参道の小道は、傾斜は大したことはないが、手入れのされていない下草や小枝が道を塞ぎ、

掻き分け掻き分けしながら進まねばならず、体力にはそこそこ自信のある千恵も、山の中腹にある祠を見つける頃にはさすがに息が上がっていた。

ずっと昔、戦前より更に前には、頂上に小屋の様な社があったらしいが、今は鳥居すらなく、申し訳程度に古ぼけた小さな祠だけが残っているだけ。

那由他は、その祠に背を預け、地面に座り込んでうつらうつらと眠り込んでいた。

衣服が朝露に濡れている。もしかして、こんな所で一晩明かしたのだろうか？

風に吹かれた木々がざわめきを奏で、彼の前髪が風に遊ばれさらりと揺れる。

もう、11月だ。朝晩の冷えは厳しく、風も冷たい。野宿をするには辛い季節だ。

だが彼の寝顔は比較的穏やかで、木々に囲まれたこの場所で眠る彼の姿は一枚の絵画の様だった。

――その画に、千恵は何故か既視感を覚えた。いつだっただろうか、こんな風な景色を何処かで見たような……そんな気がするのも、やはり気のせいなのか……。

起こしてしまうのが躊躇われる程、良く眠っている様子の那由他に、千恵はそっと近づき、肩に触れた。

熟睡しているらしいところを起こしてしまうのは心苦しいが、一応約束の時間だし、あまりゆっくりしていると学校に遅刻してしまう。

そうして触れた那由他の肩は、氷の様に冷たかった。

「もう、こんな所で眠るから……」

でも、ここは確かにこの土地の土地神を祀っていた神社の跡で、彼は確かにここの土地神で。

もしかしなくとも、昔はあったという社が、彼の家だったのだろうと思い当たり、ツキン、と心の奥が痛んだ様な気がして。

それを振り払うように、名を呼び、肩を揺すろうとして――はた、と。

……さて、何と呼ぶべきだろうか？

いきなり呼び捨て、というのはどうかと思うし。くんとかさん付けで呼ぶのも何だか違う気がする。

「……那由他様？」

呼びかける、というよりその響きを試す様に口の中で頃がした名前に、ずっと規則正しく上下していた那由他の肩がピクリと動き、呼吸のリズムが崩れた。

「……チ、エ？」

ゆっくりと目蓋を重たそうに持ちあげ、寝起きで掠れた声で名を呼ばれた。

こうして間近に見ても、顔色こそ不健康そうな青白い色をしているが、まつ毛は長いし、彫りが深く鼻も高過ぎず低過ぎず、形の良い唇も――全てが完璧な造作をしており、それを全て詰め込んだ綺麗な顔で、上目使いに無駄に色気のある声でささやかれたら……

「ああ、……もう朝か――。すまない、寝過してしまったようだ」

周囲を見回し、空を見上げてから、那由他は少し目を伏せ、

「私にとって血（かて）は生命力（エネルギー）そのものでな。長く欠かせば身体は冷えて凍り、動く事すらままならなくなる。……もしも今、身体に大きな損傷を負えばひとたまりもなく私は消滅するだろう」

肩に置かれた千恵の手に自分の手を重ねた。

直に触れると、まるで冷凍庫から出して来たばかりの氷水みたいに冷たい、那由他の手。

だが千恵は、それよりも彼の言葉に冷や水を浴びせられた気がした。

カチンと、急激に冷えた心と反比例するように頭に血が上り、スイッチが入る。

「そう。じゃあ、あなたと違ってたぶん生命力に満ち満ちて元気一杯なんだろう京クンをどうにかする方法は？　十字架とかニンニ

クとかで何とかなる？」
　自分で思うより随分と低い声が、思わず口をついて出た。……しかもタメ口。
「……ならないな。ついでに言えば、聖水や流水、外国（とつくに）の神の書とやらも役に立たないぞ」
　しかし那由他がそれに目くじらを立てて咎める事はなく。
「銀と炎は……喰らえば確かに大きな痛手となるが……」
　淡々と答えを返す途中で那由他が濁した語尾に続く内容は、あの日の夜の戦闘を目の当たりにした千恵には良く分かっていた。
「当てられなきゃ、意味がない？」
　語尾を引き取りながら、ふつふつと沸き立ってくる感情に千恵は満面の笑みを浮かべる。
「ねえ、あのさ。何で私がこんな朝っぱらから山登りしてまでこんな所へわざわざ出向いて来たと思ってるの？」
　無駄に綺麗な顔が何だか小憎らしく見えてきて、思わず手が出る。
「分かってるよ、私の力じゃ京をどうにかするなんて逆立ちしたって無理だって事くらい、最初から！」
　むにょ～ん、と両手で彼の両頬をつねり上げ、左右に引っ張ってやる。
　触れた肌はやはりひどく冷たかったけれど、存外に柔らかく、人のそれと変わらない。
「あれだけ人並み外れて暴れる様を目の前で見せつけられたら、どんなバカでも分かるよ。私じゃ……普通の人間じゃ、到底適わない。京にも、あなたにも」
　良く伸びる頬を力いっぱい引っ張り、つねり上げる。
「京は私を狙ってる。どういう理由（わけ）かなんて知らないけど、初めて声を掛けられた瞬間からずっと、心の中は恐怖と嫌悪で一杯。……それこそ、うっかり気絶なんかして保健室に担ぎ込まれちゃうくらい。……でも、」
　その暴挙にさすがに驚いたのか、見開いた目をぱちくり瞬かせた

彼を見て、千恵は少し溜飲を下げ、彼の頬から手を離す。
「でも、あの時あなたは私を庇ってくれた。昨日くれた勾玉の効果もてきめんだったし」
その頬は僅かに赤くなっていて。
「何よりあなたが言ったのよ、『契約しろ』、『守る代わりに血を差し出せ』って」
その片頬に、千恵はそっと手を伸ばした。
「学校の成績は正直良い方じゃないけどさ。でも、そこまで馬鹿じゃないつもりだよ、私」
那由他の目を真っ直ぐ見つめて言う。
「今なら私の力でもあなたを消せる？　……そんな事していったい何になるの？」
唯一助かる可能性のある道を自ら潰すなど、愚行の極みとしか思えない。
「……肚を決めた、と？」
「そうだよ。一応これでも、それなりに覚悟は決めて来たつもり。だって、その為に来たんだよ。あなたが言った“契約”を成立させる為に」
――そのつもりで来たのは本当だけど。でも今、彼をこのまま放っておいてはいけない様な気もして。
「で、私はどうすればいいの？　契約書かなんかにサインとかすればいい？」
「書状の類など、我らモノノケ相手の契約には必要ない。我らモノノケにとって、言霊の契約は絶対だからな。お前はただ宣言すれば良い。だが、一度成立した契約を破棄する事は不可能だ。破れば最悪の場合お前の命がその代償となる可能性もある」
那由他と名の通り、遥かな時を重ね続けてきた威厳を最前面に押し出し、彼は千恵の問いに答えた。
今の今まで、外見は千恵とそう変わらない年頃に見えていたのに。
……その途端、彼が悠久の時を生きてきた“モノノケ”なのだと改

めて思い知らされる。
厳かな迫力に満ちた雰囲気。たとえ身体は弱っていても、その精神（コロ）は健在。
外見の、人並み外れた美しさ以上に、それがとても綺麗なものに思えて。
自分の預かり知らぬ所で動く心の奥の感情とは関係なく、千恵自身で確信した。
この那由他と京とはまるで違う存在なのだと。
同族だと、那由他は言ったが。確かに種族としては同じなのかもしれない。でも、違う。
だから、大丈夫だと。この選択は間違いなんかじゃないと、信じられた。
「私は、あなたと契約する。あなたに私の血を捧げる。代わりに私を守って。
「……」
千恵の宣言に、那由他は一呼吸の間をおいてから、
「……いいだろう。お前の血と引き換えに、私の守護をお前に与えよう」
頬に触れていた千恵の手を取る。
もう片方の手の指を、自分の口元に運び、ガリっと牙で傷をつけ、ジワリと滲んで来た血で千恵の手の甲に何かの紋様を描いた。
血で描かれたその紋様は、完成すると同時に肌に吸い込まれていくようにして消える。
「えっ、……これは？」
「私の“印”だ」
那由他は苦しげな吐息と共に答えをこぼした。
「我らモノノケは本来、己より永き（なが）時を存在したものには逆らえない。私より後にこの世に生じたものに、私の“印”に逆らう事は出来ない」
……心なしか、彼の顔色が更に白くなった……ような……

「あの勾玉と、原理は同じだ。あれは、私の“印”そのもの。私より若い京が私の“印”に抗うのは難しい」

眉間にしわを寄せて目を閉じ、背後の祠に体重の殆どを預けてもたれる。

「だが、ああいう形態（かたち）の“印”は長くは保（も）たない。一日か、長く保ってもせいぜい三日で消えてなくなる……が」

ゆっくり息を吸い、そして吐き出して。

「……こうして刻んでおけば、私との契約を続ける限りは消えずに効果も持続する。取り敢えず一先ずの護りにはなるはずだ」

意を決した様に、祠に縋りつくようにしてふらふらと立ち上がる。

「しかし、あの京というもの。侮ってはならない気がする」

言いながら、よろよろと今にも倒れそうな足取りで一歩踏み出し、

「それに、“印”でただ守るだけでは何も解決しない。私が直接赴く必要があるだろう」

ここへ来るのに千恵が使った道を降りて行こうとする。

「ちょっと待った」

千恵は那由他の腕を掴んで引き止めた。

「赴く……って、学校に行くの？」

……掴んだ腕が、さっきより更に冷たくなっている気がする。

「そのつもりだが。……何か、問題でも？」

「いや、学校に来るのは構わないし……っていうか私的にはむしろ心強いし、ありがたいんだけどさ」

振り向いた那由他の顔はやはり辛そうにしかめられている。

「そんな状態のままで行くつもりなの？　そんなふらふらな状態で行って、京に勝てる？　……無理だよね。だって昨日、自分で言ったんだよ。『力が足りない』から『どこまで渡り合えるか分からない』って。それに、今さっき言ってたよね。『血がないと動けない』って」

那由他の腕を掴んだまま、千恵は彼に一歩近づいた。

「……報酬とは、何かを為した謝礼として支払われるべきもの。

……私はまだ契約の約定を何一つ為していない」
千恵は、その彼の誠実で律義な答えに感心しつつも呆れ返るしかなかった。
「あのね、だからってあなたが京にやられちゃったら意味ないじゃないの、もう……」
掴んだ腕を強く握りしめて、
「なら、昨日の勾玉分と、その前に庇って貰った分のお礼って事ならどう？」
彼と向き合った。
「だって、山を下り切るまでに倒れそうに見えるんだもん。そんなんじゃ、私が困るの。だから、行くならまずはちゃんと力を回復させてからにして」
「……良いのか？」
那由他は苦い笑みを千恵に向ける。
「怖いのだろう？……心の臓が先程から騒ぎっぱなしだぞ？」
ここで那由他を見つけた瞬間からドキドキしっぱなしだった心を見透かされ、千恵は思わず那由他の着物の胸倉を掴み、
「そりゃ、平気じゃないよ!?　当たり前でしょ！」
力任せに揺さぶった。
「いきなりモノノケだのなんだのって分からない事言われて、悪夢みたいな事態に巻き込まれてパニくるなって……そんなの無理に決まってるじゃない。しかも、血を差し出せとか言われて、平常心を保ってられる訳ないでしょ？」
火照って熱くなった顔を、那由他の冷たい胸板に埋める。
「でも……何でかな。分かんないけど、怖いとか嫌だとか……どうしても思えないんだ」
合わせの裾を強く握りしめて。
「……平気じゃ、ないけど。怖くはないから……大丈夫」
那由他の手が、どんどん熱を孕んでいく千恵の頬に触れる。その冷たさが、今は心地良い。その冷たさが肌をなぞりながら首筋へと

降りていき、制服の襟元辺りで止まる。千恵は意を決してブラウスのボタンを一つ、二つ目まで外し、那由他の顔を見上げた。

「お願いだから、なけなしの覚悟を溝に流すような真似はしないでよね」

少しの強がりを含めて、軽く睨んで。

「良いんだな？　……それなりに痛みも伴うが、それでも？」

据え膳を前にしながら……本当に、どこまで律義なんだろう、このモノノケ様は。思わず心の中で突っ込みつつ、脱力しそうになる。

「何、私の覚悟を試してるの？　あのね、ここまでしといて今さら嫌とか言うワケないでしょ。いいから、さっさとその今にも倒れそうな状態、何とかして」

「……分かった。私からすればありがたい申し出だ、正直助かる」

那由他の片腕が、千恵の背を支える様に後ろに回され、首元の手がうなじにかかる髪を後ろへ梳き、襟を開く。

「すぐに済ませる。痛むが、少しの間我慢していろ」

そう言って、那由他は口を開いた。

綺麗に並んだ真っ白い歯列の上あごで鈍く光る二本の牙。

千恵の首筋を見つめる瞳は――やはり相当抑制していたのだろう、熱っぽく揺らぐ瞳に渇望が見え隠れしている。

それは、あの時の京に襲われた時と殆ど違わぬ光景であるはずなのに。

こうして千恵を捉えているのが那由他であるだけで、喰われようとしている事に変わりないのに。

それでも、あの時の様な恐怖や嫌悪は涌いてこない。

唇が首筋をなぞり、ある一点で止まる。

――あ、……と。思った次の一瞬。

肌から唇が僅かに離れ、グッと、牙が肌に押し当てられた。

服の裾を握りしめた手に力を込め――そして。

ブツッ、と、思っていた以上に生々しい音がして。那由他の牙が肌を貫き、深々と打ち込まれる。

「――っ」

牙が刺さる瞬間の鋭い痛み。牙が埋まった傷口を強く吸われる、鈍く疼くような痛み。思わず上げそうになった声を何とか喉の奥で押し殺し、服の裾を握った手を更に強く握りしめる。

……大丈夫、我慢できない痛みじゃない。

耳元で那由他が傷口を強く吸い上げ、血を啜りあげては飲み込むかなり生々しい音を聞きながら、詰めていた息を静かに吐き出す。

――本当に、血を吸ってるんだなぁ、などと埒もない事に思いを巡らせた――その時。くらりと、一瞬、酩酊感を覚えた様な気がして。

「――?」

ドクン、と一拍心臓が跳ね、続けてトクトク刻まれる鼓動に高揚感が高まる一方で、暖かな春の日だまりの中でうとうとしているようなぼんやりとした夢心地気分が瞬く間に物凄い勢いで心に満ち満ちて。

溢れんばかりのそれに押し流される様に、抱えていた不安やら何やら、今の今まで我慢していたはずの傷の痛みも全部が意識の外へ消えていく。

そうしてまっさらになった心は至福一色に染まる。

それは……例えば宝くじに当たったとか、そんな時に感じる安っぽい幸せではなく。もっと深くスケールの大きい……安心感に満ちたもので。そう、きっと大切な人と想いが通じ合った瞬間に感じる様な……

「……千恵」

名を呼ぶ那由他の声に、ドクン、と。一際心臓が大きく跳ねた。

心地の良い酔いの中にあった意識が、現実に舞い戻る。

いの一番に間近にある那由他の顔が視界一杯に映り込み、ドカンと心臓が爆発した。

「……大丈夫か?」

熱を測る様に額に那由他の手が触れる。

「あれ……あったかい？」

さっきまで、氷みたいに冷たかったのに、ちゃんと人肌の温もりがある。気付けばそれは額に触れる手だけじゃない。背を支えている腕も、合わせから覗く胸板も。

青白かった顔色からも具合の悪そうな青さが消え、小憎らしい程白くて綺麗な顔に、那由他は柔らかく慈愛に満ちた苦笑を浮かべていて。

「……もう、いいの？」

強く握り過ぎて皺くちゃになった裾から手を離し、やけにトコトコうるさい心音を誤魔化す様に尋ねた。

「この通り……冷えて強張っていた身体も程良く解け、全身に熱が満ちている。体調は万全だ。力も幾分か戻った様だしな」

言いながら、那由他は一歩千恵から離れ、そっと背を支えていた腕を解く。

「それより、お前の方は大丈夫か？　一度に吸い過ぎないよう加減したつもりだが……何しろ余りに久方ぶりだったものでな……」

僅かに目を逸らす彼の足は力強く大地を踏みしめ、先程の様にふらつく事なく真っ直ぐ立っている。

「多分……大丈夫だと思う。私、血の気多いから貧血で悩んだ事なんか一度もないし」

とは言え傷口に絆創膏を貼るくらいはしておくべきだろうか、と傷に手を伸ばし――

「……あれ？」

そういえば、傷の痛みを感じない。……と、いうか――

「傷は……？」

「もう、治っているはずだ。お前は私の“印”を持っているからな」

「え……、何、どういう事？」

「私は永らくこの地に棲まい、この地に棲まう地霊の主も務めていたからな。……封印されている間にだいぶ減ってしまった様だが

……まだ、この位は――」

おもむろに手を伸ばし、山を下る道の先を指し、

「この地を加護する風伯、その眷族たる鎌よ――我が名のもとに具現せよ」

威厳ある厳かな声で静かに告げる――その直後、ざわりと何かの気配が急激に高まり、凄まじい鎌鼬（かまいたち）がまるで衝撃波の様に放たれ、道を覆っていた下草や枝葉が一瞬のうちに切り裂かれて伐採され、下へと落ちる。

「……と、まあ、この地の地霊を従えているのでな。私の“印”を持つお前もその力の加護を受けられる。今の様に治癒力を高めて傷を癒したり……な」

モノノケの頂点に立つ、山の主――那由他。

「さて、では行こうか」

木々の向こうからチャイムの音が小さく聞こえ。

千恵は差し出された手をキュッと握りしめた。

夢と現実の狭間に居る様な不思議な気分になりながら、彼について歩く。

――繋いだ手の温もりに、懐かしさと切なさとを感じながら……

第陸話　ｓｃｈｏｏｌ　ｄａｙ

「……ちょっと待て」

那由他に手を引かれ、来た時の半分以下の時間で学校の裏門まで戻って来た千恵は、来た時と同じように門を越えようと、門に手を伸ばし足を掛けようとした所で、微妙に引きつった顔をした彼に止められた。

「千恵。……お前、何をしている？」

「うん？　そりゃ、もちろん門を越えようとしてるに決まってるじゃない。ここを越えなきゃ中に入れないし」

昔は夏也や悠兄たちとあちこちでわんぱくをしてはしょっちゅう親に叱られていた千恵にとって、この程度の門を越えるなど朝飯前。だから、当たり前の様にそう答えると、

「その格好で、か？　……千恵……取りあえず、まずはそこから降りろ」

那由他は引きつり具合の増した顔で千恵の身体を門から引き剥がし、

「千恵、お前はもう少し年頃の娘としての自覚を持て……」

説教染みた台詞を呟きながら、そのまま千恵の身体を抱えてその場で軽く跳躍し、ぽーん、と人間離れした跳躍力で軽々と門を飛び越えて見せた。

「さて、……千恵。この学舎の長はどこに居る？」

「長……って、校長？　校長室……ううん、この時間だと職員室で朝の職員会議中かも」

「職員……そうか成る程、関係者が一堂に会しているとは――手間が省けて良いな」

「手間……、ね。……まあいいや。じゃあ、職員室に案内するから……そろそろ降ろしてくれない？」

「ああ……」

「さて、と。表に回ると色々面倒そうだよね。取りあえずそこか

ら入って……」
　千恵が指さした場所を見た那由他は一瞬押し黙った後で、再び顔を引きつらせた。
「……千恵、お前の言う“そこ”とやらは……まさか、とは……思うが……あの窓の事ではあるまいな？」
「うん？　そうだよ」
「……、私の見間違いでないなら……その窓……厠（かわや）に見えるのだが？　……しかも配色からして男用なのではないか？」
「うん、この校舎って殆ど特別教室とクラブ棟でさ、滅多に人が来ないの。だから不良連中のたまり場になっててね、ここでよく煙草とか吸ってたりするワケ。だからこの窓も……あ、やっぱり。カギ開けっ放しになってる事がよくあるんだ。大丈夫だって、こんな朝早くから登校してくるマジメな不良なんてそうそういないから」
　胸程の高さにある窓に飛びつき、這い上がろうとする千恵を見て、
「そういう問題じゃないだろう！？　……って、おい、こら待てって」
慌てて止めようと手を伸ばすが、間に合わず。千恵は慣れた様子で身軽くヒョイっと窓の向こうへ飛び降りた。
「大丈夫、思った通り誰もいないよ」
「年頃の娘……以前に女としての自覚をもう少し持て……」
　ため息をつきながら、那由他は呆れたように呟き、渋々といった様子で千恵に続く。
　人気のない廊下。隣の校舎への渡り廊下の先に職員用の玄関と事務室とがあり、
「今の時期のこの時間帯、用務員さんは表の門で落ち葉掃きしてる事が多いから……うん、いない。で、そこの階段を一階上がればもう職員室なんだけど――」
　ここまでは誰とも会わずに来れたが、さすがに上階からは人の声がする。
　職員会議中は生徒は職員室に入れなくなる。日直が日誌を取りに

来たりするので、この時間はいつも混み合っているのだ。
「まあ、もうすぐ予鈴が鳴るはずだから。そしたら皆、ＨＲが始まる前にって一気にいなくなるはずだから、もうちょっとここで待って――」
「お前は、行かなくて良いのか？」
今日は遅刻決定かなぁ、と思った所へ那由他が言った。
「ここまで来れば、後は私一人でもどうにかできるだろう。お前は先に行っていろ」
「……いいの？　別に一回や二回の遅刻くらい構わないよ。別に皆勤賞狙ってる訳でもないし」
ＨＲには間に合わないかもしれないが、一時間目の授業には充分間に合う時間だ。
「いや、京の出方を窺う意味でもその方が都合が良い。“印”があるから問題は無いはずだが、もし何かあれば迷わず私の名を呼べ。いつでも駆けつけ、お前を護ろう」
そっと、頭に手が添えられる。大きくて、少し骨っぽい男の人の手。
相手はモノノケ様とはいえ、未だかつて異性からこんな扱いを受けた覚えのない千恵の心臓を揺るがすには充分過ぎる行為。
「あ……ありがとう」
またしても騒ぎだした心臓の鼓動をさとられたくなくて。
「じゃ、じゃあ先に行ってるね」
階段を駆け上がる。
一回りして一つ階を上がって職員室の前を通り過ぎ、もう一回りして三階へ上がれば一年生の教室が並ぶ廊下に出る。
ＨＲが始まる前の廊下はまだ賑やかで、その喧騒の中にそっと紛れる様に自分のクラスへ向かう。
一年二組のプレートが掛った扉をカラリと開けるとほぼ同時に、予鈴が鳴った。
「あれ、千恵。今来たのか？」

真っ先に声をかけてきたのは夏也だ。
「どこ行ってたんだよ？　今日、随分早く家出ただろ？　駐輪場に自転車はあるのに、下駄箱に靴は無いし教室にカバンもないし……」
怪訝な顔で問われ、千恵は心の内で舌打ちする。
「野暮だねぇ、君。朝早く、人目を忍んで……って、そんなの大体相場は決まってるだろ、ねぇ？」
更に横から口を挟んできた輩に千恵はもう一度舌打ちした。
「……何だ、君、愛羽さんのカレシじゃなかったんだ？」
「違う違う、夏也は千恵のお隣さん兼幼馴染みの腐れ縁――今のところは、ね。……でもホント今日はどしたの？」
その隣で、大好きなバンドのヴォーカルに目をキラキラ輝かせているのは風花だ。
「ん……ちょっと、野暮用でね」
「んん、何？　なーんか怪しいなぁ。千恵が目を逸らすって事は、なーんかしら隠してる時だもんね？」
……夏也も手ごわいが、同性の幼馴染みはもっと厄介だ。
タイミング良く鳴った本鈴に感謝しながらも、ドクンと心臓が期待に跳ねる。
「むぅ～、後できーっちりお話聞かせて貰いますからね！」
悔しそうに風花は席へ戻り、夏也も不満顔を隠す事なく渋々離れていく。
「……京」
人の席に陣取ったまま動かない、一番厄介な敵を見下ろす。
「そこ、退いてくれない？　座れないんだけど」
「――野暮用って、何？　朝っぱらからこそこそと……どこへ行っていた？」
顔だけニコニコ微笑んだまま、低い声で脅す様に京は尋ねた。その仄暗い瞳に心を逆撫でされ、ぞわりと全身に鳥肌が立つ。
「さあ。あなたに答えてあげる義理なんかないけど。……すぐに

分かると思うよ」
千恵は、ちらりと扉の方へ視線を向けて言った。
「ふうん、今日は倒れたりはしないんだね？」
「――あなたがどうしてそうも私にこだわってるのか知らないけど。私はあなたとは関わりたくないの。だから……放っておいてくれない？」
「それは無理な相談だ。君は僕の大事なイヴなんだからね」
「……イヴ？　それ、初めて会った時も言ってたけど、一体何の事？」
「知りたい？」
京が不敵な笑みを浮かべた時、千恵の耳に待ちわびていた音が届いた。
カラリ、と。耳慣れた扉が開く音と共に担任が入って来る。
そして。
瞬間、女子の一部が浮足立つ。が、男子の大半は迷惑そうに呻いた。
さすがに2日続けて、しかも同じクラスに転校生という異例の状況にクラスはざわめいた。
担任も、今にも首を傾げたそうな顔をしながら、それでも昨日と同じくカツカツと黒板に白チョークで大きく彼の名を書き出した。
――若宮那由他（わかみやなゆた）
「転校生の若宮君だ」
そしてやはり短い担任の紹介の最中、ガタっと音を立てて京が席から立ち上がった。
「――那由他っ」
さすがに人目がこれだけある中で暴れるつもりはないのか、低く唸る様にその名を憎々しげに呟き、睨みつける。
「こら百世。本鈴はもうとっくに鳴ったぞ。早く自分の席に戻りなさい」
「はーい、すみませーん」

担任に注意され、瞬時に外面を取り繕った京は、ギリッと千恵にもはっきり聞き取れる程に歯ぎしりしながらようやく千恵の席から離れる。

「……大人しく、眠ったままでいれば良かったものを。くたばり損ないめ」

人間の聴覚では到底知覚不可能なその声を、那由他は拾い、そして警告を返す。

「我が名は那由他。この地の主として幾多の年月を重ねしもの。若きものよ、那由他の命である。千恵は私の大事な契約者。かの者に危害を加える事は私が許さぬ」

「……契約……者、だと……！？」

その言葉に、京は目を見開き――そして心の中で呪いの言葉を吐いた。

「ふざけるな……っ、あれは僕のイヴ。この世に生じて百年、ようやく見つけた僕好みの娘（イヴ）……その最優良血（ヴィンテージ・ワイン）を……あの時、お前に邪魔されたせいで更にもう百年待つハメになったんだ。だが、今度こそは……見ていろ、必ず僕のものにしてみせる」

……仄暗い笑いを、にこやかな仮面の下に隠して、京は自分の席に着いた。

「え、若宮君って、千恵のイトコなの？」

チャイムが鳴り、担任が教室を出て言った途端、人だかりのできた千恵の隣席の前で風花が嬉々とした声を出した。

「は……、いと……こ？　ちょっと待て。俺はこんな奴知らねぇぞ。つーか、見た覚えすらないぞ？」

千恵の机の前で呆けた声を上げるのは夏也だ。

「山に棲んでいたのでな。この街に来るのも随分久方ぶりだから、千恵に案内やら何やらの世話を頼んでいたのだ」

「じゃあ、千恵の言ってた野暮用ってそういう事だったんだ？」

「え……と、まあ……」

千恵は曖昧に頷く。……だって、そんな事は今初めて知ったんだから。

「ああ。今朝は千恵のおかげで色々助かった。これからも、しばらくは何かと千恵を頼る機会は多くなるだろうが……」

ちらりとこちらに目を向けた那由他の視線を遮る様に、クラスメートの女子たちが机と机の間に割り込み、

「愛羽さんばっかじゃなくて、私たちにも頼っていいんだよ？」

「そうそう、ねぇ、良かったらメアド交換しない？」

「今日の放課後、ヒマならこの辺り案内するし！」

「えー、その前に学校内の案内のが先じゃない？　昼休みとかどう、一緒に？」

きゃいきゃい騒ぐ。

それまで、少し面倒くさそうな顔をしながらも、会話の中心で律義に答えを返していた那由他が静かに席を立ち、女子の群れから頭一つ半ほど飛び出た顔をこちらへ向け、真顔のまま至って平然とのたまった。

「すまないが、私は千恵と共に居ると決めているのだ。――そう、約束したからな」

その言葉に一瞬、ドキッとするも……瞬間、那由他の周りに集った女子たちの幾多の冷たい視線が痛い程突き刺さり、千恵は心の中で悲鳴を上げて青ざめた。

（け、京も怖いけど……この子たちも怖い……）

「ま、待て……お……お前……共に居る約束、って……まさか……ホントにそういう事じゃないよな？」

那由他と千恵とを見比べつつ、夏也が声を引きつらせた。

「きゃー、ちょっと千恵っ！　今日の昼休み、きっちりじっくりばぁ～っちりお話聞かせて貰いますからね！」

風花が興奮気味に抱きついてきた所で、一限開始のチャイムが鳴る。

不満げな声と共に、人垣が崩れてざわめきが少し静まる。

「ん、そういえば昼休みって……ねえ、ちょっと」
「……どうした？」
「あのさ、お昼……なんだけど、“ご飯”って……どうするの？」
千恵は小声で尋ねた。
「やっぱり……三食三度、血がご飯とか……」
「そうだ、と言ったらお前はどうするつもりなんだ。全く……そんな訳ないだろう。術や損傷などで何か熱源を一度に大量に失う様な事でもない限り、十日に一度の補給で充分事足りる。そんなにしょっちゅう血を吸われていたら、お前は三日と保たずに死ぬぞ？」
那由他は苦く笑いながら答えた。
「心配せずとも、普段は人と同じ食事で空腹は満たせる。……ただ、人の食事を欠かしても死ぬ事はないが、血の糧を欠かせば私は動けなくなる」
……こういう答えを返す時、彼は毎回こんな顔をする。
「ふうん、そうなんだ？　でも……今日はお弁当もお金も持ってるはずないよね？　じゃあ今日は購買に行こう、奢るからさ。……でも、あれ？　待って、」
朝にも思った、もう一つの疑問。
「……今日、学校終わった後は……どうするの？」
もう、社もなくただ祠があるだけの山の上の廃神社。
「どこか、他に行く所が――」
問いを遮る様に扉が開き、日直が起立の号令をかけた。
答えを聞く前に途切れた会話の続きを、那由他はもう一度苦い笑をこちらへ向けて返した。
彼が名乗った名字――若宮は、あの神社の名前であり、そしてこの街の名前でもある。
いや、本当は逆なのだろう。遥か昔からこの土地に棲まい、この土地を見守り続けた主の名が彼の住居（すまい）であった社の名となり、やがては土地の名となった。
だが社は既に廃れ、街も――千恵の幼かった頃の記憶と比べてさ

え、街の様子は随分変わったと思うのだから、彼の目にはもう全く違う街に見えるのかもしれない。

……彼の答えなど、聞かずとも簡単に察せられる。

――だったら。千恵は、もう一つの大きな決断を下した。

「……家に、来ない？」

教科書を見せるフリをして、ページの端にそう書きなぐる。

「――“イトコ”なんだから、一緒に住んでもおかしくないでしょ？」

千恵が意地悪く笑ってみせるのを、那由他は信じられないと驚いた顔で目を丸くした後で、渋い顔をしながらペンを走らせた。

「お前、自分が何を言っているか理解（わか）っているのか？」

「大丈夫、お父さんは単身赴任中だし、お母さんもほとんど戻って来ないし。たまに夏也が押しかけてくる以外は私しか家に居ないから。ちょうど部屋も空いてるし」

それを見た那由他は疲れた様に机に突っ伏した。

「お前、やっぱり理解ってないだろう……」

頭を抱えて那由他が呟く。

「私は人ではなくモノノケだが、……それでも“雄”だ。分かっているのか……？」

「そりゃあ、まあ。どう見ても女の子には見えないし」

「……そうか」

千恵の答えに那由他は短くそう返しただけで盛大にため息をついてそのまま押し黙り、それきり授業終了のチャイムが鳴るまでうんともすんとも言わずに机に伏したまま動かなくなってしまった。

「……？」

千恵は首を傾げたが、ジロリと先生に睨まれたのに気付いて、忙しく教科書の問題を解き始めた。

授業が終わり、先生が教室を出ていくと、待ってましたとばかりに再び那由他の周りに人垣ができる、その僅かな間に那由他はのそりと起き上がり、千恵の耳元でポツリと呟いた。

「一応念の為に忠告しておこう。……モノノケとて人の姿をとれば、子作りはできる。今後の為にも……良く覚えておけ」

「……え？」

しかし、聞き返す前に那由他の姿は黒山の人だかりの中に埋もれてしまう。

代わりに、群れの中の一人にジロリと睨まれた。

もう、同じクラスになって半年経つけれど、滅多な事では話したりなどする事のない、いつもキラキラと派手なグループのリーダー格の子。確か名前は……

思いだす前に、ケータイが鳴った。見ると、メールが一通届いている。

Ｔｉｍｅ　１１／２　９：５６
Ｆｒｏｍ　お父さん
Ｓｕｂ　誕生日おめでとう

▼遅くなったが、１６歳おめでとう。お母さんも、ひとまず元気にしている。

年末にはなるべく帰るつもりでいるから……

さっと、文面の最初だけ流し読み、最後まで読まず途中でクリアボタンを押して待ち受け画面に戻す。

「お父さんてば、娘の誕生日を間違えないでよね……」

パクンと携帯を折りたたみ、カバンに戻す。

人だかりの向こうで、京が恨めしげにこちらを眺めている。

弱みを見せたくなくて、落ち込む気持ちを振り払い、一つ大きく息を吐いた。

そうして、またチャイムが鳴り、二限が始まる。三限、四限……。

時計の針が十時、十一時、十二時と進み、教会の鐘が鳴り、それからしばらくして四限終了のチャイムが鳴る。

「じゃーん、これが今日の戦利品！」

「そうか。……一応聞くが、千恵、お前今度は一体何をする気だ……！？」

「決まってる、上に登るんだ」

千恵の夏也というらしい幼馴染みの少年は、呆れる那由他の隣で平然とそうのたまった。

「そうそう、この上が穴場なんだよー」

風花という名のやはり千恵の幼馴染だという少女もその光景を当たり前のように眺めながら言う。

あれよあれよという間に千恵は屋上へと出る扉のそのさらに上、給水塔がある屋根の上に登るためのハシゴに手を掛けたかと思えば、慣れた調子でするすると登っていく。

「教室じゃあ女子どもがうるせぇし、……ただ屋上ってだけでも昼メシスポットとしちゃメジャー過ぎてやっぱり女子に囲まれるだろ、……さっきみたいにお前がさ。」

最後の一言に少々の敵意を含ませ、夏也は言った。

購買という名の戦場から意気揚々とパンやおにぎりで一杯のビニール袋を引っ提げ戻って来た千恵を、那由他ともどもほぼ強制的と言うべき強引さでここまで引っ張って来たのは主に風花であったが、不機嫌そうな顔をしながらも、他の友人の誘いを断ってまでついて来た夏也は先程からどうも刺々しい態度ばかり向けてくる。

「こーら、夏也！　自分がモテないからってひがまなーい！」

千恵に続いてやはり慣れた様子で上へ登った風花が、悪戯っぽくこちらを見下ろす。

「誰がいつ、ひがんだ！？　つーか、モテねーとか決めつけんな！」

そして、夏也が続き。

「若宮君も登っておいでよー。気持ちいーよー」
那由他は仕方なくハシゴに手を伸ばした。
今日は天気も良く、朝方こそ冷えたが、陽の当たる屋上は爽やかな風が通り、街全体を見下ろせる絶好スポット。
ここから見ると、かつて禁域とされた山はぽつんと時代から取り残され、肩身も狭そうにこじんまりとして見える。村も、随分と様変わりしたものだと思う。正直、あの山と向こうに見える海とが無ければ、同じ場所とは到底思えない。
「うーん、京クンも誘ったんだけど。断られちゃったんだよねぇ」
「……この面食い女め」
「私も……あの人は、やめておいた方がいいと思うな」
ビニール袋の中身を那由他の前に並べながら、千恵は苦笑を返した。
「え？　でも千恵、転校してくる前から京クンと知り合いだったんじゃないの？」
「夏也に連れて行かれたライブハウスでちょっと声掛けられただけだよ」
「……あの時か。クソッ、そんな事ならチケットなんか風花にでも高く売り付けときゃよかったぜ」
「馬鹿だよねぇ、夏也も」
風花がクスクス笑う。
「でも、ホントに千恵の家に住むの？　若宮君」
「千恵は、そのつもりらしいが」
「そっかぁ、……千恵にはその方が良いかもしれないね。ま、夏也にとっちゃ大ピンチだろうけど、半分以上は自業自得だからねぇ。千恵の事を思えば絶対その方が良いと思う。……思うでしょ、夏也？」
物凄く不機嫌そうな顔をしていた夏也だったが、風花に迫られて渋々、
「……まだ、一年ちょいしか経ってねえんだもんな。俺だってまだ

変な感じがする。ああクソ、お前が野郎でさえなきゃ、もろ手を挙げて大歓迎してたとこなんだけどな！」

とぼやきながらも、一先ずの肯定を返した後で、ボソッと低く呟いた。

「おいコラ、テメー。一つ屋根の下に2人っきりだからってヘンなマネすんじゃねーぞ？」

「……元よりそんなつもりはないが。しかしそれより前に千恵の方にもう少し自覚を持たせるべきなのではないか？」

さすがにそろそろ夏也が微妙に非好意的である理由を察し始めていた那由他はため息を吐きつつそう返した。

だが、それに対して風花は

「あははー、それは否定しないけど。でも大丈夫だよぉ、千恵だもん」

と笑って流し、

「……まあ……そうだな。千恵だしな」

夏也ですら少し遠い目をした。

「すぐに分かるよ。……多分、二、三日中には嫌でも分かるはずだぜ」

――そう、二、三日どころかその僅か数時間後に、那由他は知る事になる。

第漆話　after school

「引ったくりー！！」

放課後、帰宅途中の出来事だった。

夏也は軽音部、風花は調理部の活動日なのだそうで、那由他は千恵と二人で街を――スーパーで買い物をしたいと言う千恵に付き合い、人通りの多い駅近くの道を歩いていたその時、後方から女性の金切り声が聞こえて。

すぐ隣を駆け抜けて行こうとする、全身黒っぽい服を着た二十代から三十代くらいの中肉中背の男に、那由他の前を歩いていた千恵が即座に反応した。

「こぉら、この不届き者がぁ！　いい歳した大の男がお婆ちゃんの荷物盗むな！」

押していた自転車をほっぽり出して、腕を掴み豪快に投げ飛ばしたかと思えば、即座に男の手を捻り上げ、関節技をかけて地面にねじ伏せる。

「だれかー、そこの角の交番からサブちゃ……お巡りさん呼んで来てー」

「よう、ちーちゃん。今年はこれで32人目だな。……で、今日のこいつは？」

「引ったくり。あのお婆ちゃんからバッグ盗ったの」

「だ、そうだ。おい磯野（いその）、奥でこいつの聴取取っとけ！」

「……千恵。一応聞くが、32人目、とは？」

「ちーちゃんがとっ捕まえた小悪党どものべ人数さ。この辺、強盗やら殺人やらみたいな凶悪犯罪なんかは滅多に無いんだが、引ったくりやらコソ泥やら万引きやらの軽犯罪は絶えなくてねー」

「そういう不心得者の現行犯逮捕件数は、正直な所、正規の警察官より彼女の方が成績優秀でね。よく街中で大立ち回りなんかする

から、この辺じゃあ結構有名なんですよ」
豪快な笑いが印象的な、五十歳代に見える男性警察官の部下であるらしい、磯野と呼ばれた彼が完全に世間話のノリで喋りながら、お茶を淹れてくれる。
「で、ちーちゃん。この連れの優男は？」
お茶を音を立てて啜りながら、目でこちらを指して尋ねられ、
「え、……ああ、イトコ……で」
しどろもどろに答えた。
「イトコ？　あんま似てねぇな。何だ、折角ちーちゃんにも春が来たのかと思ったんだけどな」
「……この辺りの悪ガキ連中は皆、彼女の武勇伝に怖れをなしてますからね」
「橘（たちばな）んとこのクソガキは今日は？」
橘、とは夏也の名字だ。
「部活ですよ、軽音部。何とかいうバンドの某ちゃんだかに影響されたっぽくて」
千恵の答えを聞いた彼はあちゃー、と頭を掻いた。
「あーあー、父親に似たのかぇ。全然ダメじゃねーか……」
そこでようやく、千恵が彼を
「ああ、えっと、この人はこの交番勤務のお巡りさんでね、普段から色々お世話になってて。名前が船越三郎（ふなこしさぶろう）だから、私はサブちゃんって呼んでるけど。で、夏也のお父さんも警察官なんだ。サブちゃんは、その元指導員なの」
と紹介してくれる。
「おう。まあ、俺は今も昔もしがない交番勤務。けどヤツは今じゃ所轄の刑事課長だがな」
と、陽気な調子で会話を続けていた“サブちゃん”がふと表情を改め、
「親父とおふくろさんは……まだ相変わらずかい？」
目を伏せながら尋ねた。

「うん……まだ家に居ると色々思い出しちゃうからって……」
「そうか……。こっちもコツコツ聞き込みやなんかしちゃぁいるんだが、……すまねぇな、まだコレっていう手掛かりが見つからんでなぁ」
引ったくり犯を引き連れ、奥へ引っ込む磯野氏の背を見送りながら、サブちゃんは湯呑に残った茶を一気に干し、
「橘のとこの親爺さんも心配しとったぞ。近頃のちーちゃんはちと根を詰め過ぎだってな。今日もこれから行くのかい？」
壁にかかった時計で時間を確かめる。
「ううん、今日はスーパーに用事があって」
「ああ、今日は木曜、か。駅前のスーパーの特売日だったな、そういえば。ああ、もしかしなくてもタイムセールが目当てだったか……婆ちゃんも？」
「そう！　タマゴとトイレットペーパー！！」
「うーん、相変わらず現役ぴっちぴちの女子高生とは思えぬ台詞だなあ」
「もー、船越さんも、ですよ。そのセリフ、一体どこの助平オヤジですか？」
呆れたサブちゃんのセリフに被せて、奥の部屋から磯野氏が更に呆れた声を出す。
「でも、それなら千恵ちゃん、急ぐんじゃないかい？　今日はもういいから、行きなさい」
磯野氏に促され、千恵が席を立つ。
「じゃあ、お言葉に甘えて。あ、お婆ちゃんも気をつけて。手提げバックだと狙われやすいからね、カバンはリュックの方がお勧めだよ。両手も空くから安全だし」
被害者の初老の女性に一言かけ、
「行こう？」
会話の最中に殆ど口を挟む余地もなく立ち尽くしていた那由他の手を引いて交番の外に出る。

「じゃあな、ちーちゃん。ああ、そうだ。今度、橘のにたまには呑みに付き合えって伝えといてくれるか？」

それを見送りに出てきたサブちゃんを振り返り、

「もー、下戸なの良く知ってるくせに面白がって呑まそうとするから、嫌がってこの辺に近付きたがらなくなるんだよ、おじさん」

千恵が答える。

「まあ、一応伝えるだけは伝えておくけどさ」

「おう、頼むぜ」

にかっ、と笑って中へ引っ込んでいくサブちゃんを背に、千恵は自転車を押して歩き出す。

この時期、5時を過ぎれば辺りはだいぶ暗さを増してくる。

「――夏也のお父さんは刑事さんなんだけど、夏也のお祖父さんは街で道場をやっててね、警察で武道の師(せんせい)もやってるの」

那由他はそれに、「そうか」とだけ返し、賑わう街中を黙って千恵の後について歩いた。

「ただいまー！」

誰も居ない、静かな家の玄関をバタンと音を立てて開け、玄関の明かりをつける。

「荷物持ちさせてごめんね？　取り敢えずそこに置いといて」

生鮮食品の入った袋だけ持って、千恵はダイニングキッチンの扉を開けた。野菜やら肉やら魚やら、冷蔵庫に押し込むだけ押し込んで、和室の居間に置かれた仏壇の前に座り、線香を焚き、チン、と一回、鐘を鳴らす。

仏壇の前に置かれた写真は、若い――と言うよりまだ幼い男の子のもの。

「……弟なの」

那由他が尋ねるより前に、千恵が口を開いた。

「秋刀(あきと)っていってね、私より五つ年下だったんだ」

それに、那由他が言葉を返そうと口を開くより前に、今度は玄関のチャイムが鳴り、それが鳴り止むのを待つ事なく扉が開いて。

「おい、千恵ー、帰ってんだろー？　おふくろがー、そのイトコとやらを連れてメシ食いに来いってよー！」

夏也の騒々しい声が響いた。そのまま、断りなく靴を脱いで上がり込み、

「ああ、いた。……もしかして、今帰って来たとこ？」

遠慮なく部屋へ入って来た。

「うん、ちょっとサブちゃんとこ寄った後でスーパーにも寄ってたから……。ちょっとここで待ってて。すぐ着替えるから」

キッチンの流しで手を洗い、千恵は那由他を連れて2階へ上がる。

「ここ、秋刀の部屋だったんだけど、今はもう誰も使ってないから。……それと、はいこれ着替え。お父さんので悪いけど」

渡されたのは、道着の袴。

「うちのお父さんも、昔は夏也のお祖父さんがやってる道場に通ってたんだよ。そこで、やっぱり武道を習わされてた夏也のお父さんと知り合って……。そういう縁で、私も武道習ってたからね。……昼間、夏也や風花が言ってたのはそういう事」

千恵は那由他に苦笑を向けた。

「小学校の頃に一度だけだけど、合気道で県大会までいった事もあるんだよ、私。だから、人が相手なら男にだって負けない」

それからくるりと後ろを向いて、ちえ、と下手なひらがなで書かれたプレートの下がった扉を開けた。

部屋の壁一面に、症状の入った額縁やメダルが飾られ、棚には幾つもトロフィーや楯が並ぶ。

「だから、余計に悔しい。あの時、もし私が傍にいたら……あんな事にはなってなかったんじゃないかって。あれから、お母さんは泣くばっかりで笑えなくなっちゃって。この家に——この街に居ると、辛い事とか色々思い出しちゃうからって、お母さんは滅多に家には帰って来ない。お父さんは元々仕事で単身赴任中だし。……も

しもこの上私までどうにかなっちゃったら、お母さん、本当に壊れちゃう」

那由他は、目の前の引き戸を開けてみた。部屋は六畳ほどの和室。

「京が、私をどうしたいのか知らないけど。京の言う“イヴ”って何なのか、分かんないけど。お母さんをこれ以上悲しませるような事にはさせたくないの。だから――」

「おーい、まだかー？」

階下から、夏也が叫ぶ声がして。

「まだに決まってるじゃない、もう！　別に急ぎじゃないんだから、いいでしょ？」

階下に叫び返し、

「……もう。夏也もうるさいし、さっさと着替えちゃおう」

那由他は急かされる様に部屋へと押し込まれた。

ピシャンとうるさく閉められた扉越しに、千恵が一言、呟いた。

「これから、しばらく……よろしくね。それと、遅くなったけど。――ありがとう」

千恵の気配が扉から離れ、向かの部屋の扉が閉まる音がして。

「……」

那由他は部屋を見回した。

押し入れの襖を開けてみると、ちゃんと手入れのされた布団が入っていた。

だが、他に家具といえる様なものは壁にかかった時計くらいのもので、少々ガランとした印象は拭えない。

ただ一つ、押し入れ脇の柱に刻まれた、背比べの跡らしき傷跡が、かつてのこの部屋の主の面影を思わせた。

那由他はその前にしゃがみ込み、そっとその傷跡に触れた。

「――家神よ」

「――。」

那由他の囁きに、周囲の霊気が揺らいだ。

家神とは、各家に憑くモノノケの一種で、神と名はつけど、地霊

の一種だ。主の声に応え、寄り集まった霊気がぼんやりと像を結ぶ。
昔は実体化などして座敷わらしと呼ばれる事もあった、それなりに力のあるモノノケであったのだが、……これはどうやら実体化どころか姿を保つ事すらままならない程に弱体化しているらしい。
「……それでこの邪気、か」
玄関を入るまでは那由他にも分からなかったが、家に入った途端、表とは明らかに濃度の違う邪気を感じた。
「それは、居つきたくないだろうな。肉体の健康に差し支える程の邪気ではないが……弱った精神（こころ）には痛すぎる毒だ」
こんな中で、千恵はよくぞああもつよくいられたものだ、と那由他は感心する。
「この邪気の質……京、か？」
この程度の邪気なら、本来は家神が祓ってしまえるはずなのだが。
「その様子では、悪霊一匹祓えまい……。仕方ないな、おい、愛羽家の家神よ。我が那由他の血を分け、お前を私の分身（わけみ）の力を与えてやる。その力を以って、家神としての本分を全うせよ」
那由他にとって血は生命力――力そのもの。モノノケにとって力は存在の証であり、年月を重ねる事により増大させていくもの。
那由他の血は、那由他の存在の証。それを喰わせるということは、自分の存在を喰わせるという事。
自分より永い時を存在した者の力を喰らえば、通常では与り得ない力が得られる。
「これは契約。我が力を得る代わりに、私の従となれ」
那由他は自分の牙で手首を噛んだ。傷口から滴った血が朱玉となって零れ落ちるのを、朧な霊体が飛びつくように受け止める。
実体のない、霧の様な霊体の身体に落ちた血は、それに触れた途端、赤い色の霧になり霧散するように消え、陽炎のようにゆらゆら揺らいでいた像も呼応するように霧散する。
瞬間、グラグラっと家が揺らいだ。
「きゃ、じ、地震？」

隣の部屋で千恵の声がして。
「おわ？」
階下からは驚く夏也の声もした。
揺れはすぐにおさまり、天井からぽたりと、一滴の水滴が落ちた。
ぽたり。ぽたり。まるで雨漏りの様に。ぽたり、ぽたり。落ちる滴が畳敷きの床に水たまりをつくる。
ある程度まで溜まった水が、突如その粘度を急激に増し、ぐにゃぐにゃと動いた――と思えば見る見る間に膨張していき、一つの姿（かたち）を成したところで固まり、パリン、と氷が砕けたような音と共に殻を破ったそれが姿を顕わした。
――大鴉（レイヴン）。
鷹ほどの大きさの、真っ黒な鴉（からす）が翼を広げ、一度、二度、三度と羽ばたき、旋風を起こす。
家に充満していた邪気はその風に吹き飛ばされる様に消え、代わりに清浄な気が満ちる。
「い、今地震っ、大丈夫だった！？」
バタンと、ノックもせずに扉を開けた千恵は、通常ではありえないサイズのからすに
「わ！？」
思わずといった様子で叫んだ。
「おい、今地震が……っ、大丈夫だったか千恵？」
バタバタと階段を駆け上がって来て、千恵と似たようなセリフを口にしたのは夏也で。
しかしこちらは部屋を覗き込んでも特に驚く事はなく、
「どうした、千恵？」
むしろ不思議そうに千恵を見た。
「え……？」
部屋の中を指さし、那由他とからすと夏也とを見比べた後で、
「あ……、と。何でもない……」
何かを察したのか、千恵は夏也を促し部屋の戸を閉める。

「き、着替えの邪魔してごめんね？　……私たち、下の居間で待ってるから。着替え済んだら降りて来て」
那由他は大きく長いため息を盛大に吐き出し、
「あー……、お前、名は？」
威厳も緊張感も厳粛さも中折れした気分になりながら問うた。
だがこの家に憑いた家神は、当然こうした事態など日常茶飯事なのだろう、全く動じる事なく問いに応えた。
「天羽（あまう）、と申します。お懐かしゅう御座います、那由他様……」
「……お前は、私を知っているのか？」
「はい。……とは言え手前はしがない家神風情。直接お目にかかった事は御座いませんでしたが、人の世が江戸から明治へと改められた時代より、この家に憑いております故。この度、この地の地霊の主たる那由他様から直に命を賜れました事、これもチエ様の想い故と信じ、この天羽、誠心誠意お仕え致します事を誓いましょう」
「ああ、……では。聞いていたな、ひとまず私は出掛けるが。留守は頼んだぞ」
そそくさと着替え、そして鴉に告げた。
「……行ってらっしゃいませ」
天羽は丁寧に頭を下げた後、するりと融ける様に床へ消えた。
（珍しく義理堅そうな奴だな。しかも鴉、ときたか。……もしかすると小笠か富士の天狗に縁あるものか？）
この地からそう遠くない山に棲まう天狗の一族。よく晴れた日に望める富士の山にもまた由緒ある天狗の一族が棲まっている。
「おーい、まだかー？」
階下から、夏也の急かす声がして。那由他は思案を中断し、扉を開けた。
「いや、もう済んだ。……待たせて悪かったな、今行く」
メール着信を知らせる着メロが鳴り、彼女はケータイを開いて届

いたメールを開いた。

Ｔｉｍｅ　１１／２　１８：１２
Ｆｒｏｍ　京クン
Ｓｕｂ　初メールだよ♪

▼みんな、昨日今日と一日色々ありがとう☆彡
なにかお礼したいな～と思ってメールしたんだけど（＊＾＾）ｖ
今日これから、僕とカラオケ行かない？

即座に返信メールを打ち、送信する。
少女は、慌てて髪にくしを当て、クローゼットを開け放ち、鏡との睨めっこを開始した。

Ｓｕｂ　行く行く～！！
Ｓｕｂ　誘ってくれてありがと（＾ｏ＾）ノ
Ｓｕｂ　嬉し～♪
……
……

引っ切り無しに鳴り続ける携帯の画面を眺めながら、京はほくそ笑んだ。
「別に、僕が動かなくても、僕のお願いを聞いてくれる娘（コ）はこれだけいるんだ」
ケータイを上着のポケットに滑り込ませ、京はカラオケチェーン店の扉をくぐった。
「いらっしゃいませ、お一人様ですか？」
「いえ、連れが後から大勢来るんで、広めの部屋をお願いしたい

んですけど。……そうだな、取りあえずまずは3時間からで」
カウンターの店員から、リモコンやらマイクやらの入ったカゴを受け取り、告げられた部屋番号をメールする。
「駅前のカラオケＢＯＸ、３０１号室で、待っ、て、る……よ、と」
ケータイの送信ボタンを押し、京は部屋の扉を押し開いた。
部屋の明かりをつけ、カゴをテーブルに置き、機器や部屋ののセッティングをしながら、
「――待ってるよ、たっぷり酔わせてあげる」
冷笑を浮かべた。
「代わりに君達の大事なもの、僕にくれたら嬉しいなぁ」

第捌話　night life

夏也と千恵との後ろに続き、那由他は隣家の敷居を跨いだ。
夏也にとっては自宅である。無遠慮に玄関を開け、
「おーい、母さん？　連れて来たぞー」
靴を脱ぎ散らかしながら奥へ叫んだ。
「おじゃましまーす」
と、口でこそ定型の挨拶をしながらも、千恵も遠慮のえの字も見当たらない慣れた様子で靴を脱ぎ、勝手知ったる……と言わんばかりに玄関わきの戸棚からスリッパを当然の顔をしながら二組取り出し。
「悠兄、昨日ぶりー」
夏也の案内を待つ事なく、ダイニングへ顔を出す。
「おばさんも。2日も続けてご飯に呼んで貰っちゃって。助かりますー」
「あら、いいのよー……って、そちらが……いとこさん？」
千恵の後ろで軽く会釈した那由他を見て、
「ああ、これは……。夏也、男ってのは諦めも肝心だぞ？」
夏也の兄、悠は開口一番、弟の肩をぽんと叩き、諭すように言った。
……が、ああも肩が――いや、良く見れば全身ぷるぷる小刻みに震えていれば、笑い出しそうなのを必死で堪えているらしい事など一目瞭然。
「それにしても、まあ道着が良く似合う事！　それ、柚鷹（ゆたか）さんのでしょ？」
ちらり、と目で問うと、千恵がこそっと耳打ちしてくれた。
「柚鷹って、ウチのお父さんの名前」
「でも、なんでおじさんの……しかも道着なんか着せられてるんだ、お前？」
「えっ、と。ちょっと急だったし、事情も色々あったりで、荷物

類届くの、もうしばらく先になりそうで！」
　夏也の問いに、千恵が慌てて誤魔化しにかかる。
「取りあえず、家にあったお父さんので間に合わせる事に……。もちろんフツーの服でも良かったんだけど。……何でかなぁ、こういうカッコの方がしっくりくるっていうか。今日一日制服姿見てたけど、……ホント、何でなのかなぁ、違和感……っていうか……」
　しっくりくる言葉が見つからないのか、言葉を探して目を泳がせる千恵に、
「これだけイケメンだとどんな格好でも似合いそうだけど。……でも確かに洋装より和装の方が似合いそうな顔立ちと身体つきかもしれないわねぇ」
　夏也の母親がうんうん、と同意するように頷き。
「……いいわ、着物男子！　いいじゃない！　ウチの息子達ってば、どっちもジャラジャラごっついアクセサリーぶら下げるばっかりで面白くないったら！」
　目を輝かせた。勢い良く迫られ、那由他は思わずのけ反る。
「ちょーっと、失礼」
　一体どこから取り出したのか、いつの間にかその手にはメジャーが握られており、その場でシャッ、シャッ、と実に手早く手際よく、口出しする暇もないままあっという間に全身採寸されてしまった。
「……おふくろ、ウチの親父と結婚する前は和裁の仕事してたんだよ」
　夏也がボソッと呟く。
「今でもたまーに作るんだけど。……祭りン時とかな」
「そう！　千恵ちゃんは喜んで着てくれたのに、ウチの息子どもったら！」
「だって、おばさんが作る浴衣、その辺で売ってるのより可愛かったし」
「あ、ああ……た、確かに……ち、千恵のは……か、かか、か――」

「うん。浴衣姿の千恵ちゃん、可愛かったよねー」
詰まった夏也のセリフに被せてさらりとにこやか爽やかに悠が言った。
「女の子の浴衣姿は眼福だけど……」
「――野郎の見ても、楽しくないしな」
悠に盗られた台詞に渋い顔をしつつも夏也が言う。
「これだから！　分かってないのよねー」
「分かります。――あのビミョーなチラリズムが……えと、ゴホン」
ぷんぷん怒る彼女に千恵が勢いづいて同意し、途中から小声でボショボショ呟く。
那由他は心の中だけで小さくため息をつくと、ぐるりと部屋を見回してみる。
（……なんと、まさか。あの状態でも愛羽家の家神はま強い方だった、とはな。この家にはすでに家神の気配すらない、か。この様子では、他の地霊たちも似たりよったり……かもしれんな）
那由他は自分の掌に視線を落とした。
（私の加護が絶えたせい……だろうな。もはや土地神でもなくなった。――地霊の主の名も返上すべきか……）
まだ、今しばらくはこの力を手放す訳にはいかない。……京の件を解決するまでは、まだ。
だが、それが片付き、千恵との契約を満了した暁には――
拳を握り、目を閉じる。
「おい、どうした？」
……目蓋に、少し力が入り過ぎていたらしい。眉間に寄ったしわを見て、夏也が、
「何だよ、そんなむつかしい顔しちゃって。……もしかして、秋刀のことか？」
怪訝そうな顔をする。
「いや。それに弟の事もまだ詳しくは聞いていないが……千恵の母

は滅多にこちらへ戻らないとは聞いた。しかし……千恵も共に――家族ごと引っ越す訳にはいかなかったのか？」

「ああ、うん。千恵の為にはその方が良いって、俺も分かってる。でも……どうしてもここを――この土地を離れたくないんだって……千恵が、言ったんだ。それで、俺、つい喜んじゃって。……サイテーだよな」

夏也は、千恵の耳に入らぬよう、小声で呟いた。

「でもホント、何でだろうな。小学校の時も、中学校の時も……修学旅行とかで泊まりがけの遠出をするとさ、いつも決まって辛そうな顔をするんだよ、あいつ。昼間、友だちとワイワイ騒いでる間は、楽しそうな顔してるんだけどさ。夜とか、ちょっと一人になった時とか……すごく、寂しそうな顔をするんだ」

くるりと、そっぽを向いて。

「千恵に聞いてみた事はあるんだ。だけど、あいつも『何でかは分からない』って。でも、この街を長く離れてるとどうしようもなく不安になるんだって、言ってたな。けど確かに、ここへ帰って来ると、すごくホッとした顔をするんだ」

そして、悔しそうな目を一瞬こちらに向け、悔しさを滲ませた声で付け加える。

「今日の朝の教室で担任がお前連れて入って来た時、千恵がお前に向けたのと同じ顔。昼間、メシ食ってる間中、あいつがお前に向けてたのと同じ顔をするんだよ」

食卓の椅子に腰を下ろしながら、

「悔しいけど。カラ元気じゃなく、ちゃんと自然に笑ってるトコ、久しぶりに見た」

テーブルに肘をついて頬杖をつき、この上なく行儀の悪い恰好で夏也は那由他を睨み上げた。

「……くそ、何なんだよお前。一体千恵に何した？」

とんとんと、地団太でも踏むように貧乏ゆすりをしながら恨みがましい目で見上げられて。

「何を、と言われても困るのだが……」
那由他が、千恵と出会ってからの僅か2日余りのその間にした事と言えば。
京に襲われていた彼女を庇い、その後で持ちかけた契約を無事に結び、その上で彼女の血を吸った……だけのはず。
「くそぅ、俺はまだ諦めねぇからな」
「いや、私は千恵とそういう関係をもつつもりは……」
ない、と続けようとした時。
「ねえ、おばさんが普段着用の新しい着物を作ってくれるって。色とか柄の好みとかある？」
屈託のない笑みを向けられて。
「は、あー……いや、あんまり派手な色柄でなければ……特には……」
続けようとしていたはずの言葉が何処かへ迷子になって。
無いはずの心鼓が、トクンと一拍――高鳴った気が、して。
「……？」
那由他は胸を押さえ、その手を見下ろして。
「チ、エ……？」
ぽそりと、呟いた。

ゴクリ、と、グラスに直接口をつけ、しゅわしゅわと泡の立つメロンソーダを一口含み、飲み下す。
「次、この曲聞きたい！」
楽曲の検索機をいじっていた女の子たちが、その曲の画面を京に見せた。
「……いいけど、いいの？　さっきから僕ばっかり歌っちゃってるけど」
そう口では言いながらも、京はマイクに手を伸ばす。
「いいのいいの、京クンが歌うの、こんなに間近でこんなにいっ

ぱい聞けるなんてそうそうないもん」
「ホント、超ラッキーじゃない、私たち？」
「うん。京クンがウチのクラスに転校してきてくれてマジ嬉しいから」
「そういって貰えるのは、僕も嬉しいな。……でも」
もう一度グラスを口元に運び、一口飲み。
「その心、僕の歌で一杯にしてくれたらもっと嬉しいんだけど？」
意識して色っぽい笑みを浮かべてみせる。
ソファに並んで掛ける女の子たちはたちまち顔を赤らめ、我先にと
「もう一杯だよー」
「もうとっくだって」
きゃいきゃいと争う様に言う。
「ふふっ、――じゃあ、少しの間だけ。君達の心……僕にくれない？」
もう一口、ソーダを口に含み。京は会心の笑みを浮かべた。

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……
教会の、鐘が鳴る。

「け、い……くん――」
うっとりと、夢心地の少女を腕に抱き、京は魅惑的な微笑みを浮かべる。
「僕が欲しいなら……ねえ、君の全てを僕に捧げてくれる？」
そっと、彼女の頬を掌でなぞりながら、親指で唇に触れる。
「君の心と身体……、全部僕のものにしても良い？」
少女はこくこくと言葉もなく首を縦に振る。
「ダメ。ちゃんと言葉をちょうだい。……ちゃんと言えたら、ご褒美にキスしてあげる」
「京……クン……。好き……私の心も身体も、全部あげるから……だから……」

その言葉を聞いて、京はニヤリと笑う。
「ああ……いいよ。最高の快楽を君にあげる」
唇と唇を、僅かに触れあわせ、キスをする。ただそれだけの軽い触れ合いに不満そうな顔をする少女の首筋に、顔を埋め、その肌に牙を突き立てる。
「あっ……いっ……痛……」
少女の訴えも無視して無遠慮に血を啜りあげる。
――そして数分後。
気を失い、くたりとした少女の身体を抱えながら、京が顔をしかめた。
「……やっぱりヴィンテージには程遠いな。葡萄味の砂糖水みたいだ」
ペッ、と唾を吐き捨てる。
「だが……目的は達した。契約は成った。さあ、……明日は僕の為にしっかり働いてくれよ？」
クスッと笑いながら少女の身体を抱え、京は夜の闇の中へと姿を消した――。

第玖話　lost memory

……こんな風に曇りのない笑顔を誰かから向けられたのは、いつ以来だっただろう。――もしかしたら、初めてだったかもしれない。

言葉を失い、木に懐いた那由他に向かって、元気良く頭を下げ、

「え、えーと、ふ、ふつつか者ですが！　よろしくお願いします！」

やる気に満ち満ちた眼差しでこちらを見上げてくる。

「えっと、えっと。村の長さまは、お仕事について何にもお話ししてくれなかったんですけど、私、何をしたらいいですか？」

「――先程、話した通りだ。私の糧となる事が、巫女（いけにえ）の仕事。十日に一度、私に血を差し出せばそれで良い。住まいへ案内する。後はそこで好きに過ごすと良い」

木から身体を引き剥がし、何とか立ち直った那由他は路の先にある小屋へと彼女を導いた。

村の長屋の一屋分程の広さの小屋。歴代の巫女達が日々戦々恐々としながら、任期満了の日を待ちわびつつその日暮らしを続けてきた場所だ。

扉を開けて入るとすぐ土間があり、水場とかまどが据えられている。板の間には囲炉裏があり、寝具一式が部屋の隅に畳んで置かれている。

鍋やら何やら生活用品は一通り棚に並んでいるし、生活に困る事は無いはずだ。

「今日登って来た路の途中、先程のあの場所に祠があったのを覚えているか？」

チエが頷くのを見て、那由他は続けた。

「週に一度、あそこに村人らからの供物として農作物などが捧げられる事になっている。それと、山の山菜や木の実などは自由に採って良いから、それで日々の食事は間に合わせると良い」

「分かりました！　早速ですが那由他様、好き嫌いなどございま

すか？」

「は、いや、特には……っ、て、おいこら、何処へ行く！？」

勢い込んで尋ねてきたかと思えば、即座に踵を返し、山の奥へと駆けだしていく元気な少女の背に、那由他は慌てて声をかける。

「もちろん、那由他様のお夕飯の為の材料調達に参るのですよ！　……て、あれ。ええと、那由他様はもしかしてお食事は……血以外はお召し上がりにはならないので？」

「いや……そんな事はないが……」

ああ良かった、巫女の“お役目”はきちんと理解しているようだ……と那由他は少しホッとする。もしかして……まだよく理解できていないのではないのか、という疑惑が晴れたからだ。

「では、行って参ります。少々お待ち下さいね、今夜はとびきりのごちそうをご用意いたしますから！」

だが、安心したのもつかの間。キャッキャとはしゃいで山へ分け入っていく少女に、

「こら、だから待て……！　山には獣やモノノケも多く棲んでおるのだぞ！？」

「きゃー、おっきくて美味しそうな猪！」

「は、猪！？　あっ、危なっ！！！」

慌ててついていくハメになる。

――それは、これから続いて行く、ドタバタな始まりの日。

「こら、チエ！　待て！」

京、と名乗る同族が、海を渡ってやって来るその日まで続く……幸せな日々は、こうして始まったのだ。

――教会の鐘の音が聞こえて。

那由他はふと目を覚ました。暖かに温もった布団の中から天井を見上げる。

ここは愛羽家――千恵の家だ。自分にあてがわれた和室に敷いた布団の上に、今、那由他はいる。

「今のは……何だ。夢……？」

既に、夢の記憶は大半が霧散し、揺らぐ残像だけが脳裏に焼き付いている。

自分に向けられた、屈託のない笑み。

「チエ……、千恵？」

口の中で転がすたび、甘やかに響く言霊。

「何故だ。……何故、まだ記憶が戻らない」

封印されていた間に弱体化した身体は、今朝方吸った千恵の血のおかげで大方は元に戻った。混乱していた記憶も戻った。

――が。肝心の、封印された頃の記憶……まさに、今必要とされる京との因縁が記されているはずの記憶だけがごっそり抜けおち、どうしても思い出せない。

「今の夢……は」

歴代、幾人もの巫女が自分に捧げられてきた。その事は既にちゃんと思いだした。那由他はその歴代の巫女を全て、少なくとも顔と名前は全部覚えている。

だが……。

「あれ……は、誰……だ？」

夢の少女の笑顔が、思い出せない。思い出そうとすると、取って代わる様に千恵の顔と入れ替わる。

もう一度。あの夢へ戻れないだろうか？

那由他は目を閉じる。

そう、もう一度あの幸せな日々へ――。

ふと気付くと、……何故だろう。暖かい……が――僅かに息苦しい。何か、少し重たいものが乗っかっている様な。

けれどそれは不快な感覚ではなく、むしろ程良い熱がじんわりと

身体に浸透していく様で心地良い。
うつらうつらとまだ夢の半ばに意識を漂わせながら、その温もりを楽しむ。
今の時期の朝晩はまだ冷える。血の熱さえ足りていれば、外気の寒暖――暑さ寒さを不快に感じるなどあり得ない身体だが、この温もりの心地良さと言ったら。
しばらく布団から出たくなくなりそうだ。
（……ん、布団？）
……妙だ。
普段の寝床は、いつでも小屋の外。
例えばそこらの草むらか、丈夫な木の上だとか、枯れ木の洞（うろ）の中だとか。
猛吹雪の中に素っ裸で居ても平気な身体だ。当然、野宿をするのに布団など使わない。場合により、枕くらいなら持ち歩く事もあるが……。
しかしこれは間違いなく敷布団を敷き、掛け布団を掛け、しっかり全身布団に包まっている状態だ。
しかも、敷布団の下にあるのは霜に濡れた草はらや、ごつごつした小石が散らばる地面や、やや安定性に欠ける木の枝などではない。れっきとした床だ。
この山で、寝床となり得る床面など、たった一か所にしかない。
――巫女の住まいである小屋にしか、そんな物は存在しない。
もう一つ。布団だって、ただ一組だけしか無かったはずだ。……そう、もちろん巫女の住まいである小屋にある、ただ一組だけ。
……これが夢なら良いが。もしも夢でないとしたら、今自分は巫女の住まう小屋で、巫女が寝るはずの布団に転がって寝こけている、という事になる。
考えれば考える程、ふわふわしていた夢心地がとぐろを巻いてそこを漂う意識を締め付ける。まるで真綿で首を絞めるかのように。
心地良い眠りにあったはずの意識を慌てて水面へと引き上げ、那

由他は恐る恐る目を開けた。
真っ先に目に映ったのは、小屋の天井。そしてそこから視線を斜め右下へと持っていったところで、那由他は全身を強張らせた。
身体の上に掛けられた布団のその上で、布団にしがみ付く様にうつ伏せに眠る一人の少女――温もりと、重みと、少しの息苦しさの正体は、つい昨日、新たに迎え入れたばかりの巫女だったらしい。
告げられた事実の全てをあっさり受け入れ、怖がるどころか意気揚々と山で食材集めに励み、実に楽しそうに鼻歌など歌いながら集めた食材を調理し、出来た料理を嬉々として那由他の前に並べ、綺麗に空になった食器を満足げに眺めた後で、せっせと後片付けに勤しんでいた。

そう、そうだ。食材集めの為と山に分け入った少女は、食材に関する知識は一通り持っている様で、食べられる山菜やキノコ、木の実と、毒がある等で食べられないものとをしっかり見分け、きちんと必要な分だけ採り分けていた。
――が。この山には獣も、モノノケもいる。
まずから、大きな成獣の猪を見て、最初に浮かぶ感想が「美味しそう」とは……。
前足で地面を掻き、突撃開始までの秒読みに入る猪を前に、少女は目を輝かせていた。
その巨体が幼い少女にぶつかればどうなるか。那由他は慌てて間に入り、一言命じた。
「退け、獣よ」
九十九神でもない、ただの獣が相手だ。その一言で、猪は脱兎のごとく逃げ出す。
「あー……牡丹鍋の主役が……」
那由他の後ろで、少女は残念そうに呟いた後で、
「次は、逃がしません！」
めらめらと闘志を漲らせ、さらに山の奥へと駆けだしていき――

「あっ、こら待てっ！！」

……と。こんな調子で一日中山の中を駆け回るハメになったのだが。

彼女の作った料理は、美味しかった。物凄く旨い、とはもちろん言えない。あくまで家庭料理として、普通に食べて美味しい、と思える程度だが、それは久々に食べた暖かな手料理で。

那由他がぼそりと無愛想に「うまい」と呟いた言葉に、少女は嬉しそうに笑った。

朝から調子も狂いっぱなしで、身体はともかく精神的に相当疲れていたのに違いない。食事の後の記憶は曖昧、しかも途中で完全に途切れている。……食事の後でつい眠り込んでしまったらしい。

野宿が常の那由他だ。眠りこんだ後で無意識に布団に潜り込むなんて事は多分ないはず。……と、すると。

くしゅん、と小さくくしゃみをしたこの少女の仕業だろう。

……それにしても。例え寒いからなのだとして、那由他も眠っていたとはいえ、よくもまあ、この自分にこんなにくっついていられるものだ。

寒さのせいか、身を縮こまらせてはいるが、実に平和で幸せそうな少女の寝顔。

と、不意に規則正しい寝息が途切れ、少女の目がぱちりと開き、那由他とばっちり目があった。

一瞬、間があった。彼女が現状を把握しつつ、昨夜の出来事を回想するだけの間が。

そして次の瞬間、蒼白な顔で飛びのき、部屋の隅で平伏し。

その様子に那由他は（ああ、やっぱりか）、と心の中で呟いたが。

「も、申し訳ございません！」

チエは思い切り良く土下座をしながら謝罪の言葉を叫んだ。

「すみません、すみません、昨日は確かに囲炉裏の端っこで寝ていたはずだったのに。い、いつの間にか那由他様のお布団に潜り込もうとしてたなんて……」

良く見れば、目には涙まで浮かんでいる。

「た、大変な失礼をいたしまして。本当に申し訳ございません、この通り、謝りますから。お願いです、巫女を辞めろとか山を降りろとか仰らないでください」

「……は、今……何と？」

那由他は聞き間違えたのかとつい聞き返した。今の言い様はまるで巫女を辞めたくない、山を降りたくないと言っている様に聞こえたから。

「昨日、言ったはずだ。巫女の任期は5年。それが過ぎるまで、山を降りて村へ帰る事は出来ぬのだと。ところで……昨夜、私を布団へ寝かせたのはお前か？」

「はい、お食事の後、そのままお休みになってしまわれたので。それで……あ、あの……無礼を働いた分のお咎めは……？」

恐る恐る顔を上げて尋ねる少女に、那由他は片眉を上げた。

「無礼？」

「おっ、畏れ多くも山神様のご寝所に潜り込むなんて、とんだ御無礼を……」

どうやら今、彼女が畏れているのは那由他自身ではなく、自分がやらかした行為に対する那由他の反応であるらしい。

「それも、昨日言ったはずだ。私は神などではない、ただのモノノケだと。布団の件ではむしろ私が謝らねばならん。……人の身、それも女子供の身ではこの時期の山の上の朝晩の冷えは堪えるだろうに、お前の布団を私が使ってしまったからな。寒かったのであろう？」

「あ、はい……いえ、あの。わ、私、うちにはたくさんのきょうだいがいて。いつも狭い部屋でぎゅう詰めで寝るのが当たり前で。こんな広いとこで寝るのは初めてで……それで、人恋しくなって……つい」

涙目のまま、必死に訳を言い募る。

「巫女は、私の大事な糧。体調を崩されては私が困る。この布団は本来お前の為の物。お前が謝る必要はないし、もちろん咎めなど

せぬ」

そう言ってやると、少女は身体の緊張を解き、明らかにホッとした顔でようやく床から立ち上がった。ぺこりと、一度頭を下げ、

「ありがとうございます。すぐに朝食の支度を致しますので。少々お待ち下さいね」

そしてやはり嬉しそうな顔で言う。

さすがに那由他も認めざるを得なかった。

彼女が、那由他（じぶん）を畏れはしても、恐れや嫌悪の感情などただの一かけらも抱いていないのだという事実を。那由他の巫女である事に、真実喜びのみを感じているのだと。

那由他の心に、かつてない程大きな疑問が渦巻いた。――何故、と。

野菜の煮物とみそ汁に白米と言ういたって純朴な朝食を、やはり彼女と2人で摂る。

あからさまな恐怖や嫌悪を向けられるのが当たり前だった那由他にとっては実に新鮮な光景である。

今、彼女から向けられるのは純粋な畏れと好意。

少しばかり決まり悪く、尻の座りが落ち着かない気もするが、悪い気はしないし、居心地も良い。

「チエ、今日も山へ行くのか？」

「はい。でも、その前に弓矢か釣り竿など調達できないものかと思っておりまして……」

「弓と竿？」

「兄さまについて川へ釣りに行ったり、弓の稽古などもよくしておりましたので。狩りや漁ができれば、お肉やお魚料理を那由他様に召し上がっていただけます」

少女は張り切って言った。

「弓矢の腕前は、兄さま達より上手いと、師範にお褒めの言葉も頂きました。村へ迷い込んで来た鹿を仕留めた事もございます。昨日は逃げられてしまいましたが、今日こそはあの猪で牡丹鍋を……」

グッと、箸を握りしめ堂々とその決意を宣言する。
「チエよ。この山には獣だけでなく、モノノケも多く棲まっている。人の子が一人、山の奥まで分け入れば、あっという間にそれらの餌食となろう」
空になった茶碗を静かに置きながら、那由他は言った。
「私は、神ではない。私は、モノノケ――この山に棲まう全てのものの主だ」
湯のみに、淹れたてのお茶が注がれる。
「私の命に逆らえるものは、この山には居ない。この小屋の周辺には決して近づかぬよう厳命してある故、この小屋周辺は安全だ。だが、山に於いては自然の規律が唯一かつ絶対の掟であり、弱肉強食は当然の理。一歩そこへ踏み入れば、お前もその理に組み込まれる事になる。」
注がれた茶を一口啜り、湯のみを置く。
「この山に棲まう八百万ものそれら全てにお前を紹介して回るのは不可能だ。そうである以上、そうなればお前がただの非力な人の子である限り、お前はそれらの餌となる定めにある」
安い茶葉だが、割合に美味い。
「――お前に、私の“印”をやろう」
それは、全ての巫女に提示してきた提案だ。
「その“印”は、お前が私のものだという証。主の所有物（もの）に手を出す輩はこの山には居ない。……お前が真実、私の巫女（もの）である事を受け入れるのならば、お前にこの那由他の“印”を授け、刻んでやろう」
これは、より確実な身の安全を保障する為の提案。
だが、これまで誰一人として那由他の印を受け入れたものは無かったのだ。
――当然だ。化け物の所有物である証を欲しがる者などいるはずがない。
これまで気の遠くなる程の間ずっと、そう思っていたのに。

この少女は、那由他の当たり前をいとも容易く打ち砕く。
少女は、あっさり頷き、期待に満ちたまなざしをこちらへ向けた。
「……では、手を貸せ。お前、利き手はどちらだ、右か？　そうか、では右手を出せ」
差し出された手を取ると、好奇心で輝いた瞳で、ジッと那由他の手元を見つめるチエの頬がほんの僅かに赤らんだ。
その手の甲に、血で己の印の紋様を刻む。
印は、証。ある一定以上の力を有したモノノケのみが有する、己の力の象徴。
血は、那由他の力そのものであり、全てのモノノケにとって、力こそが存在の証。
血（ちから）を用い描いた印（あかし）は強力な“力の誇示”
それを刻むという事は、これは自分のものだという主張――獣が己の縄張りを主張して行う匂いつけと意図は同じ。
刻まれた印は皮膚から身の内へ取り込まれて見た目には消えるが、獣やモノノケはそれを感覚で察知する。
だが、自身では分からないのだろう。チエは印の消えた右手の甲を左手で撫でさすりながら、首を傾げている。
「……目には見えずとも、山に棲まうものたちは必ず気付く。お前が、私のものだとな」
もう一口、茶を啜り。
「そうと知りながら、お前に手を出す輩はこの山には居ないはずだが、もし万が一そういう輩に出くわしたら、私の名を呼べ」
印を刻んだ手の手に視線をやる。
「その印は、私の一部。それを持つお前の声ならば、この山のどこに居ようと私は察知できる」
そう、だからこれで一安心だ……。
――そう、那由他は思っていた……の、だが……。

「ただ今戻りました！」

朝食の片付けを済ませ、洗濯をし、洗ったものを表に干して。
太陽もだいぶ高く昇り、気温も朝より上がって過ごし易くなってきた頃合いを見計らい、今日も元気に山へ出かけて行った彼女が、やっぱり元気いっぱいに戻って来たのは昼前の事。
だが、その彼女には連れがいた。
「あ、主……」
大きな体躯に似合わない声を出したのは。
「迅(じん)……？」
大陸に棲むものと比べればやや小柄ながら、山の王者であるはずの日本狼の九十九神。
それが、目に涙を一杯にためながら、得意げな笑みを浮かべるチエの後ろにつき従っている。
狼は本来家族単位の小さな群れをつくる。その中での順位は絶対で、自分より強いものの前に立って歩くなどあり得ない。逆をいえば、自分より弱いものが前に立とうとしたなら、当然それ相応の報復をし、自らの位を主張する。
それは、長く生きて九十九神となった後も変わらぬ狼の性だ。
この山に、迅より強いものは那由他以外には居ない。この山で迅を従えられるのは那由他のみ。確かにチエにはその那由他の“印”があるが、あれはあくまで“所有印”だ。単に危害を加える事を禁じているだけで、それ以上の意味は無い。
しかし、狼はチエの後ろに黙ってつき従っている。……今にも泣き出しそうではあるが。
群れの中で順位を上げようと思えば、上位のものに闘いを挑み、勝って奪い取らねばならないはずだが……。
「……迅？」
「主……あの娘、何者ですか。巫女？　人間？　嘘でしょう？」
ついに堪え切れずに溢れた涙を滂沱と流し始めた迅がこぼした言葉に那由他は唖然とするしかなく。
「ええ、ええ。主の“印”を持ってましたからね、しかも相手は

人間の女、それも子どもで非力だし、怪我させちゃマズいと油断してたのは認めますよ。でも、まさか……この俺がこんな小娘にしてやられただなんて……」

うおぅ、うおぅ、と泣きながら愚痴る狼と、機嫌良く笑うチエを前に、那由他は、顔を引きつらせながら黙り込むしか、なかった――。

第拾話　an ordeal

「良いのか、本当に。……たかがモノノケ一匹の為にお前は命を捨てると申すのか？」

チエに問うたのは、人づてならぬモノノケづてにようやく見つけた神だ。

「――必ず戻ると、お約束したのです。あの方を、あそこからお救いする術を携えて、必ず戻ると。再びお会いできるその日を夢見て……それだけを支えに私はここまで参りました」

降って来るような荘厳な声に、チエは首から下げた赤い勾玉を胸に抱き、静かに答えた。

「長く、辛い道のりでしたが……今もあの方が感じてらっしゃるであろう苦しみを思えば、大した事ではございません。そして、今ようやくあの方をお救いする術を見つけることができたのです」

あの日――あの町を旅立ったあの日から、チエは歩き続けた。

那由他を封じた術がどういったものなのか。

それを知るため、遠く他所の教会へ出向き、彼を封じた神父と同類の者らが集う中で、彼を害した教えを必死に学んだ。

祓魔師（エクソシスト）が扱う術は基本的に彼らの「神」に仕える天使の力を借りたものである事。

あの時展開された魔法陣から、地水火風を統べるとされる大天使の力を用いた術である事も知った。

だが、その力を打ち消す為の術など、当然と言えば当然だが、どの教典にも載ってはいなかった。

だが、チエは考えた。彼らの言う天使とは、位の高い精霊の一種の様なものなのではないかと。

それならば、同等の力をぶつけて相殺すれば、術を打ち消せるの

ではないかと。

そう考えたチエは、今はもう懐かしい、那由他と過ごしたあの山へと出向き、彼から預かった力を使い、山のモノノケたちに話を聞いて回った。

そこで得た情報を頼りに、モノノケからモノノケへと、噂を集めて回った。

……モノノケ相手に、ただで情報を得る事はできない。

例えば、髪や生爪だったり。例えば血や肉だったり。あるいは寿命の一部だったり。まさに文字通り身を削りながら辿り着いたのは、四獣と呼ばれる神の獣。

地の玄武、水の青龍、火の朱雀、風の白虎。

彼らの棲まう地を、これまたモノノケ伝いに探し当て、彼らの“印”を分けて貰って歩いて。

そうして集めた力を今、術として成す為に訪れたのは、四獣の長である神、応竜のを祀る社の奥、異界との狭間の谷間で。

「これは私にとって最後の試練なのです。もう一度、あの方にお会いするための……あの方との幸せな永久の日々を得る為の試練を受ける代償が、今世の命なのだと、ただそれだけの事です」

山の山頂。深い霧のかかる幻想的な景色。――そこは既に人の世とは一線を画した神域。

「その術を扱うのに、人の身では耐えられない。一度魂だけの存在になる必要があるだろう。その身体で死を迎え、転生を待つ間に魂の中で術は熟し、再び転生してこの世に戻って来た時、初めてその術は発動する――が、一度転生すれば今ある記憶は全て魂の奥へ封じ込められ、新たな生ではまず思い出せなくなる。……事実、前世の記憶など今思いだせるか？　思い出せないであろう？　だがその術は、そのモノノケとやらが封じられたという棺に直接触れるか、もしくはほど近い場所に十余年あまりもの間居続けねば効果は無い。まあ……一日たりとも離れてはならん、とまでは言わぬがな」

それを聞いたチエは、胸を撫で下ろした。
「……“あれ”を、彼らに託してきて良かった」
だから、大丈夫。

「応竜さま、お願い致します。術の完成の為、お力をお貸しください」
チエは迷う事なく応竜に頭を下げた。
「――決心は、揺るがぬのだな。良いだろう、承知した」
とぐろを巻いた竜神が、三つ指の手に持った龍玉を掲げた。
「お前の死後、術を仕込んだお前の魂を確実に天へ送り届けると約束してやろう」
龍玉が、淡く光る。――と、チエの前に杯が一つ現れた。杯は透明な何かの液体で満たされている。
「杯を干せ。さすれば、魂を穢れさせる事なく確実に死ねる。……ただし、苦しまずに死ねるなどとは思うなよ。自ら命を断つ行為が罪である事に変わりはないのだからな」
「……ありがとうございます」
神に、助力の礼を告げ、チエは杯を手に取った。そのまま口元へ運び、くぴっと一息にあおる。ごくり、と、ほんの一口分の量の液体を飲み込んで――杯が、手からこぼれ落ちた。
杯は、地に落ち割れる前に霧の様に消え失せ、代わりにチエの身体が地へと倒れこんだ。
全身に雷を打ち込まれた様な凄まじい痛みが走る。
せめて、この神の前で悲鳴を上げてみっともなく転げ回る様な失態だけはすまいと必死に地面を掻き、歯を食いしばって悲鳴を堪える。
痛い、痛い、痛い。頭の中にそれしか思い浮かばなくなるが、それでも脳裏に焼き付いて離れないのは、那由他の顔で。
この痛みは、彼を救うための試練の一つ。そう思えば、この位は

耐えられる。
次第に思考がぼやけ、那由他の顔もぼけていく。
この凄まじい痛みすらも、暗闇の奥の更に奥底へと沈んでいき――

そして、何も分からなくなった。

「……あ、いけねぇ。俺ぇ、もしかして寝過しちまったかも？
うわぁ、やべぇ！　い、急がねぇと、チエ様にブチ殺される！！」
むくりと、ほら穴から顔を出し、辺りを見回してから、慌てた様にそこから飛び出し、深い山の奥、生い茂る森や林の中を、神速で駆け抜ける大きな獣があった。
「大事な預かり物、主に届けろってご命令だったな。……ああ、懐かしい。確かに、主の匂いと気配だ」
獣は、嬉しそうな顔をした。
「チエ様、やったんだな。さっすがチエ様！　もうしばし、待って下せぇよ！　今すぐ、馳せ参じます故！」
山の獣――猿や鹿が怯えて逃げまどい、冬眠前の食い溜め中の熊でさえ、慌てて路を譲る中、獣は巨体に似合わぬ軽快な足取りで疾走を続け――

……何だろう、またまた、またしても何だか妙な夢を見た気がする。
炊飯ジャーの蓋を開け、きちんとご飯が炊けているのを確認し、湿したしゃもじで十字を切り、ふんわりとかき混ぜながら、千恵はため息をつきつつ眉間にしわを寄せた。
妙な夢を見た、という気はするのに、やはりというか夢の内容が思い出せない。

考え込みながら、鰹出汁と薄口しょうゆを煮たてた鍋に、溶き卵を流す。

と、キッチンタイマーが鳴った。

コンロ下の魚焼きグリルを開け、ジュウジュウと鮭の皮目に程良く焦げ目がつき、良い焼け具合なのを確認し、皿に盛る。

塩茹でしたブロッコリーをゴマで和え、盛り付けた皿を食卓へ運ぶ。

四人掛けの食卓に掛けながら、興味深そうにテレビを見ている那由他の横に、もう一人――いやもう一羽居る。

「……これはテレビ、という機械……道具でございまして。遠く他所で写したものを、これで見る事ができるのです。これは毎朝やっている報道番組で、いわゆるかわら版の映像版みたいなものでして……」

と、文明の利器について説明しているのは――あの昨日のからす。

「え、……と。ご飯、出来たんだけど……そちらは？」

那由他の前に皿を並べつつ、尋ねると、からすが頭を下げ、

「我が名は天羽――約１５０年、この家に憑いている家神に御座います」

と、人の言葉を喋った。

「……千恵。お前、天羽が視えるのか？」

その横で、那由他がからすと千恵とを見比べながら尋ねる。

「え……？　そりゃぁ、まあ。だって……普通に居るし。……でも、そういえば夏也は気付いてなかったみたいだったよね、昨日」

「千恵様の持つ魂の御力――なのでしょうな、やはり……」

天羽はポツリと小さく呟き、その言葉に２人が怪訝そうな表情をするのを見て、

「……迅め。一体何処で道草を食っておる。よもや、まだどこぞの穴ぐらで寝こけている等とは申すまいな」

忌々しげに呟く。

「――待て。今、迅、と申したか？　迅を知っているのか？」

「……迅の事は、覚えておられるのですね。はい、存じ上げております。那由他様が封印されてしまわれた後の事ではございますが、直接会いましたので」

「！、お前は当時の事を知っているのか？」

「――直接は、存じ上げておりません。私は、とある方から事情を伺い、そのお話の内容を存じているのみでございます」

「……とある方？」

「はい。その御方は那由他様にお仕えしておられた最後の巫女様に御座います」

那由他の脳裏に一瞬、夢の中の笑みがちらついた。

「最後……、私の記憶にある一番最後の巫女の名はユリ……そう、任期を終えた彼女を見送って――」

見送って、そして――

「……その後の記憶が――ない。封印から目ざめた直後はまるで頭にもやがかかった様で、自分の名すらまともに思いだせなかったが……」

那由他は、ちらりと千恵を見やった後で目を伏せる。、

「あの夜、千恵に触れた時に感じた熱がそのもやを掃い、私は自分の素生を思い出せた。それでもまだ朧だった記憶も、千恵から血を得て取り戻した。だが、その記憶だけ、未だ深い霧に覆われ、良く思い出せない」

「……ユリ様は、かの方の前任の巫女にございます。彼女に代わり、次代の巫女として選ばれたかの方は、那由他様が封印された後も、那由他様の巫女として、那由他様の為に、その封を破る術を探し続けておられました」

「……巫女、が？　まさか――」

天羽は、ふさふさの胸元の羽毛を掻き分けるように嘴を挿し入れ、そこから何かを咥えて取りだした。

それは、赤い珠――いや、それには見覚えがあった。赤い、勾玉……。

「これは、かの方から託され、今日まで丁重に御預かりしていた物。記憶の封を完全に解く為に必要な三つの鍵の内の一つにございます」

天羽は、それをそっとテーブルに置いた。

那由他は怪訝な顔でそれを眺めながら手に取り、そして首を傾げた。

「……特に、何も感じないのだが」

「はい。……残念ながら、それ一つだけでは何の用も為しません。三つのうちのもう一つの鍵は、迅がかの方から託され、護っているはずなのですが――」

「――迅、が？　巫女の……人間の頼みごとを聞き入れた……と？」

ポカンと大口を開けて唖然としながら、那由他は信じられない、と小さくぽそりとこぼした。

「鍵は、三つある、と言ったな。後の一つは……」

「すでに、揃ってございます。ですから、迅が持つ鍵が最後の一つ――それさえ揃えば」

天羽は、千恵を一度真っ直ぐ見据えた後で時計を眺めて言った。

「ですが……今は、迅がそれを持って参らぬ限り、どうにもなりません。――お時間もそろそろ無くなってまいりましたし……この続きはまた後ほどにして、今はお食事をお召し上がりになられては如何ですか？」

天羽の視線につられて振り返った千恵が悲鳴を上げた。

「ぎゃあ、もうこんな時間！！　早くしないと遅刻ー！！」

慌ただしく食卓につき、猛然とご飯を掻き込む。

「……」

那由他はまだ何か考え込んでいる様だったが、それでも茶碗と箸を手に持ち、黙々と食事を始めた。

微妙に固かった表情が、一瞬、和らいだ。それは、ブロッコリーの胡麻和えを口へ運び、一度、二度と咀嚼した時の事。

どうやら好みの味だったらしく、「……うまい」と千恵の耳にぎりぎり届く程の小声でポツリと呟いた。

もくもくと、皿に盛った分をあっという間に平らげてしまった。

時間は正直結構切羽詰まってきている状態なのに、自宅での食事――とくに朝食に限っては一人で食べるのが当たり前だった千恵は、なんとなく漂うほのぼのとした空気に思わずそのまま和んでいたい気分になる。

――が、もちろん現実にはそうはいかない。食後のお茶を啜る那由他をしり目に、大急ぎで2人分の弁当を用意する。

そして。十数分後。

隣で小馬鹿にした視線を向ける夏也と、張り切る千恵とを那由他は引きつった顔で交互に見比べた後で、ため息をつき、顔を引きつらせたまま一応、尋ねてみた。

「……千恵。私に、一体何をしろと？」

「うん？　だって那由他の自転車は無いし、そもそも乗った事無いでしょ？　だから取り敢えず私の後ろに乗ってって」

千恵が、自転車の荷台を指して言った。

「もうちょっと時間に余裕があれば歩いてでも行けるんだけど……、」

「今から歩いて行ったんじゃ、確実に遅刻だな。別に、一日か二日位なら、兄貴の自転車貸しても良いけど、……乗れないんだろ、お前？」

「……確かに、乗った事はないが――」

へへん、と少々得意げな表情を隠しもせず鼻で笑った夏也に、少しムッとしながら答えるも、

「今は『初めての自転車講習』やってる時間はないんだ。……とはいえ、お前と千恵とで二人乗りなんかさせられるか。おい、お前。千歩譲って俺のに乗っけてってやるから、うだうだ言ってねーでとっとと乗れ」

――千恵の後ろに乗るよりは……と、渋々彼の後ろで荷台にまたがるハメになる。

忙しない朝の街を、2台の自転車が軽快に走り抜けて行く。

今日も、天気は良さそうだ。――その分朝の空気は冷え、頬に当たる風が冷たい。

那由他は、遠い青空を仰ぎ、眩しい日差しに目を細め――。

千恵は、それを少し後ろから眺めつつ、朝の話を思い返しつつ――ツキン、と心にできたささくれ傷が地味に痛むのを感じ、首を傾げながら、自転車のペダルを思い切り踏み込んだ。

第拾壱話　ｐｒｅｃｉｏｕｓ　ｐｅｒｓｏｎ

そうして、昨日と同じく京を警戒しつつも、当たり前の日常が過ぎていく……と、思っていたのだが――。

「まさか……今時、こんな場所で吊し上げ？　そんな一昔前のマンガみたいな事、本気でやってるの、コレ？　で、ご用件は？」

ついつい半眼になりながら、千恵はいかにもな場所――学校の校舎裏の中庭で、自分の周りを取り囲む女子の集団を眺め回した。

そう、昨日と同じく那由他や風花とお昼を食べようと教室を出ようとしたところで、同じクラスの女子に呼び止められた。

昨日、那由他を囲んでいた女子の中、きつい眼差しでこちらを睨んで来た――そう、思い出した……確か名前は音矢夕子（おとやゆうこ）。

どうやら、彼女がこの集団の頭目らしい。

彼女に声を掛けられた時点で、そのツンケンした態度にあまり良い予感はしていなかったとはいえ。

――まあ、用件に関してはなんとなく察している。おそらく大方……

「ねえあんたさぁ、若宮君のコト、どう思ってるワケ？」

あまりに予想通りの答えに、千恵はため息をついた。

（……ああ、やっぱりか）

「イトコって聞いたけど……まさかホントに一緒に暮らしてるワケ？」

「確かに那由他はイトコで、今一緒に住んでるけど。それがどうかした？」

イトコ、というのは大ウソだが。真実を告げたところで彼女たちは信じまい。

「ホントにそれだけ？　単なるイトコってだけにしてはちょっと親密過ぎる気がするんだけど」

千恵は先頭切って詰めよって来る彼女を負けじと睨み返しながら

言った。
「彼の事をどう思ってるか……だっけ？」
千恵は当たり前に言い放つ。
「那由他は、私にとって大事な人だよ」
「なっ、だ、大事な人って！　ま、まさかあんた、若宮君と付き合ってるの？」
夕子がカッと叫ぶと、後ろの集団からも、
「えー、全然似合ってなーい」
だの、
「昨日も駅前で暴れたって噂になってたんだよ。もう、女じゃないよね？」
「若宮君、この子に脅されて付き合わされてるんじゃない？」
「えー、若宮君かわいそー」
だのとブーブー罵る声が次々に上がる。
「あんた、若宮君には似合わないって自分で分かんないの？　さっさと別れなさいよ！」
それを総括するように、彼女は千恵に突きつけた。後ろからは尚も「別れろ」コールが続いている。
「……私、那由他とそういう関係だなんて一言も言ってないんだけど」
千恵は一段低い声で言いながら腰に当て、
「私と彼はそういう関係じゃないし、人の恋路に口出しする趣味もないけど。でも、あんた達に彼を好きだなんて言って欲しくない」
周囲を睥睨する。
「なっ……、何であんたにそんな事言われなくちゃならないのよ！」
「それはこっちのセリフ。もし仮に私と彼が付き合ってたとしても、ううん、そうなら尚更、何であんた達に別れろなんて言われなきゃならないのよ、それもこんな形で」
集団を、真っ向から睨み返し。

「ねえ、大事な人って言われて即イコール恋人だとしか思えないの、あんた達って？　親とかきょうだいとか……家族は？　友だちは？　あんた達にとって大事なのは彼氏だけとか言う？　他は大事じゃないワケ？」

問いを突き返した。

だが、その問いに応える声は意外な場所から上がった。

「――全くもってその通りだな」

女子の集団の背後から声がした。彼女たちは慌てて振り返る。

「え……あっ、わ、若宮君……」

「恋人、というのはつまり将来は夫……すなわち家族になるやもしれん相手の事だろう？　友や家族を大事にできない者が、果たして本当に恋人を大事にできるのか……。甚だ疑問に思えるのだが」

那由他は、肩をすくめて見せた。

「え、那由他？　何でこんな所に……？」

「お前の友人に、えらい剣幕で助けに行って来いと詰め寄られてな。だが見たところ、お前一人で充分対処可能のように見受けられたしな。むしろ私が割って入った方がかえって厄介な事態になりそうな気もしたから、少々見物していたのだが――」

言いながら、那由他はあさっての方を睨みつけた。

「うーん、全く期待ハズレだったねー」

その視線の先――ストン、と2階の窓から身軽に飛び降りたのは。

「京……」

「嫉妬に狂った醜い女共に囲まれて滅茶苦茶にされて、『きゃー那由他様ー！』とかってそいつに縋りつくトコとか見たかったのに」

クスッ、と嫌な笑いを浮かべた京。

「その芯の強いとこ、変わってないね。……面白くないなぁ」

パチンと指を鳴らして。

「正気のまんまの彼女たちじゃ、君の相手には役不足だね？」

京は可愛く首を傾げて見せた。

「……こうすれば見られるかな、僕の期待する光景が」

千恵は京を警戒しつつも、その言動の意図が掴めず訝しげに彼を睨んだが、その隣で那由他が激昂し、叫んだ。

「――貴様！！」

京はその様をさも愉快そうに眺める。

「フフッ、さあどうする？」

おかしそうに笑いながら、那由他に問う。

「馬鹿な生き物だよな、人間なんてさ。ちょっと甘く言い寄れば簡単に堕ちてくれる。一時の享楽と引き換えに、彼女たちは僕に心を差し出した」

ゆらりと、集団が動いた。

「まあ当然分かってると思うけど、一応念押し。僕が彼女たちと交わしたのは単なる言霊の契約。彼女たち、生物学的にはまだ人間のままだけど……」

ヒュっ、と耳元で空を切る音がして。

千恵は反射的に避け――直後、トスっと背後で軽い音がして。

背後の木に、カッターナイフが突き刺さった。

「ちょっ……、何っ、刃物って……冗談じゃ済まな……っ、て！」

やけに素早く後ろに回り込んだ一人が、拾った枝切れを千恵の頭目掛けて降り下ろそうとしたのを転げて逃れる。

ぼきっと、狙いを外して地面に当たった衝撃で折れた枝切れが飛んでくるのを更に跳んで避け、落ちたそれを拾ってクルリと後ろへ向き直り、振り下ろされるもう一本の木切れを受け止める。

――庭木のか細い枝木に、女の細腕とはいえ、こんなものに目一杯の力を込めて頭をぶん殴られれば軽傷では済まないだろう。

がっちり正面で受け止めたのを跳ね返して立ち上がり、ブン、と木切れを振り回して牽制し、間合いを確保する。

頭で考える余裕などない。それら全てを脊髄反射でこなした千恵は、いつの間にか自分一人だけ校舎の中で、窓から顔を出してひらひら手を振って笑っている彼を睨みつけた。

千恵の視線に気づいた彼は満足げに微笑み。

「君の持つその“印”。それがある限り、僕自身は君に手を出せないけどね……こうしてお願いすれば、君を痛めつけるなんて朝飯前……おっと、この時間じゃ昼飯前だったね？」

そうおどけてみせた。

ヒュっと小石が頬を掠め、ピッと一筋頬に傷が走り、ジワリと血が滲む。

それを皮切りに、ヒュンヒュンと幾つも石つぶてが宙を舞い、千恵は慌てて手近な木を盾にする。

「ほーら那由他様、大事な大事な契約者様が傷めつけられてますよ？　さーあ、どうしますー？　ねえ、これでもアンタは彼女たちを救う？　お優しい土地神様？」

那由他は憤怒の形相で京を睨みつけるも、そこから動こうとしない。

千恵がいて、女子の集団があって、那由他がいて。

女の子たちは京の盾となる様に、校舎の前に陣取る集団と、千恵への攻撃に加わっている二つに分かれ、那由他に直接構う者は一人も居ない。

ちょうど、那由他の周りだけぽっかり空間が拓けていて。距離的には、京を攻撃するにも千恵を助けるにも、一歩踏み出せばすぐにも女の子たちに手の届く距離。

だが、呆れるほどに誠実で律義で――土地や人を守る土地神を自負する彼は、その拳を痛そうな程に握りしめ、怒りと悔しさで震え、京を見据えるその目は、常の黒からほのかに赤みを帯びている。

京を攻撃するにも、千恵を助けるにも、間には女の子たちが居る。京に操られた彼女たちが、黙って通してくれるはずがないだろう事など、容易に察せられる。

那由他は、彼女たちを傷つけたくないのだろう。

京の好い様に言い包められたらしい彼女たちに責任が無いとは言えない分、単なる被害者と言うにはさすがに抵抗があるが、今回の場合、彼女らは巻き込まれた側である。

千恵だって、彼女たちを巻き込んだ責任は感じている。――でも。

「ねえ、京。確かあなたは、私が滅茶苦茶にされて『きゃー』とか可愛く悲鳴をあげてる姿が見たかったって言ったわね？　でも残念、……お生憎様。悪いけど私、そんなキャラじゃないの。それともう一つ、ご愁傷様。私はね、那由他みたいに優しくなんかないんだよ」

隠れていた木の陰から飛び出し、京の前に並ぶ女の子たちの首後ろの急所を狙って素早く手刀を繰り出し、彼女たちの意識を強制的に奪う。

次々と倒れ伏す女の子たちを冷たく見下ろし。

「私は、ただ守られ庇われしてきゃーきゃー悲鳴をあげてるだけなんて、とてもじゃないけど我慢できないもの。自分の大事なものは自分で守る。……その大事なものを壊そうとする相手にまで情けをかけられる程、私の心は広くないから」

ピッとまた一筋頬に傷が走る。

「ただの人間でしかない私も、京……あなたに直接手出しするのは難しいけど。素人の女の子が相手ならこの位は――」

千恵は飛んでくる石つぶてに構わず突っ込み、もう一つの集団に迫る。

顔や腕、脚――直に空に触れている箇所に、細かな傷を幾つも拵えながら、それでもしなやかな動きで一人一人確実に仕留めていく。

「――私にとっては朝飯前……じゃなかった、昼飯前だったわね」

最後の一人が地面に沈んで。

「うーん、確かにこれは僕のミスキャストだねえ」

やけに芝居がかった声で、いかにも残念そうに京が言う。

「……京よ。私の契約者に傷をつけ、私の庇護下にある者たちにまで手を出した以上、覚悟はできているな」

今や完全に赤く染まった瞳で京を静かに睨み、那由他がようやくそこから一歩踏み出す。

そしてまず先に千恵の許へと歩み寄ると、頬に幾つも走る傷から

滴る血をそっと指で優しく拭い、指を染めた血をぺろりと舐め。
「……すまなかった。護ると言いながら、お前に怪我をさせた」
那由他は、謝罪の言葉を口にした。
こちらを見下ろす優しい眼差しを向ける瞳の、人ならざる赤い色がとても綺麗で。
「大丈夫だよ。だって私があなたと結んだ契約内容は、京から私を守る事。言ったでしょう？　普通の人間相手なら負けないって。この程度の傷、舐めとけばすぐ治るし……ってか、あなたの“印”のお陰で既にもう殆ど治ってるし」
実際、腕や脚にできた傷のあらかたはもうとっくに血も止まり先にできた傷は既に塞がりかけている。
今、那由他が拭ったのは一番新しくできたばかりの傷だ。
「あーあー、見せつけてくれるねえ。ごちそうさまー。……でもさ、ちょっと油断し過ぎ」
京にとっては万事休すな状況のはずが、彼は余裕の笑みを浮かべる。
「……まあ、ちょっと旗色が悪いから。今日のところは退散するけど」
「私が、お前を見逃すと思うのか？」
「見逃さざるを得なくなるだろうね。僕は彼女たちに、僕と一緒にカラオケで楽しく過ごす代わりに、『君達の心を僕にくれない？』ってお願いしただけだったんだけど」
一様に倒れ伏した少女たちの中、むくりと身体を起こした少女が一人。
――音矢夕子、だ。
起き上がった彼女に、意識がないのはすぐに見て取れた。なのに、ゆらゆらと不安定な足取りながら、こちらへ歩いてくる。
「彼女は僕ともっと深い関係になる事を望んだ。僕の口づけ一つと引き換えに、彼女は心だけでなく、身体もくれたんだ。……僕のキスは特別製だからね」

那由他は京にのみ聞こえる声で尋ねた。
「……彼女の血を、吸ったのか」
「まあね。でも、そこはお互いさまじゃない？　……吸ったんでしょ、僕のイヴの血を。ねえ、僕のヴィンテージ・ワインの味はどうだった？」
京はニヤリと笑い、同じく那由他にのみ聞こえる声で答えを返し、悔しげに睨んだ後で、小さく肩をすくめ、京はわざとらしくひらひらと手を振りながら、悠々と廊下を歩いて去っていく。
「じゃあね、後よろしく頼むよ」
「……キス一つと、引き換え？　何、じゃあこの子、京とそんな事しときながら、私に那由他と別れろだなんて言ってたワケ？　あっきれた！」
いくら自由恋愛が基本、遊び半分の付き合いも珍しくない時代とはいえ限度はある。
そうぷんぷん怒る千恵の横で、那由他が一歩前に出る。千恵の前に腕を差し出し、自分の背後に庇おうとする。
「千恵、下がっていろ」
だが千恵は、
「大丈夫だよ。……女の子相手に怪我はさせたくないし、巻き込んだ事は謝んなきゃだけど、正直あんまり同情してあげる気にはなれないし。悪いけど、ちょっと痛い思いをしてもらって……」
言いながら、那由他の影から飛び出した。
……既に意識は無いのだから、失神狙いの急所突きが無意味なのは分かっている。取り敢えず、関節を固めて動きを止めるつもりで軽く組み合い、捉えようとした身体が……するりと、腕をすり抜けた。
それは、素人の女子には不可能な動き。
「――え？」
千恵をかわした拍子によろめき、木にぶつかる彼女を振り返れば、先だって投げつけられたカッターナイフを力任せに抜き、那由他へ

と向かっていくのが見えて。
　那由他は、身軽に木の枝へ飛び上がってそれを避け、そこから更に跳躍して千恵の前へ飛び降り、那由他は苦々しく言った。
「下がっていろ、千恵。彼女は確かにまだ人間ではあるが、今の彼女は普段秘められているはずの力……いわゆる火事場の馬鹿力が、京に無理矢理引き出されている」
　ゆらりと振り返りながら、一瞬ガクリと崩れかけ、彼女の顔が僅かに歪む。
「本来備わっている筋力の全てを行使しようとすれば、身体が耐えられず、筋肉が壊れる。本来であれば、無意識にそれを抑制するのが当たり前なのだが、京に操られ続ける限り、彼女が己の心身を省みる事は無い」
「そんなっ、酷い事……」
「……安易にモノノケに心身を捧げ渡した愚かさの代償、と切り捨てるのはさすがに酷だな」
　カッターを振りかざし、ゆらゆら近づいてくる少女に那由他は憐みの視線を向けた。
「千恵、下がっていろ」
　もう一度厳命を下し、那由他が一歩踏み出した。少女は那由他目掛けて刃を突き出す。那由他はあえてそれを避けもせずに素手で受け止め、刃が掌をつき通し手の甲まで貫通するのを冷めた目で見下ろしながら、それごと少女の手を掴んで捕えた。
鈍く光る刃の先で、ぬらぬら赤く染めていく血を、那由他はもう片方の手で拭った。血に染まった手を握りしめ、再び開かれたその掌の上には、見覚えのある赤い勾玉が乗っていて。
　那由他はそれを指でつまんで少女の唇に押し当て、口内へ――そして喉の奥へと押し込み、無理矢理それを飲み込ませた。
「――那由他の名に於いて命じる。今この場で京との契約を破棄せよ」
　少女が、弱々しい小声で何かを呟き。途端、少女は糸が切れた様

にカクンと膝を折り、しなだれかかる様に那由他の胸へと倒れこむ。
それを抱き止めた那由他を見た途端、千恵は胸がチクリと痛むのを感じ、ふと胸を押さえ、無意識に息を詰めた。……胸が、苦しい。
彼がそうしたのはほんの一瞬の事。
彼女を静かに地面に下ろし、掌を貫通したカッターナイフを抜きにかかる。
――見るだに痛々しく血に染まった手。
しかし那由他は何でもない様な顔をして抜いたそれを放り捨て、辺りを見回して苦々しく言った。
「……逃げられたな」
「いや、それより……大丈夫なの、それ。超痛そうなうえ、ガンガン血が出てるんだけど。血が失くなると動けなるんじゃなかったっけ？　血、飲んどく？」
「この程度なら問題ない。それに、血なら先程既に貰った」
赤から黒へと戻った瞳に苦笑を浮かべ、那由他はもう一度、千恵の頬をなぞった。
そうだ。確かにさっき血を舐めていた。ちょっと切っただけの小さな傷から滴ったほんの数滴の血。
うっかり思い出し、顔から火が出そうになる。全く、一々心臓に刺激的な行動ばかりしてくれる。
「……さて、この娘たち。さすがにこのまま放置するわけにはいくまい？　千恵、起こすのを手伝え」
と、昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。
「……あ、お昼御飯食べ損ねた」
くきゅるるる、と間抜けな腹の音を響かせた千恵に、那由他はつい噴き出しそうになったのを慌てて堪えた。
「帰る途中で何か食べて帰るか？」
「うん。今日は寒いしラーメンとかうどんとか……あ、でも牛丼の新メニューも捨てがたいんだよね」
「帰るまでには、決めておけよ」

言いながら、堪え切れずに笑いを洩らし、肩を震わせた那由他の姿に、千恵の心臓が、無性にざわめいた。

「……さて。今回の敗因はやっぱり僕のキャスティングミス、だよね。あーあ、那由他には有効だったんだけどなぁ」

京は屋上で寝転がり、ケータイをいじりながら呟く。

「大事なものは自分で守る、か……。なら……その大事なものが相手なら、君は……どうする？」

パタパタと、階段を駆け上がる音を聞き付け、京は立ち上がり、開いた屋上の扉から顔を出した少女を振り返った。

「やあ、柊木（ひいらぎ）さん。ごめんね、突然呼びだしちゃって」

甘い笑みを浮かべて京は言う。

「ねえ、僕と付き合ってくれない……？」

「……千恵。お前の胃袋は一体どうなっているんだ」

学校帰りに寄ったのは、牛丼チェーン店。

テーブル席で向い合せに座りながら、普通に並盛を食べる那由他の前で、みそ汁とサラダつきメガ盛り牛丼をぺろりと平らげる様に、那由他は引きつった声を出した。

「昼食を食べ損ねて腹が減っている、というのは分かるが――」

どう見ても、女性が一人で食べる量ではない。見ているだけでこっちの腹の方が一杯になりそうだ。

「千恵って、アレなんだよね。痩せの大食いってヤツ」

千恵の隣でミニ牛丼を食べながら、風花が言った。

「ほーんと、羨ましいったら」

肘でえいえいと軽く小突かれ、千恵は苦笑を返す。

「……そういや昨日の晩飯、あんま食ってなかったよな。よく考

え……なくても一昨日の昼も、晩飯も。やっぱ、どっか具合悪かったんじゃないのか？」

那由他の隣で大盛り牛丼を食べていた夏也が言った。

「……昨日？　……普通に一人前を平らげていた様に思うが？」

昨夜、夏也宅で出された鍋料理を、遠慮なく突いていた様に見えたのだが。

「ええっ、それは絶対におかしい！」

風花がすかさず突っ込んだ。

「一人前？　いつもの千恵なら鍋一つ平気で食べちゃうのに！」

「鍋……、一つ？」

那由他の顔の引きつり具合が増す。

「最近の千恵、なーんか変だよね。だって、突然倒れたのだってその一昨日じゃない？」

風花がずずいッと獲物を狙う目つきで千恵を下から覗き込むように見上げ、

「あやしーなー。やっぱり何か隠してるでしょ。悩み事があるなら言ってよ、いつでも相談に乗るよ？」

言いながら、彼女は一瞬ハッとした顔をし、

「……まさか。千恵、ホントに恋煩いとかじゃあないよね？」

それを聞いてゴフッと夏也が汚く吹き出したが、当の千恵は不思議そうに首を傾げながら、胸を押さえてキョトンとしている。

「恋、煩い……？」

「千恵がおかしくなったのって、あのハロウィンの夜からでしょ？　……もしかして、京に一目惚れしちゃった……とかじゃ……ないよね？」

その問いに、千恵は首をぶんぶんと勢い良く左右に振って即座に否定する。

「違う、あり得ない！　京とだけはそういうの、絶対ないから！」

「そう？」

風花は一瞬ホッとした顔をした後で、

「でも……京じゃないとすると……」
ちらりと那由他を見ながら、千恵の耳元にボソッと吹き込む。
「若宮君、とか……？」
胸に当てた手を見下ろし、考え込むように黙り込んでしまった千恵に、
「まさか夏也じゃないよね？」
更に尋ねた。
これには、
「え……、何でそこで夏也が出てくるの？」
と即座に逆に尋ねる答えがかえった。
隣で夏也ががくりと項垂れる。那由他は取り敢えず、夏也の背をいたわる様に叩いてやった。
「ねえ、千恵。今日これからヒマ？　――ヒマだよね？　ちょっと私に付き合って。たまには男抜きで女同士のお喋りしましょう。……若宮君、ちょっと千恵、借りてくね？　ああ、夕飯時までにはちゃーんと返すから」
皿が全て綺麗に空になったのを見計らい、風花は相変わらずの強引さで千恵を引っ張って行ってしまった。
「おい、お前はこの後ヒマか？」
それを那由他と共に見送った夏也が不意に尋ねてきた。
「いや、特に予定はないが」
「なら、お前は俺に付き合え。ああ、風花が千恵を解放するだろう頃合いには帰してやるから安心しろ」
ついて来い、と席を立ち店を出る。
「……？」
そうして連れて行かれたのは。
「道場……もしかしてここが千恵の言っていた……」
「ああ、祖父ちゃんがやってる道場で、親父も通ってたってんで、昔は俺や兄貴も通わされてた。千恵に……女相手に全然勝てなくて悔しくて、面白くなくなって俺は早々にやめちまったけどな」

カラリ、と引き戸を開けて声を張り上げた。
「おーい、祖父さん居るんだろー？」
建物の外観は、この街に数ある住宅とほぼ変わらぬ装いだ。取り立てて古くも新しくもなく。扉の先には一本、縦に長い廊下が裏口の扉まで続き、左右の壁に幾つか引き戸が並んでいる。
その一つががらりと開き、柔道着を着た男――おそらくあれが夏也の祖父なのだろう、それを踏まえれば歳は七十前後と思われたが、年の割にはまだ若々しく、かくしゃくとした雰囲気がある。
その彼は、つかつかと孫へと歩み寄り。
いきなりガツンと、夏也の頭を容赦なくグーで、殴りつけた。

第拾弐話　one's real intention

「い、痛ってー！　何すんだよぅ」
ゴン、とかなり痛そうな良い音がした。
「ふん、ここでは師範と呼べといつも言っているだろう。……で、夏也。そちらさんは？」
「ん、ああ。千恵のイトコ……だってさ」
那由他は軽く会釈をする。
「お初にお目にかかります。若宮那由他と申します。千恵のいとこで、訳あって先日から彼女の家でお世話になっています。その縁で、彼や彼のご家族にも良くしていただきまして――」
「……それで、ちょっと部屋、貸して欲しいんだけど」
那由他の言葉を遮り、夏也が言うのを見下ろし、彼はハーっと拳に息を吹きかけ、もう一発ガツンと殴りつける。
「夏也。ここではきちんと礼節をわきまえ、目上の者には敬語を使え、といつも言っているはずだな」
……やっぱりいい音がして、
「痛てっ！」
夏也がうっすら涙目になりながら悲鳴を上げる。
「夏也。今日は千恵はどうした、来ないのか？　それと……若宮君、と言ったかね。君は夏也の同級生かね？　武術の方は――」
「はい、同じクラスです。千恵なら、柊木さんと一緒ですよ。武術は……正式に習った事は一度もありませんが」
「ふむ。……それで夏也、部屋を何に使うつもりだ？」
「ちょっと、男同士の話し合いを――」
するつもりで、と続けようとした夏也を、彼は三度殴った。
「神聖な道場を、私闘に使う事は許さん。……自己紹介がまだだったな。私はこの道場の師範を務める、橘柑吉（たちばなかんきち）、聞いてはいるだろうが夏也の祖父だ。君は、何のためにここへ来た？」

「……すみません。行き先も聞かずに彼について来たので。ただ、昨日駅前の交番の――船越さん……でしたっけ、彼から千恵を心配していると聞きました。もし良ければ、話を聞かせては貰えませんか？」

夏也が、頭を押さえながら、こちらを見た。

「私はしばらくの間、彼女と同居する事になっています。簡単な事情は千恵自身から聞きましたが、彼女が話してくれた以上の事を、彼女の前で聞くのは良くないと控えていましたが、私は知るべき事をきちんと知った上で彼女を支えたい、そう思うんです」

「……そうか。取り敢えず上がって……来なさい」

師範は廊下の一番奥の扉を開け、中へ二人を導いた。

「――で、どうなの実際のとこ？　千恵、まんざらでもないんじゃないの、若宮君の事」

かなり強引に連れてこられたのは、風花の自宅。その彼女の部屋で、湯気の立つミルクティーを飲みながらビスケットをかじる。

カーペット敷きの床に座布団を敷いて座り、適当に足を投げ出して寛ぎながらも、そう迫る風花の顔は全然寛いでいない。完全に真剣そのもの、何かしら有益な情報を得るまでは諦めないからね、と、言葉には出さずとも、その視線が雄弁に語っていた。

人間相手の喧嘩なら負けない自信のある千恵も、風花にこうやって迫られると弱い。

「……どう、と言われても。いとこ、って言っても会うのは初めてで。本当にまだ会ったばかりなんだもん」

しかも人には言えないが本当はいとこでも何でもなく。それどころか人ですらない。

「でも、嫌いじゃないでしょ、彼の事」

……それは、そうだ。人ではないけれど、誠実で、律義で。

よく心臓に悪い事もしてくれるけど、責任感が強くて、契約とは

いえちゃんと千恵を守ってくれて。
「うん。嫌いじゃ、ない。ううん、私にとっては大事な人。でも、彼氏とか、そういうのじゃなく、風花や夏也や……お母さんたちを大事に思うのと同じで……」
言いながら、千恵は思い出す。
あの時、音矢さんを抱き止めた那由他を見てチクリと痛んだ心。
怒りと悔しさに震えながら睨みつける赤い瞳に思わずドキッとしてしまった胸。
ここ最近、しょっちゅう爆発する心臓。
そして何よりも、彼の傍に居る事で得る安心感が。
例えば夏也や悠兄、風花や両親相手には今まで感じた事のない感情。
――本当に……
「ねえ、千恵。それ本当に、例えば夏也相手に感じてるのと同じ？」
千恵の頭に僅かに過った疑問を風花が言葉にして尋ねた。
「最近、夏也ってばどこだかのバンドの女の子に夢中だけどさ、それについて千恵、何か思う事ある？　こう、胸が痛いとか」
千恵は首を左右に振り、
「え？　……ないけど」
一瞬ドキッとしながらも答える。そう、夏也相手には感じた事のない――
「だよね。でもじゃあ、若宮君相手には？　実はさ、昼間千恵がクラスの女子に連れ去られちゃった後、私、若宮君を呼びに行ったんだけど……その時さ、あのグループの一人が彼に告ってたんだ」
「え！？」
「まあ、若宮君の注意を千恵から逸らすのが目的だったんだろうと思うし、若宮君もその場でソッコー断ってたけど」
「あ、あー、そ、そうなんだ……」
「ねえ、千恵。今、ホッとしなかった？　若宮君が告られてたっ

て聞いて、一瞬ドキッとしなかった？」
……した。胸がチクリと痛んで。その後で、すごくホッとした。
「ねえ、その時彼、何て言って断ったと思う？」
風花が何故か半眼になりながら言った。
「『今、私にとって一番大事なのは千恵を護る事。千恵との約束がある限り、私は彼女の傍に居ると決めている』」
それは――それが、千恵が那由他と交わした契約だから。……分かっている、はずなのに。勝手にドキドキする心臓を思わず止めてしまいたくなる。
「ねえ、どこの少女漫画のヒーローなの、彼は。告った女も凄い顔してたけど、私だってしばらくトイレで鏡と睨めっこするハメになったよ……」
意思とは無関係に火照る顔をクッションに埋める千恵に、
「……認めなさい、千恵。若宮君の事、好きなんでしょ？」
風花が突きつける。

――好き。……那由他の事が、好き。
初めて会った瞬間から蠢く心の奥の感情とは別に。
実際に彼と関わり合う中で育ったそれは、紛れもない千恵自身の想い。

でも。
彼が千恵を護るのは、契約だから。
彼は、モノノケで。
千恵は、人間で。
千恵は、彼の糧で。

彼の事が好き。……だけどきっと、この想いが叶う事は無い。
――だから。
「……好きじゃ、ないよ。彼の事、夏也より大事に思ってるのは

認めるけど。そういう好きじゃ、ない」

午後五時半。……夕飯時までにはもうしばらくある。
ケータイで時間を確認し、千恵はぽつぽつ星が浮かび始めた空を見上げた。
自覚してしまった想いと、分かりきった未来に痛む心。
思わず泣きたくなって、風花の家を飛び出してきた。
このまま家に帰ればきっと、那由他が待ってる。
「ちょっと、道場に寄って行こうかな」
ちゃんと心頭滅却していかねば、きっと心が耐えられないから。
そう思い、見慣れた道場の扉を開けた。
「こんばんわー。師範、いらっしゃいますか？」
ガタっ、と奥の部屋から音がして、ガラリと開いた扉から師範が顔を覗かせた。
「おや、千恵。風花と一緒だったんじゃなかったのか？」
何故師範がそれを知っているのか。
「はい、ついさっきまで一緒でしたよ。でも、帰る前にちょっと身体を動かして行こうかと思いまして」
千恵は首を傾げながらもそう答えた。
「……そうか、ちょうど良い。千恵、少し彼の相手をして貰えるか？」
「はい……？」
千恵はもう一度首を捻りながらも、道着に着替えて奥の部屋へ入る。
「え、那由他に夏也？　……師範、相手ってもしかして」
「若宮君の実力を知りたい。夏也では不安だからな、私が相手をしてやろうと思っていた所なのだが、自分で相手をしながらでは、どうしても主観が混じってしまう。ちょうど良い所に来てくれた」

……那由他への気持ちを冷ます為に来たはずなのに。
だが、師範には逆らえない。
千恵は畳敷きの部屋の真ん中で、那由他と向き合った。
「千恵は空手に柔道、合気道に剣道、弓道と一通りの心得がある。実力もお墨付きだ。若宮君、ひとまず型など気にせず自己流で構わん。一度千恵と組んでみろ」
言われた那由他は少し困った顔になる。
それはそうだろう。
彼にとって千恵は守るべき契約者で。
彼は、モノノケで。
千恵がどんなに強くても、どんなに頑張ろうとも勝てる相手じゃない。
そんな事は、分かっているけれど。
「――よろしくお願いします」
軽く頭を下げた後で、那由他に足払いをかけ、そのまま彼の身体を投げ飛ばした。
不意を突かれ、割合簡単に投げ飛ばされた彼はしかし、床に転がりながら反射的に受け身を取って衝撃を受け流し、即座に立ち上がった。
そこへ、間髪入れずに突きや蹴りを繰り出すと、那由他は戸惑いながらもそれを全て完璧に受け止め、受け流す。
なかなか間合いが詰められず、懐に入れない。体勢を崩す為の攻撃は全て流される。
勝てる相手じゃない、なんて事は、良く分かっているはずなのに。
乱れた心が、ムカムカしてくる。
先程から殆ど動いていない那由他に対し、次から次へと攻撃を繰り出す千恵の息は上がり始めている。
不意に、外で雷鳴が響いた。……さっきまで、晴れていたはずなのに。夏でもないのに夕立だろうか？
その音に僅かに気を逸らした隙を逃さず、千恵は那由他の胸倉を

掴んで押し倒し、床に伏せる。
ざあざあと、音を立てて降りだす雨。
ぽたりと、那由他の頬に滴が、一つ、落ちて。
那由他はここで向かい合ってから初めて真っ直ぐ千恵の目を見た。
戸惑いに揺れていた瞳が、その一点を見定め。
那由他の手が、千恵の道着の襟を握り、そして引いた。
力任せに体勢の上下を入れ替え、千恵の拘束から逃れた彼は再び立ち上がる。
転がされた千恵も、反射で立ち上がり、二人は先程と立ち位置を逆に変え、再び向き合った。
那由他が、動く。
中段の回し蹴りを腕で防いで受け流した千恵は、その勢いを利用して那由他の懐に入り、那由他の襟を取ろうとするも、即座に体勢を整え直した那由他に逆に襟を取られ、そのまま背負い投げられた。
パシン、と背が畳に叩きつけられる。もちろん、身体が即座に受け身を取っているからそう痛くはないが。
「――そこまで」
と、ここで師範が終了を告げた。
転がった千恵が、自分に差し出された那由他の手を取った時には、いつの間にか心は凪いでいて。
「……とまあ、こういう訳だ」
師範は、そう言って那由他の肩を叩いた。
「もう、分かっただろう。自分の事も、今必要な事も」
そして、師範は千恵を見た。
「千恵、この若宮君とやら。今時の若者には珍しい良い男じゃないか」
それは……そうだろう。
（だって、今時の若者じゃないし）
千恵は心の中だけで呟く。
「久々に、仕込み甲斐のありそうな見込みのある奴だ。今度から

は一緒に来ると良い。一人で黙々打ち込むより、誰かと組む方が楽しいだろう、千恵」

「師範……」

「ほら、今日はもう帰れ。ああ、夏也。お前は残れ。たまには爺孝行でもしてけ」

夏也の襟首を掴み、師範は裏口を開ける。そこには、二階にある自宅へ上がる階段があるのだ。

「貰い物の素麺が大量に余っててな。食べていけ」

「は？　この時期にソーメンて」

夏也の抗議をまるっと無視して、師範は、

「良いから、来い」

と、ズルズル引きずって行き、パタン、と扉は閉じられて。

「……取り敢えず、着替えて帰ろっか」

「ああ」

短いやり取りをかわし、千恵は更衣室で手早く着替えを済ませる。

「……済んだのか？」

更衣室を出ると、とっくに着替えを済ませた那由他がカバンを持って立っていた。

「うん、帰ろう」

「ああ」

やっぱり短いやり取りの後、何を喋るでもなく、街を歩く。

那由他は、じっと何かを考え込んでいる様だったから。

でも、その静けさに気まずさはない。

ただ、何かが少し、変わった気がした。

風花は、ケータイを開いた。千恵とお揃いにした、お気に入りのアイドルグループの最新曲の着メロ。

新着メールが、一件。

Ｔｉｍｅ　１１／３　１８：３９
Ｆｒｏｍ　京
Ｓｕｂ　明日、ヒマ？

▼今日、バンドメンバーから隣町にある
美味しいって噂のパスタ店の割引券を貰ったんだ（＊＾＾）ｖ
良ければ一緒に行かない？
あ、もちろん皆には内緒で（＾―＾）ー☆

「……千恵。夏也には悪いけど、私はホントに若宮君との仲、応援したいと思ってるんだよ。千恵にはいつも笑ってて欲しいし。……私も、幸せになりたいから」
呟きながら、風花は返信メールの送信ボタンを押した。

▼了解～♪
店の前で待ち合わせしよっ☆
時間はどうする？

すぐに返信が返って来る。

▼１１時半でどう？

▼いいよ、１１時半ね（・・）φメモメモ♪
明日、楽しみにしてるネ☆

風花はもう一度、返信メールの送信ボタンを押し、送信完了の画面が出るのを確認してからケータイを閉じた。
「私、昨日久々に見たんだよ、千恵がちゃんと笑ってるの。……あれからそこそこ経つのに……。千恵の笑う顔が見たくて、夏也を

応援してきたけど。……夏也じゃ、ダメなんだね。……ねえ、私、千恵と一緒にダブルデートとかするの、結構楽しみにしてるんだから。絶対、若宮君をモノにしなきゃダメだからね、千恵……」

第拾参話　the lull before the storm

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……

耳障りな鐘の音に、彼は暗い船倉の中で目を開けた。

積荷に混じって密航を続けてきた彼は、荷物の影に横たえていた身体をむくりと起こして立ち上がり、甲板へと続くはしごに手をかけた。

するすると上り、冬の太陽がつくる眩しい陽だまりの中へ頭を出した。

「ちっ、ここにも“先客”がいるのか。折角連中の居ない場所を求めてきたってのに、着いて早々に頭の痛くなる嫌な音を聞かされるとはね」

船は、接岸するため岸へとゆっくりゆっくり近付いていく。

港には、船へかけるタラップの準備をする船員が慌ただしく働く姿があるが、船と岸との間にはまだ距離がある。

見下ろせば、紺色の濃い青い水面がゆらゆら揺らめいている。

強い、潮の香り。

吹き付ける潮風に舞いながらうるさく鳴き交わすカモメ。

てくてくと、京は甲板を歩き、船の舳先に立つ。

「おい、君――」

それを見咎めた船員が声を掛けようとするのを振り切り、京は船から跳び降りた。

「……もう、脂ぎって不味いばかりの脳みそ筋肉族野郎の血なんざ沢山だ。久々に乙女の生き血にありつきたいね」

てくてくと、人気のある方へと歩いて行こうとして――ふと、山の方へ目を向けた。

「――何だ？」

ざわりと、肌が粟立った。

「……魔物の、気配？」

京は、ニヤリと凶悪な笑みを浮かべた。
「丁度良い。脂っこい食事が続いた上、狭い船倉の中で体も鈍りっ放しだしな。食事の前に軽く暴れてくるか」
町の方へ向いていた足を、山へと向け直し、京は再びてくてくと歩き出した。

「チエ様！　そっちの藪の方へ行ったぞ！」
初冬。落葉樹の葉はあらかた地面へ落ちて、裸の気が目立つようになった山の中、迅の巨体が急な斜面をものともせず獲物を追って駆ける。
「了解！」
人一人の体重くらいは軽く支えられる丈夫な木の枝の上、チエはお手製の弓をキリキリと引き絞り、狙いを定め――パッと矢尻を放し、番えた矢を放つ。
矢は一直線に獲物である鹿の腿へ命中し、鹿は枯れ葉の上、ずさささっ、と音を立てて足を滑らせ転倒する。
「お見事！」
すかさず迅がそれを前足で押さえつけ、首根っこに食いついて牙を剥き、とどめをさす。
「ええ、これだけ大きな鹿なら当分お肉には困らないで済みます。証分けの儀式の日も近いですし……しっかり食べて、栄養を摂っておかなければ！」
するすると木から降り、尾を振る迅の隣でチエは張り切って獲物に縄をかける。
「この時期の鹿は脂も乗ってて旨いからなぁ」
気の早い事に、迅はもう舌舐めずりをしている。
「だからってつまみ喰いしたらダメですからね、――っ、て、痛っ、」
ほんの少しよそ見をして疎かになった手元が狂い、手にしていた

小刀で左手の甲を刺してしまったらしい。
幸い、傷はそう深くない。小刀を抜くと、刃に付着した血がぱたぱたと地面に落ち、枯葉を赤く染めた。
「あちゃー、やっちゃた……」
とはいえ、この程度の怪我などチエにとっては日常茶飯事。
「あーあー、気をつけて下さいよ？」
迅も半眼で呆れる。
「まあ、この位の傷なら、那由他様にいただいた“印”のお陰ですぐ治るから……、今はまずこの獲物を小屋へ持って帰ることに専念しましょう」
ここへ来たばかりの時分に比べれば、背も伸び、身体の線も女性らしい丸みを帯びたものになりつつあれど、鹿の体躯はチエの軽く倍以上ある。
四足にかけた縄を束ねて肩に担ぎ、引っ張る――
「……いくらなんでもそれは無理だろう」
呆れたようにため息をつく那由他の声が、不意に沢の下から聞こえてきた。
「那由他様！」
一跳びでチエの隣へ並び、チエから縄を取り上げると、重たい鹿の肢体を軽々と小脇へ抱える。
「また怪我をしただろう、血の匂いを感じた」
見せてみろ、と、空いているほうの手でチエの手に触れ、口元へと運び、既に閉じかけている傷口を舌でなぞる。
「なっ、那由他様……！」
カッと、チエの顔が真っ赤に染まる。
那由他はそれをさも楽しそうに眺め、
「嫌なら、怪我などするな。お転婆も程々にしておけと、いつも言っているのにお前が聞かないから、お仕置きだ」
悪戯っぽく言う。
ここへ来た頃には考えられなかった程に、最近の那由他のチエに

対する態度は柔らかく砕けたものに変わった。
そうなればなる程、チエの心は秘めた想いが今にも決壊を起こしそうで、苦しくなる。
「あー、主ぃ、チエ様ぁ。ひと前でそーいうのは程々にして貰えませんかねぇ？」
うげーっ、と空気を読むことも遠慮も無しに、迅が今にも砂を吐きそうな顔で茶々を入れる。
「俺、腹減ってるんすよ。もう昼時でしょ？　さっさと戻って、メシ喰わせて下さいよー」
「うん、確かにそれは同感だな。……私も腹が減った。急いで戻るとしよう」
言うが早いか、チエの身体をやっぱり軽々と肩に担ぎ、山の斜面を人には不可能な速度で走り出す那由他の後ろに迅が付き従って駆ける。

――そして誰もいなくなった山の中。
「……血の、匂いがする」
クンクンと辺りを嗅ぎ回りながら斜面を登ってくる人影が、一つ。
彼は地面を染める赤を指で拭い、その指ごと口に含み――ピクリと身体を震わせた。全身の毛が総毛立つ。
そして、恍惚と歓喜の笑みを浮かべた。
「これは……凄い……。こんな、滴り落ちて時間の経った血ですらこの味……！　ふふっ、ようやく見つけた……僕のイヴ……」
スッと目を眇め、京は辺りの気配を探った。
「まだ固まってなかったって事は、そう時間は経ってない……まだ近くにいるはずだよね」
だが、すぐに面白くなさそうな顔になる。
「おかしいね、匂いはすれども近くに人の気配がない……？　それに……何だ、この魔物の気配の異常な多さは。この山、魔物の巣窟じゃないか」

麓の町を見下ろしながら、京は怪訝な顔をする。
「あの教会の主はこれに気付いてないのか、まさか……」
これだけ魔物が集まれば、町では相応の被害が当然出ているはずだろうに。
しかし、気配が探れないのでは仕方がない。京は血に残る匂いを頼りに、辺りを探るため、しらみ潰しに周囲を歩き回ってみる事にする。
普段、面倒臭い事や肉体労働的な行動を嫌う彼にとっては破格の決断だ。
「……まあ、事は百年かけてようやく見つけた大事な大事なイヴの為だからね。多少の労力の浪費も事前投資の内……」
独り言を呟きながら、自然と口元が緩み、にやけてくるのを抑えきれない。
「ああ、ホント。長い船旅の間の退屈と粗食に耐えてまでこの国に来た甲斐があた」
堪えきれず、肩が震える。
「あ、あはは、はははは」
高笑いが虚しく空に消えていくのも構わず、京は狂ったように笑い続ける。

「はは、ははははっ」
――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……
最後の返信メールを見ながら、その耳障りな鐘の音を掻き消すように、京は声を上げて笑った。
「全く、多少どころかこの僕がこれだけ多大な労力を費やす事になるなんてね……もう、後にも先にもきっとコレっきりだろうな」
蓋の転がった真っ黒い棺を足で蹴り飛ばす。
「寝てるんだからって、油断してたよ。折角無抵抗に寝ててくれてたんだ、早々にとどめをさしておくべきだったんだよね……全く、僕とした事が。とんだ失策だ」

はあ、と息を吐きだし。整然と並ぶ埃だらけの椅子の一つに腰掛けて足を投げ出し、背もたれに両腕を広げて預け、高い天井を見上げる。

ずっと、頭の上の方から重たい音が降ってくる。

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……

「――あの日も、こうして鐘の音が響いてたな」

――足元に、巨大な魔方陣が展開されて。

途方もない力の奔流に、京の血が己の意思に反して竦み上がった。本能、という名のそれが、相手との力の差を勝手にはかり、全身の筋肉を萎縮させる。

――動けない。ギリっと牙を噛み締め、低く唸った。

あちらも、もう息は絶えだえ……今にも膝をつきそうなのを気力のみで踏ん張り、術の詠唱を続けているような状態だ。

あと一歩、あと何か一つあれば、この状況をひっくり返せる。

その、確信があった。

そしてあと一つの“何か”のアテもある。

がくりと、その場に崩折れ、地に膝をつきながら、それを待った。

（……クソッ、何処で何してやがる、あのエクソシストめ！）

遠く、山の麓で教会の鐘の音が響く。――夜中の１２時。

麓の村はもう寝静まっている頃だろう。

――分かっていた。独力のみで、はるか悠久の時を過ごしてきたこの山の主に適うはずなどない事は。

それでも、どうしても手に入れたかった。その、稀なる血を――。

それを手に入れる為には、那由他の守護を打ち破り、そこから奪い去らねばならなかったから。

真っ向勝負で適わない分、知恵をこらし、謀略を巡らせ――そして今、こうしてギリギリのところまで追い詰めたというのに。

あと、一歩――、なのに……肝心のシメが締まらない。

目が、霞んできて……。

そうして、あの時京は那由他の術によって封じられたのだ。
当の術者本人――那由他もその後すぐに神父によって封じられたため、術は完成せず、一時的なものとなり、数十年の後に京は封じから解かれ、自由の身になった。
――しかし、その時にはもう彼女はこの世になく。
「ようやく、見つけたんだ。彼女の魂を持った娘……彼女の生まれ変わりを――」
あれから、さらに数十年の時をかけて。
なのに、彼女はまたしても那由他の庇護の内にある。
またしても、彼女の魅惑的な血は那由他のもの――。
愉快すぎて、笑いたくなる。
「でも……」
ククッ、と小さく笑い、京は椅子に身を投げ出したまま目を閉じる。
ひゅぅ、と鐘楼に風が吹き込み、鐘を揺らす。
ガラァン、と一つ、鐘が鳴り。
「イヴ……君と永久の夜を生きるのは――那由他、お前じゃない。この僕だ」
それだけ呟き、静かに眠りへと落ちていった。

第拾肆話　ｋｉｎｄｓ　ｏｆ　ｃｏｎｔｒａｃｔ

ふつふつと音を立てて電気ポットから勢い良く蒸気が吹き上がる。
茶葉を入れた急須に熱湯を注ぎ、とぽとぽと大きなマグカップへ交互に淹れる。
夕食の片付けも済み、静まり返った食卓に那由他と二人、向かい合わせに座りながら熱い緑茶を一口啜り。
テレビのスイッチは切られたまま。
他に誰もいないダイニングキッチンに響くのは、壁にかかった時計の秒針の音と、こうしてお茶を啜る音、カップをテーブルに置いたときのコトリとたつ小さな音、それに互いの息遣いの位のものだ。
二つのカップが空になるまでの間、その静けさは続いた。
それは決して居心地の悪いものではなかったが、飲み物が空になってしまえば流石に少し手持ち無沙汰な感が否めなくなる。
千恵はもう一度、急須にお湯を注ぎ、マグカップに少し色の薄くなったお茶を注ぎ、また一口、それを啜る。
――と。那由他の隣の席の空気が一瞬揺らいだかと思えば不意にバサリと翼をたたむ音がして。
「那由他様、千恵様。……少し、お時間よろしいでしょうか？」
「……？　ああ、構わないが……何だ？」
「実は……今朝、お伝えしそびれたことが一つ、ございまして」
天羽は、今朝と同じように那由他の隣の席に現れ、恭しく頭を下げると、妙に重々しく告げた。
「――那由他様の失われた記憶を戻す、もう一つの方法について」
「それは……迅が持つはずだという勾玉無しにかなう方法、という事か？」
「はい。今すぐにでも、全ての記憶と全てのお力を完全に取り戻せるはずにございます」
しかし、それを聞いた那由他は僅かながらに眉をひそめた。

「……天羽よ。なぜ、それを今朝言わなかった？　必要条件が揃わず、迅の行方も知れぬ今、勾玉を使っての方法がかなわぬことは当然分かっていたはずだ。なのに何故、まず先にそれを言わなかった？」

「千恵様と血の契約、もしくは魂の契約を結ぶ事。……それが、その方法ゆえ」

「血の契約に……魂の契約……？」

「千恵様、我らモノノケと結ぶ契約には三つの段階があるのでございます。一つは、言霊の契約。今、千恵様が那由他様と結んでおられる契約がそれです」

「……ああ。そして私はそれ以上の契約を千恵にも、他の誰にも望むつもりはない」

一瞬、黙り込んで難しい顔で考え込む素振りを見せたが、しかし、那由他はきっぱりと断言した。

「迅を、待つ」

「ねえ、那由他。血の契約って、何？　ちゃんと説明して。それをすれば、記憶がもどるんでしょう？」

その目をじっと見つめ、重ねて問うと、那由他は渋い顔をするも、「だとしても、だ。私は千恵、お前にそれを望むつもりはないんだ」もう一度、強く言い切った。

「どうして？」

それに対して千恵が食い下がると、那由他の渋面が濃くなった。

「お前は、知らなくていい……いや、知らないほうがいい。千恵、お前もつい先頃見たばかりだろう、モノノケと安易な契約を結んだ“結果”を」

窓の外、小さく鐘の音が聞こえてきた。

――もう、12時。

「私は……私もモノノケだからな」

茶を啜り、この話はもう終わりだと言わんばかりの空気を漂わせる。

明日は土曜日で学校は休み――とはいえ、そろそろ寝支度をするべき時刻ではある。

「……ねえ、那由他。明日、ちょっと行きたい所があるんだけど、付き合ってくれない？」

「……？　ああ、それは構わないが」

そして翌日。千恵に連れて行かれたそこは、無機質な銀色の扉が並ぶ、ロッカールームの様な場所だった。

――「遺体安置室」。扉のプレートにはそう書かれている。

縦に3つ、横に6つ並ぶ扉の中のひとつが開けられ、引き出し式に寝台が出てくる。

その台に横たえられているのは、まだ幼い少年――あの仏壇に置かれた写真と同じ顔をした子供の、遺体……。

「本当はね、こんな風に一般の――遺族なんかが簡単に入れさせてもらえる場所じゃないんだけど……そこは、コネの賜物ってヤツ？」

引き出しにはそれぞれ厳重に施錠がされてあり、その鍵を開け遺体を引き出したのは――この若宮警察署の刑事部長様だ。

「すみません、我が儘言って。でも、そろそろちゃんと向き合わないといけない時期なんだって思うから。認めて、納得しないと……前に、進めない気がして」

夏也の父でもある彼は、遺体を前に手を合わせた後で、気遣わしげな視線を千恵へと向けた。

「いや、……あの件は未だに有益な情報も無く捜査は行き詰まったままだ。柚鷹や梨花（りか）さんのやり切れない気持ちも分かる。今の私にしてやれるのは、この程度だが……」

ちらりと、那由他の方へと視線を向け、

「――君が、若宮那由他君、か。先日は夜勤で挨拶をし損ねたね。君の事は聞いているよ、息子はもちろん妻や父、……それに駅前交

番の呑んだくれからも、ね」
少し疲れた様子で言った。
そういえば、彼からほんの僅か……人の嗅覚ではまず知覚不能だろうし、那由他の嗅覚をもってしても言われなければ気付けなかったかもしれない程に僅かながら、酒精の匂いがする。
「あ……、おじさん、もしかして――」
酒の匂いはともかく、千恵も彼の口調から察したらしい。
「……もう、二度とあの界隈には近寄りませんよ」
一つ、大きくため息をついてから、
「では。私は少し外しますから。帰るときには、一声かけてください」
彼は部屋に千恵と那由他を残し、静かに出て行った。
庫内から流れてくる冷気に冷やされた空気が白く煙る中に横たえられた少年の、顔形こそ、あの写真と同じである……が、白く凍ったその表情は、あの満面の笑みを浮かべ、はつらつとしていた少年とは似ても似つかない。
「一昨日の、今頃……だったかな。小学生だった秋刀が、学校から帰る途中で、行方不明になったの。途中までは、通学路を友達と一緒に帰って来て……その後――友だちと別れて一人になった後で……」
冷たいばかりの頬に触れ、千恵は痛みをこらえるように目を伏せる。
「……まだ、犯人は捕まってない。だから、何があったのか、本当のところは分からない」
ちらりと、千恵は時計に目をやった。――12時。教会の鐘が鳴る。千恵はその音にびくりと体を強ばらせた。
「サブちゃんやお母さん、私はもちろん夏也や風花たちにも頼んで探してもらって……。秋刀を最初に見つけたのは、私だったの。秋刀が行方不明になった次の日の昼……そう、ちょうど今みたいにあの教会の鐘が鳴ってて」

知恵は、鐘の音がする方の壁を振り返る。
「あの時の、あの港……那由他と最初に会ったあの場所で……。あの時はまだ、辛うじて息はあったんだ。……でも」
一つ、大きく息を吸って、吐いて。千恵は言葉を継いだ。
「脳に、損傷があるって……運ばれた先の病院で言われて……。そんなね、怪我とかはなかったのに……極度の貧血状態ですって……それで、脳に行くはずの血も足りなくて、脳の機能を維持するのに必要な酸素やら栄養やらも足らなくて……って」
もう一度、大きく吸って、吐いて。そろそろとこちらへ向き直る。
「この街の病院じゃあどうにもならなくて。お父さんが赴任中だった街にあった大病院に紹介状書いてもらって、去年の梅雨頃までずっと入院してたの。……でも、その間もずっと意識を失ったまま……一度も目を覚まさないまま秋刀は――」
そこまで一息に喋り、息を詰まらせた。
「あの日――秋刀が行方不明になった日は……あの頃は私もまだ中学生で、学校が早く終わる日だったから、例の道場で、始めたばかりの剣のお稽古を見てあげる約束をしてたの。もしもあの日、私がもっと早く帰ってれば……秋刀が一人になる前に、一緒に帰ってあげられてたら……こんなことにはならなかったかも、しれなくて……」
堪えきれなかった涙の雫が一滴、寝台を濡らした。
「もっと、早く見つけてあげられてたら……って、あの日を後悔し始めたらキリがなくなる。あの時ああしてたら、こうしてたら……。そんな後悔は他にも沢山あるよ。でも、あの日の後悔は……もう二度と取り戻せないものだから……」
ごしごしと、乱暴に目元を袖で拭い、千恵は鼻を鳴らした。
「こんな辛い気持ち、もう二度と味わいたくなんかない。だからね、私はあれから一つ決めてることがあるの。今、出来る事をやらないままに何か取り返しのつかない失敗をして後悔するような事だ

けは、絶対にしないって」
弟の前髪を丁寧に梳いて整え、千恵は静かに遺体を庫内へ戻す。
「それと、もう一つ。前にも言ったけど。あれからずっと気落ちしっぱなしのお母さんをこれ以上悲しませるようなことはしないって、決めてるの」
千恵は那由他を見上げ、真っ直ぐその瞳を捉えて言った。
「だから、安易な気持ちで言ってるんじゃない。那由他、教えて。血の契約って、魂の契約って、何？」

第拾伍話　ａ　ｓｗｅｅｔ　ｔｒａｐ

休日は、いつも9時過ぎまで寝ているのが当たり前――そんな彼女が、今日は張り切って6時に起きて朝シャンから洋服選び、髪のセットに化粧と、身支度にたっぷり4時間をかけ、完成させた最高のファッション・スタイル。

パンツスタイルに七分袖のシャツにジャケットでスタイリッシュに決め、大ぶりの首飾りで胸元を飾り、軽くウェーブをかけた髪の毛先をくるくると遊ばせて。足元は、今年になって初めて履くブーツで決めた。

ケータイで、何度も時間を確認しつつ、ナビに従い街を歩く。

遅刻なんて以ての外だけど、だからってあんまり早く行きすぎて店の前に突っ立ったまま待ちぼうけ、なんてのもカッコ悪い。

（こういうのは、五分前くらいに着くのがセオリーなんだよね）

ナビの指示に従い、横断歩道の前で歩行者用信号が青になるのを待つ。

少し右斜め上を見ると、ウェブサイトで確認したのと同じ店名のロゴが掲げられた看板が見える。目的地は、もうすぐそこだ。

風花はナビを終了し、もう一度時間を確認してからケータイをカバンにしまう。

（んー、11時23分、か。まあまあってトコ……かな？）

車道の信号が黄色に変わり、そして赤になる。ここは片側2車線、全部で4車線ある大通りで、信号の下部にある右折用信号が点灯する。

もう一度、黄から赤へ変わり、ようやく歩行者用信号が青になる。

待ちわびた人々が一斉に車道へと溢れていく中で人ごみを縫うようにして横断歩道を渡る最中、風花は向こうの歩道を今まさに店の前へ歩いていく目立つ白い人影を見つけた。

「京！」

風花は大きく手を振り、彼に駆け寄った。
「やあ柊木さん、おはよう」
振り返り、相変わらず思わず痺れてしまいそうな笑顔を振り撒きながら彼は足を止めた。
「今来たとこ……だよね。良かった、危うく初デートの待ち合わせで女の子待たせるところだった」
制服でも、ステージ衣装でもない完全な私服姿を見るのはこれが初めてだ。
白いズボン、白いシャツ、白い上着。
ステージに立つ時、彼はいつも赤や黒、白い色の服を好んで着ているが、昼日中にこれだけ真っ白い格好に身を包んでいると、やはり目を惹かれる。
特に彼の場合、肌も白く、髪や瞳の色も白銀色だから、本当に全身白い。
元々破格に見目の良い彼が、そんな格好で極上の笑みを浮かべているのだ。
通り過ぎる女性――いや男性すらも皆一様に彼を振り返っては魂を抜かれたような表情を浮かべて行く。
ちなみに、その笑顔をモロに向けられた風花はといえば、つい開けたまま閉じるのを忘れた口からうっかり魂を飛ばしそうになっていた。
「昨日の今日でいきなり誘ったのに、来てくれて嬉しいよ。ありがとう。さあ、外は寒いし、中に入ろう」
さりげなく風花の手を取り、ドアベルの音を響かせながら店のドアを開けた京は、
「すみません、11時半に予約していた百世なんですけど」
と、応対に出てきた店員に告げる。
「あ、はい！　お待ちしておりました。ただいまご案内いたします」
爽やかなお兄さん、といった風の男性店員は、店内奥の窓際四人

がけのソファー席を指し、
「お席はこちらでよろしかったでしょうか？」
京は、ちらりと窓の外――空を気にする。
「はい。……すいません、ブラインドをもう少し下げて貰えませんか？」
席はちょうど日が直に射し込み、日溜まりが出来ていた。ちょっと見ただけでは暖かそうだが、実際に当たると陽射しが少し痛いくらいに暑い。
「かしこまりました。では、こちらメニューになります。」
言いながら頭を下げ、店員がテーブルから離れる。カウンターの奥から金属製の細い棒を持ち出し、ブラインドの下に下がる小さな取っ手にそれを引っ掛け引っ張る。
するするとブラインドが落ち、直射日光が遮られると暑さも和らいだ。
店員はもう一度奥へ引っ込み、今度はプレートに水の入ったコップを乗せてやって来た。
「こちら、お冷とおしぼりでございます」
薄いビニールの袋に入れられたタオル地のおしぼりと、レモンの浮かんだ水とを置き、
「では、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」
再びカウンターへと戻っていく。
テーブルの上、メニューをこちらに向けて広げてくれながら、京も向こう側から美味しそうな料理の写真の並ぶ冊子に目を落とす。
「定番なら、ボロネーゼ、アラビアータ、ペペロンチーノと……カルボナーラ？」
「京は、何が好きなの？」
「僕は……トマトソース系のが好きかな。柊さんは？」
「うーん、割と何でも好きなんだよね。パスタ自体、好物だから。あ、でも唐辛子のきついのはちょっと苦手かも」
「柊木さん、辛いのダメな人？」

「うーん、辛いの全般ダメって訳じゃないんだ。お刺身には普通にワサビ使うし、おでんにはカラシつけるし、生姜なんかも別に平気なんだけど。唐辛子系の辛さが苦手なんだよね。程よくピリ辛程度で済めばいいんだけど、キムチとか、“本場韓国製”とか書いてあるとつい躊躇しちゃう」

「これからの時期って、どこの店も辛いメニュー置きたがるよね。それこそ唐辛子たっぷり系の真っ赤なの」

クスリと、わざとらしく意地の悪い笑みを浮かべて見せながら、メニューの上の方、お勧めメニューとくくられた枠内に大きく載った写真を指さした。

「ハバネロアラビアータ？」

まさに真っ赤なソースが絡むパスタに、これでもかと唐辛子を刻んだらしいものが入っている。

「……うわ、見てるだけで口の中が辛くなってきそう」

「ははっ、だね。僕はこっちの秋茄子のトマトクリームにしようかな」

「ああ、今の時期のナスって美味しいもんね」

相槌を打ちながら、風花はメニューに載る写真を真剣に見下ろす。

（トマトソースとかミートソースとかだとうっかりソースで口周り汚しちゃったりしたら格好つかないよね……。貝ついたまんまのボンゴレとか、綺麗に食べれる自信ないし。やっぱりここは無難に……）

「じゃあ私はキノコと鮭のクリームソースにする」

「デザートとか、どうする？　ここ、スイーツも評判らしいから」

開いたメニューを折りたたみ、背表紙部分を表に向けると、確かに見るからに美味しそうなケーキやらパフェやらの写真が並んでいる。

「うーん、どうしよう……。千恵ならきっと迷わずこの大きなイチゴのパフェを頼むんだろうけど……」

「僕、これ気になってるんだ、このデザートピザってやつ。ピザ

の上にアイスが乗ってるってどうなんだろうね？」
写真では大きさが今ひとつ分かりづらいが、ピザ生地の上にアイスとバナナ、生クリームが乗っていて、上からナッツとチョコレートソースがかかっている。
「一人で食べるには多分多過ぎる気がするんだよね。良ければ一緒に食べない？」
テーブルに肘をつき、頬杖をついた京が上目遣いにこちらを見上げてにこっと笑う。
背丈は、風花と比べれば頭半分くらい高いが、同い年の男の子達に比べるとやや低め。顔も童顔気味でかっこいい、より可愛いという方が正しい。
――まあ、この年頃の男子が女の子から可愛いと褒められても嬉しくはないだろうから言わないが、その破壊力ははかり知れない。
果たして、この笑顔を前にＮＯを突きつけられる女の子など存在するのだろうか？
風花はといえば……もちろん、一もにもなく即座にこくこくと無言のまま何度も頷いた。
「ん。じゃあ決まり。――すいません、」
カウンターの前に立つ店員に京が声をかける。
「きのこと鮭のクリームソーススパゲッティと秋茄子のトマトクリームスパゲッティ、食後にこのデザートピザのチョコバナナピザを」
「――お飲み物は？」
店員の問いに、風花はデザート欄の下に書かれた文字の一覧に目を滑らせる。
ありきたりなソフトドリンクの記載はなく、コーヒーと、よく分からない名前の飲み物が並ぶ。
「紅茶でいい？」
京に尋ねられ、風花は頷くが、見る限り「紅茶」とか「アイスティー」等の文字はメニュー表には見当たらない。

「じゃあ、食後にアッサムティーをホットで」
オーダーを済ませ、メニューを店員に返す。
「アッサムティー……」
店員が去っていく背を見送りながら風花が小さく呟く。
「あれ、もしかしてアッサムは苦手だった？」
「え、ううん。えっと……アッサムティーって？」
「うん？　紅茶の名前……正確に言えば茶葉の名前だけど……」
言いながら、風花がよく分かっていないのを察したらしい。
「紅茶ってさ、一口に言うけど実は世の中には色んな種類の葉っぱがあってね。リーフが違うと、味も香りも全然ちがうんだよ」
と、説明を始めた。
「アールグレイとか、セイロンとか、ダージリンとか、聞いたことない？　全部、紅茶の葉っぱの名前なんだ」
「へえ、京ってそういうの詳しいんだね」
風花が感心して言う。
「――そうだね。人間が作り出した飲み物の中ではワインの次に魅惑的な飲み物だと、僕は思ってるよ。ワインと違って淹れ方一つで変幻自在ってのが紅茶の面白さだよね」
「へえ、ってか……その言い方だとなんかワイン飲み慣れてますーって聞こえるよ？」
京は、人差し指を立てて唇に当て、ニヤリと笑った。
「うん、飲み慣れてるからね」
「わぁ、不良だ……。って、私もお酒を飲んだことの一度や二度はあるけどさ、ワインて……スーパーで売ってるような安いやつでも結構するよね？」
「まあね。でも僕は酒が呑みたくてワインを嗜んでるわけじゃないから」
「え、じゃあどうして――」
「秘密。今はまだ言えないな」
水の入ったコップに口をつけ、喉を潤しながら京は意味深に笑う。

「ああ、それより。ご飯食べた後だけどさ、……柊木さん、こういうの観る？」

上着のポケットを探り、丁寧に二つ折りにされた紙を出し、テーブルの上に置いた。

「映画のチケット？　あ、これ今話題のドラマを映画化したやつだよね。わー、これ観に行きたいって思ってたんだ」

「なら、この後行こうよ。１時半開演で、開場はその１０分前だから……時間的にはちょうどいいと思うんだ」

店員が、注文した料理を運んできたのに気づき、京は再びチケットをポケットへ入れ、反対側のポケットからケータイを取り出す。

テーブルに置かれた料理の写メを取り、手早く打ち込んだメールに添付して送信する。

「あ、もしかしてブログの更新？」

「そう。ああ、見てくれてるんだ？」

「ふふ、もう常連だよー。ライブハウスの方もね。ハロウィンパーティーも楽しみにしてたんだけど……、夏也に花持たせてあげようと思って行かなかったのに。あのカイショーなしの朴念仁てば見事に大コケしてくれちゃって」

「ああ、橘君の方は愛羽さんに気があるんだね」

「そう。もうずいぶん前から、ね。でもあいつ馬鹿だから」

風花は頭痛をこらえるようにこめかみに手を当てる。

「いっつも的外れなことばっかりやって。千恵は全く気づいてないし、当然その気もまるでないし」

小さくため息をつく。

「夏也の方はもう、どうでもいいんだけどね。……でも、千恵の辛そうな顔はもう、見たくないの」

くるくると、スパゲッティーをフォークに巻き取りながら目を伏せる。

「あの日……私が――してなかったら、もしかして……」

ごくごく小さく呟いて、風花はふるふると首を左右に振り、気を

取り直して目の前の京に視線を戻す。
京は綺麗に巻いたスパゲッティを口へ運ぶ。例えば夏也のような粗野さは微塵も感じられない、綺麗な所作だ。
うっかり気を抜いたら、彼に見とれたまま自分の分を食べ進めることすら忘れてしまいそう。
「……食べる？」
それを分かっているのかいないのか、京は可愛く微笑み、半月切りのナスを刺したフォークを差し出してきた。
（えっ、ええっ！　そ、それっ、か……間接キスっ！？）
さすがに軽く混乱をきたす心の中で叫ぶ。
だが。「はい、あーん」とニコニコしながら言われては、逆らえない。
ドキドキしながらナスを頬張り、味も良く分からないままに噛みしめ、飲み込んだ。
京はといえばそれをにやにや笑って見ている。
「美味しい？」
……分かってる。絶対分かってやってる。風花は確信した。
「……ずるいー！」
京はクスクスと肩を震わせて笑う。
「ごめん、つい楽しくて。お詫びにここは僕がおごるから」
まだ小刻みに震える肩を竦めてみせ、片目を閉じる。わざとらしい仕草だが、京がやるとそれがまた妙に様になるのだ。
……悔しいけど。
「しょーがないなぁ」
という気にさせられてしまう。
昨日、突然屋上に呼び出されて「付き合って欲しい」と言われた時には何の冗談かと思ったし、今でも正直、そのうちそこら辺からドッキリの看板が現れたりするんじゃないかとドキドキしている。
あの京とこうしてご飯を食べて映画に行けるなんて。京が

……彼氏、だなんて。

幸せ過ぎて心が、痛い。

（今頃……千恵と若宮くんは……何、してるのかな……）

ふと、ブラインド越しに窓の向こうの景色に目をやる。小さく、小さく。遠くから、教会の鐘の音が聞こえた気が、した。

第拾陸話　ａ　ｓａｃｒｉｆｉｃｅ

「那由他様、お待たせいたしました。念願の牡丹鍋でございます！」

この山で那由他に次ぐ力を持つ狼の九十九神、迅を従えたチエは、天気の良い日であれば弓矢を手に山を駆け回り、獲ってきた新鮮な食材で毎日の食事を作ってくれる。

天気のすぐれない日は繕い物などしながら、他愛もない話を那由他と交わし――。

暮らしぶりへの不満など一つもない、とばかりにとにかく毎日生き生き過ごす彼女が、くつくつと煮える鍋を囲炉裏に据え、得意満面の笑みを浮かべて那由他に取り箸を差し出してきたのは、彼女が初めてここへ来てから、ちょうど１０日目の事だった。

これまで、１０日に一度のその日以外はその日の気分次第で山の中のあちらこちらで好きに過ごすのが当たり前だったというのが嘘のように、この１０日間はその殆どをこの住居で過ごした。

これまで長い事一組しかなかった布団は二組に増え、朝・昼・晩とこうして二人で食事を摂るのも既に当たり前の習慣になりつつあったが、今日はもう一名食卓を囲むものが居た。――あの日、一体何がどうしてそうなったのか……決して語ろうとはしないが、今は湯気を立てる鍋の前でパタパタ尻尾を振りながらきちんと「お座り」している。

「あの猪を仕留められたのは、迅のお陰ですから」

と、ご相伴に預かる事を許された迅は、

「人間の喰うメシなんざ初めて喰いましたが、……結構旨いもんですね」

と、どうやら気に入ったらしく喜んで食べていた。

食事の後片付けをする彼女の背を見ながら茶を啜る那由他に、迅が言う。

「……主」
「ああ、分かっている。――チエ」
片づけものが済んだ頃合いを見計らい、那由他は彼女の名を呼んだ。
「チエ、お前がここへ来て、今日が１０日目だ」
「はい、『お食事』の日でございますよね」
呼ばれた彼女は、やっぱり嬉しそうに寄って来て、にこにこ答えた。
「今、お召し上がりになられますか？」
すぐ傍に立ち、嫌がる様子もなく那由他に伺いを立てる。
「――いや。その前に少し出かける用事がある」
「……主、折角だからチエ様を一緒にお連れになったらどうです？」
のそっと立ち上がった迅が、下から口を挟んだ。
「今日は月に一度の大仕事の日。地霊の主としてのお役目を済ませた後、すぐ傍にチエ様が居れば色々楽でしょう？」
迅の提案に、那由他は渋い顔をし、対してチエは首を傾げた。
「那由他様のお役に立てるのでしたら、私は喜んでお供いたしますよ？」
それでも、当たり前に言うチエを前に、少し逡巡し。
「まあ、確かに迅の言うとおりではあるが。……さて、その後でもお前は果たしてそうと言っていられるかな」
寂しげに言った。
満月の明るい晩。だが、木々の生い茂る山道は暗い。
那由他は、チエに暖かい恰好に着替える様命じ、着替えを済ませて外へ出てきたチエを横抱きに抱え、山の頂にそびえる巨木まで軽々と運び、その一枝まで登るのでさえも軽く一跳びで済ませる。
チエをその枝木に腰かけさせ、自身はその場に堂々と立ち。
瞬間、山がざわざわと妙に賑やかに騒ぎ、ざわめく気配が立ち上る。

下から、迅の遠吠えが聞こえる。
不意に、落ち着かなかった周囲の空気がシン、と張りつめた。
周囲の空気がビリビリと緊張していくのが、肌に直に伝わる。
ふと、見上げると常は美しい黒色の那由他の瞳が爛々と燃え光る赤色へと変わっていた。
柔らかな月の光を浴び、そうして立つ那由他の姿はとても綺麗で。
「今宵は満月。月に一度の証分けの日。――那由他の名に於いて命ずる。風伯よ、我が眷族らに我が力を届けよ」
那由他を取り巻く空気が、陽炎のように揺らめいたかと思えばたちまちに膨らみ旋風となり、那由他を中心に渦を巻く。
突風と言うべき強風に取り巻かれた那由他の髪や着物の裾が遊ばれ、あおられて翻る。
その中で、那由他は懐から小刀を取り出し、左の袖を捲ったかと思えば、いきなり無造作に刃を剥き出しの腕に突き立て、肘から手首までやけに景気良く切り裂いた。
一筋の線から派手に血が噴き出し、旋風に巻かれて那由他を取り巻く空気が一気に血色に染まる。旋風の全部が那由他の血に染まった――次の瞬間、ぶわっと風が爆(は)ぜ、四方八方へと血の赤が霧散していく。血色の霧が、山全体へと降り注ぎ――。
何時にない程、山がざわめいた。まるで、何十万羽ものムクドリが一斉にねぐらの取り合いを始めた様な賑わいだ。
「我が力の恩恵に預かりし我が眷族らよ。那由他の名に於いて命ずる――」
対して、静かな声で那由他が命じる。
「人里へ降りる事、人間を害する事を禁ずる。禁を犯せば相応の制裁が下るものと知れ」
一つ、大きなため息をつきながら目を閉じる。
暗がりに月明かりの中では分かりにくいが、……少し、顔色が良くない気がする。
もう一度開いた瞳は暗がりの中でも赤く灯り、それがこちらへ向

けられた。
枝を不用意に揺らしてチエを振り落とさぬよう、静かにこちらへ歩み寄り、チエの隣によいしょと腰を下ろし、もう一度、大きく息を吐く。
下からは、きゅうきゅうと興奮しているらしい迅が鼻を鳴らす音が聞こえる。
「あのっ……お怪我の手当て……」
チエが困った様に真っ赤に染まった那由他の腕に触れる。
こんな場所へ、手当ての道具など持参している訳がない。せめてもと、着物の袖を破こうと裾を咥えたチエを、那由他がそっと制した。
「私の身体は人のそれとは違う。手当などせずとも、この程度の傷はすぐに治る。――触れてみると良い……ほら、もう傷など無いだろう？」
腕を染める赤は、既に流れ出た分の血で、傷自体はとっくに消えて無い。
それでも、血で赤く染まった腕が痛々しく見えるのか、疲れの滲む吐息を吐き出す那由他を心配げに見上げる。
「……怪我などどうという事もないが、血は私にとって力そのものでな。あまり多くを失うのは良くないのだが、――月に一度のこれは、地霊の主であり土地神である私の義務だからな。欠かす訳にはいかない」
那由他の言葉で、察したらしい。
「血が、ご要りようなのでございますね？」
チエはその煌々と輝く赤い瞳を真っ直ぐ見上げ、躊躇い無く襟の合わせを緩め、首周りの肌を晒す。
「私は、那由他様の巫女でございます。那由他様のお役に立つのが、私のお役目。那由他様が必要だとおっしゃって下さるなら、私はどこへだって共に参ります」
「……そうか。またしても私の取り越し苦労だったようだな」

当たり前に捧げられた言葉に、那由他は苦笑した。
「この儀式は身体に著しい負荷がかかるのでな。この状態であの小屋まで行くのはなかなか骨の折れる仕事だったのだが……どうやら5年ばかりは楽ができそうだ」
晒されたチエの首筋へ口づける。
「新たに選ばれた巫女が、お前で良かった……」

とろとろと、心地よい眠りを離れ、意識が浮上する。
ぽかぽか暖かい陽だまりの中、草原の地面の上でついうたた寝をしてしまったようだ。
（また……何か夢を見てた……）
やはり、内容は覚えていない。
でも流石に千恵も察し始めていた。
（那由他が失くした記憶……）
京に声をかけられたとき。那由他と会ったとき。千恵の心の奥底の感情を動かすそれに繋がる夢。
（――血の、契約……か……）
千恵はそっと胸に手を置き、今し方――眠り込む前に聞かされた話を思い返す。

夏也の父に挨拶をしてから警察署を後にして。
千恵は、コンビニ弁当のビニール袋を片手に歩いていた。
「ちゃんと説明して欲しい」
そう求められた那由他は、それでもまだためらいを残すように、ぽつぽつと話し始める。
モノノケと契約を交わすには、3通りの方法があること。
一つは、言霊の契約。
一つは、血の契約。
一つは、魂の契約。

言霊の契約は、契約の約定を契約者の言霊によって縛る。
血の契約は、それを契約者の心血によって縛る。
魂の契約は、それを契約者の魂によって縛る。
「お前と今の契約を結ぶ際、私は言ったな。モノノケ相手の契約に、書状の類など必要はないと」
あの祠の前を通り過ぎ、ここまでの道より更に荒れた道なき道を登りながら、那由他は言った。
「当然だ。我々モノノケにとって、たかが紙切れ一枚に何の価値がある？　破くか燃やすかしてしまえば容易く破棄される契約に、何の意味がある？」
先を行く彼が、下草を踏みつけ、道を塞ぐ蔓や小枝などの障害物を除きながら進むその後ろに従い、千恵も同じ道を登る。
「モノノケにとって力は生命（いのち）、命が力だ。使った力分が回収できないとなれば、モノノケにとって即死活問題だからな。使った力以上の見返りが確信できねばモノノケは契約など結ばない」
山の中は、時折鳥のさえずりが聞こえるだけでとても静かだ。
「契約の際に捧げられるもの――まず言霊はモノノケにとっては担保の様なものだ。例えば契約が不条理に破棄されることを防ぐための、な。だが、心血と魂は違う。それそのものが、モノノケにとっての報酬となる」
彼の後ろを歩く千恵には、彼の顔は見えない。ただ、彼の背を見上げながら、彼が語る言葉に耳を傾ける。
「心血とは、心臓を流れゆく血――精神と肉体の全てが凝縮された、モノノケにとっては最高のご馳走。魂は――言うまでもなく最上の糧だ。人や動物のように確かな肉体や生を持たぬモノノケは、より確かな生命を欲する」
パキッと小さく乾いた音を立て、葉の落ちた細い枝の先をへし折り、折ったそれをしばし眺めた後で地面へ放り捨てる。
「無論、ただでそんな報酬など得られない。契約者の方にも、差し出したものの分だけの見返りは……まあ、そこは人それぞれの考

えようによりけりだが」
ふと、歩く足元の地面の傾斜がなくなり、足首にかかる負担が軽くなった。
「今、お前が私と結んでいるのは、言霊の契約。私がお前の血を得る代わりにお前を守る、そういう契約だ。つまりお前は血という対価で私を護衛として買い、私を通して私の力を間接的に使っているわけだが」
すでに無いに等しかったような道が、そこで完全に無くなり、僅かながら、木々のひらけた空間に草原が広がり、暖かそうな日溜まりができている。
「――契約者が心血を差し出し、モノノケがそれを取り込み自らのものとした場合、他のモノノケらからはその契約者はそのモノノケと同一の存在と見なされ、そのモノノケと同じ力を自分で扱えるようになる」
そこで那由他は振り返り、こちらへ向き直った。
「――そして契約者が魂を差し出し、それがモノノケのものとなった場合。契約者はその瞬間、人間という生き物ではなくなり、我ら同様、モノノケとしての生を歩むことになる。老いや寿命は無くなるが……もはや、次の生で人として生まれ変わる事はかなわなくなる。――永久に、な」
じっと見下ろしてくる那由他を見上げ、千恵は頷いた。
「それは……。うん、私は……私も、魂の契約はしたくない……できない。それは、分かった。人じゃなくなったら……きっともう普通の暮らしはできないもんね」
そんなことになれば、当然両親は悲しむだろう。それでは本末転倒だ。
「でも、あれは血の契約のほうでもいいんでしょ？　魂の契約である必要はないんだよね？」
血の契約に必要なのは心血――心臓を流れる血。
「ああ、そうだな。確かに血の契約を結べばお前と私の場合、今、

印の力によって得ている加護ではなく、辺りに住まう我が眷属らを従え、使役を可能とする力がお前のものになる」

……単純に聞けば、いいことづくめのように思えるのだが。

でも、ひとつ気になることがある。

「ねえ、ひとつ聞いてもいい？　……心臓を流れる血なんて、どうするの？」

聞かれた那由他はひどく嫌そうな顔をする。

「――本当に、聞きたいのか？」

正直に言えば、あんまり知りたいと思える情報ではない。でも、知っておかなければならない情報でもある。

「ある意味当然だが……胸に心の臓まで届く傷を穿ち、そこへ直接牙を立てて血を啜る」

言いながら渋面を深め、

「……ほらみろ、聞かない方が良かったろう」

それを聞いて片眉をひそめた千恵に言う。だが千恵は首を左右に振りながら、

「あのさ、でもそれって、そんなことしたら死んじゃわない？」

と続けて尋ねた。

「言っただろう、血の契約を結べば私と同じ力が得られる。まあ、肉体の素地が人間である事には変わりないからな、瞬時にとは言わないが……一日大人しく寝ていれば治るだろうな」

那由他はため息をつく。

「だが、それに伴う苦痛は当たり前に甘受する事になる」

陽の当たる草原に腰を下ろしてあぐらをかいて寛ぎつつ、那由他は手を地面につきながら上半身ごと空を仰いで上向いた。

「私は封印される以前、巫女という名の生贄の血を糧に、常に恐れられながら存在してきた」

那由他は、苦い笑いを浮かべる。

「それこそ気の遠くなる程の時をここで土地神と称ばれて過ごしてきたが――こうしてまともに人と契約を交わしたのは……この土

地に棲まうようになってからおそらく初めてのことだ」
千恵はその隣に腰を下ろして草の上に直に座り、買ってきた弁当を袋から出す。
「私という、血を吸う化け物を人の住まう場所から遠ざけるため、人は私に供物を捧げてきた」
だが、それに関しての契約などは一切なかったのだ。
「しかし、その供物を受け取る限りは、最低限の安寧を返すべきだろうと……そう思い、私は土地のモノノケに加護を与えて従え、決して人里に降りぬよう制してきたが……」
渡された弁当を受け取りながら、那由他は周囲の景色をぐるりと見渡す。
「人の手による手入れを受け育った木々は、世話をする者の手が離れれば独力では生きられず、枯れゆくだけだという。……どうやらモノノケも同じらしい。私が封じられ、加護を受けられなくなったものたちの大半は力を失くし、滅びの道を歩んだようだ」
そう言う彼の顔は寂しそうで。
「今の私には、地霊の主の名も土地神の名も相応しくない。ただ、生き血を糧に存在しているだけのモノノケだ。そんなもののために、今以上の犠牲を望むなど……」
パックのおにぎりを頬張り、言葉を途切れさせる。
もぐもぐと口を動かし、飲み込む。また、一口。
途切れた言葉はそのままに、那由他は黙々と食事を続ける。
小さめのおにぎりが二つ、唐揚げと卵焼きと漬け物が入っているだけの至ってシンプルな弁当など、食べきるのにそう時間などかかりはしない。
プラスチックでできた透明のパックはあっという間に空になる。
だが、それでも那由他は黙り込んだまま。パックをコンビニの白いビニール袋に戻し、ごろりと草原に身体を横たえ、仰向けに寝転がった。
さわさわと風が吹き、周囲の草木と那由他の髪とをなびかせる。

今日も、天気は上々。風は少し冷たいが、ここは日が当たって暖かくて。

そして、いつのまにかついうたた寝をしてしまったのだ。

那由他はまだ、目を閉じたまま草原に身体を横たえている。

――やはり、その光景は一枚の絵のようで。その絵に見覚えがある気が――いや、もうこれは気のせいなどではないのだろう、……見覚えがあるはずなのを、忘れている。

（記憶を失くしている……？　私……も？）

時折、さわさわと木々をなびかせていた風が、突如ゴウと強く吹き付けた。

平和に揺らいでいた木々の枝が大きくしなり、ざわざわと音を立てる。

不意に那由他が目を開け、緊張感も露に跳ね起き、即座に臨戦態勢をとった。

「――控えよ、卑しきモノノケよ」

ぶわっと、ひときわ強い風が吹き付け、あれだけ晴れていたはずの空が見る見る間に厚い黒雲に覆われていく。

その中空から、荘厳な声がそう命じるのが聞こえ――

バリバリと耳がおかしくなりそうな大音声と共に稲妻が走る。

それは、すぐそばの草原を焦がし――

そのぴりぴりと肌を焼くような緊張に張り詰める空気の中で、その声は彼の名を、呼んだ。

確認するような口ぶりで。

「……そうか、お前が那由他か」

轟々と荒れる空に姿を現したのは――とぐろを巻く巨大な龍。

青みがかった緑色の鱗は、光の加減でキラキラ金色に輝き、背のたてがみは燃えるような赤い金色の毛が、美しく翻る。背には巨大な鳥の翼が生え、長い胴体には二本の手と二本の足とが生え、その

右手には不思議な色をした美しい玉を握っている。
口元から伸びる二本の長いひげは、吹き荒れる風などものともせず優雅にたなびき、頭に生える鹿のような形状の角も、美しい木材を丁寧に研磨したような――。
どこをとっても美しく、神々しい。
降るような威圧感と、それに相応しい威厳に満ちた姿の前に、身体は本能的にひれ伏そうとする。
見れば、那由他もまたその存在の前に膝を付き、頭を下げている。
「本当にやり遂げるとは……。成功率など五分五分……どころか無いに等しいと思っておったのにのう。人の子の執念というものは……まあ……。――しかしそれにしても」
ギロリ、と、猫のように細い瞳孔を持つ瞳で、那由他を睨みつけた。
「まだ年端もいかぬようであった娘にあれだけの覚悟で愛されながら……お前は何をしている？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4541z/

Eternal a Contract

2012年1月4日10時46分発行